ヴェーユと実存主義者たち⑧

村上吉男

これは前号に続く拙論である。(1)

筆者が先きに記した「使い分け」とは、不断一般的に使用している語が、たとえば意識、精神、 わたしという、脳を代表させもする各語がサルトルにあって、脳すなわち〈意識〉全体を〈意識〉 であらわすほか、そこに〈精神〉と〈わたし〉の各〈場〉を織り込ませるように用いられると、 さらにいえば、一に、〈意識〉自体を〈即自〉や〈対自〉として、一に、〈精神〉を〈意識〉と〈精 神〉間における、諸〈観念(能力)〉の〈受動〉の〈場〉として、ならびに外的〈世界〉と〈精神〉 間における、〈諸感覚〉の〈受動〉の〈場〉として、一に、〈わたし〉を〈意識(即自)〉に代わっ て〈精神〉に働きかける〈能動〉の、かかる二〈場〉間の一方の〈場〉として見立てるように用 いられるといわせ得るところにある。だが筆者をはじめ誰もが自分を、およそ上記した〈意識〉 〈精神〉や〈わたし〉のいずれかによって表現できると思われるにもかかわらず、彼はもっぱら 〈意識〉の何か(何かの一には〈意識存在〉のことが想定されよう)をめがけるために、〈精神〉 や〈わたし〉を持ち出してみては、〈意識〉全体の「使い分け」をあらわすに利用させたにあって、 要は〈精神〉や〈わたし〉を〈意識〉全体の――として配置させたにあって、問題は彼ばかりか 筆者に、〈精神〉(の場)がだけではなく、〈わたし〉(の場)が〈意識〉(の場)に勝るごとく捉 えられるかの、勝ることなくば、いかにみられるかの判断を迫まることにある。〈わたし〉に関 しては、すでに一見していた。すなわち〈わたし〉は〈意識(即自や対自)〉に「付け足しにさ れた」と。それでも〈わたし〉はこうした関係や程度で扱われるしかないのか、今一度確かめる 必要があろう。と同時に〈精神〉の方もまた〈意識(即自や対自)〉に「付け足しにされた」に すぎないと受け取られるのか、明かしおく必要があろう(ここで〈意識〉全体が〈意識〉〈精神〉 や〈わたし〉の各〈場〉で構成されるとみた、かかる「便い分けしから、予め指摘しておかねば ならぬことは、この〈意識〉全体がいわゆる〈脳〉の「現実」に、ヴェーユにいわせると、その 〈自然の必然性〉に照らし合わせても合致させられるのか、そうでないならば、この〈意識〉全 体それ自身をして、彼自らの〈思惟(認識)(観念)〉操作以外でもたらされないことを、要は彼 のめざす哲学を〈観念(論)〉で組み立てるほかないことを示さずにいない一証左たらしめるで あろうと付記することにある)。

繰返しいうが、〈意識〉全体が当の〈意識〉と呼ばれる〈場(部位)〉と〈精神〉や〈わたし〉 の各〈場(部位)〉たる、いわば三本立てによって成り、それぞれでもって、何よりもまず「〈意 識〉(即自)から〈精神〉への関係」から出発させ、次いで「〈精神〉から〈意識〉(即自)への 関係」をかたちづくらせると一見してきたなかで、唯一外的〈世界〉に関係させたは〈精神〉で あった、つまりこの外的〈世界〉は〈精神〉に〈受動〉的に関与したがゆえに、〈意識(即自)〉 にはかかわることがなかった(〈受動〉的に関係する外的〈世界〉は〈わたし〉にさえかかわる ことがない。〈わたし〉だけは〈能動〉的に外的〈世界〉にかかわる)のだからだ。そこに立っ て〈意識(即自)〉〈精神〉〈わたし〉や外的〈世界〉のおのおのがさらにどう捉えられるかを順 次語るに、〈意識(即自)〉は一に、〈精神〉のごとき〈受動〉の〈場〉ではなく、以下に記すと ころの〈理性(知性)〉が働きかける、〈能動〉の〈場〉であったと、一に、この働きかけ(能動) を可能にする〈意識(即自)〉にも、筆者は哲学(観念)上の〈意識(即自)〉と「現実」のそれ が窺われるといわねばならなくなる。その際、「現実」の〈意識(即自)〉とは、〈意識〉全体を 前述した「脳」とみなしおけば、この一〈場〉なる〈意識(即自)〉の、「脳」内での実際の動き (「行動(運動)」) すなわち〈意識(即自)〉自らが取り出す対象に働きかける〈能動〉をさすこ とになろう。したがって、こうした「脳」内の、要は〈意識(即自)〉内の働きかけ(能動)の 対象が外的〈世界〉であることはないばかりか、この例で示されるような、他との関係にあって、 ここではしかし、筆者にいう「〈意識(即自)〉から〈精神〉への関係」だけにかぎられてこよう が、〈意識(即自)〉は上記した「関係」の〈精神〉に対し、〈能動〉的に働きかけることをも含 意させると確認しておく必要がある。むろん〈意識(即自)〉が哲学(観念)上のや「現実」の にしろ、かかる〈能動〉を可能にするは、彼が〈意識(即自)〉に配置させるにちがいない〈理 性(知性)〉であり、この能力において、〈意識(即自)〉が、換言すると〈理性(知性)〉が自ら に見出した対象を、かのデカルトに語らせる〈思惟する (penser)〉(能動) とその〈思惟 (pensée)〉(受動)のように、〈思惟(認識)(観念)する〉(能動)ことになっては、その〈思 惟(認識)(観念)〉(受動) が導き出されると繰返し得る。ここに記す〈能動〉と〈受動〉はデ カルトに〈同一のことがら〉といわれたかぎり、筆者には、一〈観念(能力)〉を成り立たせる ために欠かせない要件であると、 たとえばサルトルが述べた〈感覚(という観念)〉も、 また「否 定(拒否)」や〈投企〉もそれぞれ、〈感覚する(感じる)sentir〉「否定するnier」「拒否する refuser」や〈投企するprojeter〉たる〈能動〉による〈受動〉という〈観念(能力)〉にすぎな いとみることができる。だから〈意識(即自)〉すなわち〈理性(知性)〉の〈作る〉(能動)〈作 られる〉(受動)働きにおいて、その〈感覚(という観念)〉をはじめとした、あらゆる〈観念(能 力)〉は、すべて〈精神〉に伝達されると彼にいわせるにしても、〈意識(即自)〉には〈理性(知 性)〉のみがそのまま居残ってなければならぬのだ。万が一〈理性(知性)〉が〈意識(即自)〉を代表させる能力でないとみなされるならば、かかる働きの〈場〉はいずこに見出されるのであろうか。〈精神〉や〈わたし〉の各〈場〉であろうか、それとも〈身体〉なのか。さらにその〈理性(知性)〉が自らに求めた対象をたとえば〈投企〉と名付けたり、諸〈観念(能力)〉を操作しては論理的に組立てたりする働きにないと、要は〈意識(即自)〉に〈理性(知性)〉がないと語られるならば、彼の哲学はそもそも成るのであろうか、彼が何度か繰返し強調する〈意識存在〉〈存在意識〉〈即自存在〉や〈対自存在〉という〈存在〉をめざそうと試みた哲学はいったい何かとなろう。さらにまた〈理性(知性)〉が〈意識〉に、しかも〈即自〉にない(〈意識(対自)〉は〈無〉がゆえに、〈理性(知性)〉は〈対自〉に見当たるはずがない)とされるならば、〈精神〉〈わたし〉や〈身体〉はたまた外的〈世界〉も問われることがないし、どうでもよいことになろう。以上はしかし、すべて否でなければならない。そこからは、〈理性(知性)〉が〈意識(即自)〉になくてはならぬ能力であると結語される。だが上記している諸〈観念〉(名辞)のうち、筆者は彼の哲学がめざすと記させた〈存在〉に例をとって、〈意識(即自)〉がその〈理性(知性)〉をして〈存在〉なる〈観念〉に何を語らせるかをさらに答えおく必要がある。

La notion même de conscience ne fait que renvoyer à mes consciences possibles. (2)

意識という観念さえ、わたしの可能的な意識を指示させるだけである。

La conscience est un être pour lequel il est dans son être conscience du néant de son être. (3)

意識は意識存在のうちに、意識存在の無の意識があるところの、ひとつの存在である。

一見して関係すると思えない、上記二引用文であるが、筆者からみると、次の点で共通してくる。すなわち最初の引用文に、〈意識という観念〉の語句が〈さえ〉とまで付記される以上、〈意識〉はむろんのこと、二番目の引用文中の〈存在〉も、その〈即自〉なる〈意識〉で〈産出〉された〈観念〉にすぎなくなると。だからサルトル哲学はこの〈意識〉〈存在〉〈即自〉の語(名辞)をはじめ、あらゆる〈観念〉をから、要は哲学(観念)上で欠かせない〈観念〉を〈作り出す〉ことからしかはじまらないといわねばならぬわけである。しかも〈観念〉は彼に〈意識〉をして〈わたしの可能的な意識〉たらしめるに等しくなると語らせるからして、たとえば二番目の引用文で、〈ひとつの存在〉と書かれた〈存在〉も〈意識〈即自〉〉により生み出された〈可能的な〉〈存在〉になり、こうした〈可能的な〉〈存在〉はまさに〈無の意識〉とみなされる〈意識存在〉にとっ

て、「本来的存在」であろう〈対自存在〉をさすほかないと察知される。ここでいう〈ひとつの 存在〉が〈対自存在〉と見て取れるのだから、筆者がときに述べた、例の「もう」〈ひとつの〉 という表記での〈存在〉は「現存在」といわれよう〈即自存在〉であるにちがいない。〈意識存在〉 の「もう」〈ひとつの存在〉たる、この〈即自存在〉こそ〈可能的な意識〉を打ち出せる、〈意識〉 のひとつの〈場(部位)〉として〈存在〉するのであり(この〈場(部位)〉が〈ひとつの存在(対 自存在)〉に〈変化 (変身)〉させられる際はもうひとつの〈場 (部位)〉に代わるといえよう)、〈意 識(即自存在)〉の〈場〉なくば、そこに〈可能的な意識〉すなわち〈意識〉〈存在〉〈即自〉〈対 自〉や他のもろもろの〈観念 (用語) (名辞)〉 すらもたらされることがなくなろう。 それゆえ〈意 識存在(存在意識)〉には彼にいう、〈対自存在〉を導出させる〈即自存在〉が不可欠となるし、 わけても「現存在」である〈即自存在〉には筆者にいう〈理性(知性)〉がなければならぬこと をして、そのゆえんたらしめよう。だが〈意識(即自)〉の〈理性(知性)〉で〈産出〉される、 上記した哲学(観念)上の各〈観念〉が、そのうえ各〈観念〉の一として加えられた、当の〈理 性(知性)〉が〈存在〉すると彼にいわせることは諒とみなされることであろうか。なるほど彼 が〈わたし(サルトル)〉として、例の〈感覚〉のことを取り上げた際でさえ、これを〈感覚(と いう観念)〉と記させたり、〈外在性(外的〈世界〉)から成〉る、〈感覚を弁護するために、また 感覚に存在を与えるために、...ひとつの場を思い描く〉と述べたりしたところからは、〈感覚〉 が〈存在〉するとみられなくもない。しかしながらこの外的〈世界〉から「受容される」、「現実」 の〈感覚〉にだけでなく、哲学(観念)上の〈感覚(という観念)〉にも〈存在を与え〉ねば、〈存 在〉は哲学(観念)上のにあってすら、矛盾する表現になろうし、そうでなく捉えるにせよ、両 〈感覚〉は果たして〈存在〉すると明言され得るかなのである。筆者はここでかのデカルトの言ゆ を待たずとも、サルトルにいう、かかる「現実」の〈感覚〉も、さらに哲学(観念)上の〈感覚 (という観念)〉も〈表象〉にすぎないと断じる。すなわち前者は〈精神〉に「受容される」〈受動〉 としての〈表象〉であり、後者は〈意識(即自)〉が自らに見出す対象に働きかけることで、そ の一たる〈感覚(という観念)〉をもたらす〈能動〉としての〈表象〉であったと。だからこう した「現実」の〈感覚〉や〈感覚(という観念)〉がそれぞれ〈精神〉や〈意識(即自)〉に思い 浮べられたり、デカルトにいう〈かたちや像〉として刻まれたりする〈表象〉に、または〈観念〉 になるとされるかぎり、筆者はこれらの〈感覚〉がサルトルにいう〈意識〉全体のうちの、この 各〈場(部位)〉におのおの〈存在〉しているとはみえてこないといわねばならないわけである。 しかも、この各〈感覚〉が記憶に残らないか、他の〈感覚〉の〈産出〉に代えられたりしては、 たちまち各〈場(部位)〉から消え去るにちがいない〈表象〉すなわち〈観念〉に対して、もは や〈存在〉するといい切れないばかりか、およそ各〈感覚に存在を与えるために〉という記述は、 加えてここに〈可能的な意識〉の語句から〈可能的な〉の表記を参照にいうと、各〈感覚〉が〈精 神〉や〈意識(即自)〉のおのおのに、〈可能的な〉各〈感覚〉として配置される、いわば「未来」 的な〈存在〉なる〈表象(観念)〉を含意させると筆者にいわせ得るのであり、現に〈存在〉し ていることを示しはしないのだ。また〈可能的な意識〉が〈わたしの可能的な意識〉と限定され た〈わたし(の)〉は〈意識〉すなわち〈わたし〉と受け取らずとも、その哲学(観念)上の〈わ たし〉をではなく、サルトル本人をさすと付加しておく。だから彼本人のこととしてなおもいう と、彼たる〈わたし〉が現に〈存在〉していることは確かである(この〈わたし〉が〈存在〉し ないとみられるならば、次段落から取り上げよう、哲学(観念)上の諸〈観念〉さえいったい何 かといわれかねないであろう)が、しかし筆者にはこの〈わたし〉が〈わたし〉の、まさに今の 〈意識〉なる〈存在〉をよりも、「現実」の〈可能(未来)的な意識〉なる〈存在〉を自らにたえ ず質さねばならなくなったと、換言すると彼本人の〈意識〉なるものの反映が彼のめざした哲学 での哲学(観念)上の〈意識〉にちがいなかろう〈意識〉は、それでもその〈存在〉をして「現 実」の、つまりまったき今なる「現実」の〈意識〉の〈存在〉を問わせるのではなかった、たと えばヴェーユのように、〈生の現実〉にかかわり、これを受け入れることにあるのではなかった ということである。要は現に外的〈世界〉下のそこに〈存在〉する、もろもろの〈存在〉がでは なしに、彼自らの、すなわち哲学(観念)上の〈意識〉なる〈存在〉がどうあるかを語るだけで あったのだ。

ことほどさように、「現実」の〈可能的な意識〉にもなり得る〈意識存在(また存在意識)〉は、 これをまずは「現存在」たる〈即自存在〉として割り当て、次いでこの〈即自存在〉から、「本 来的存在」たる〈対自存在〉に〈向か〉わせることを強いる。サルトルにいう、その〈即自存在〉 や〈対自存在〉がしかし、哲学(観念)上のことにあって、各〈観念〉として生じることは前段 で触れたことから、この哲学(観念)上のことでは〈即自存在〉や〈対自存在〉といわれるがゆ えに、おのおのを〈存在〉せしめるとみてかまわぬやも知れないが、「現実」のことでは、つま りまったき今なる、ならびに〈可能的な〉(を含意させる)「現実」のことでは、それぞれ(〈即 自存在〉や〈対自存在〉)を〈存在〉させるはずがない。なぜならいずれの「現実」のことでも、 サルトルをはじめとする人間たちや彼らの〈意識〉が〈即自〉や〈対自〉をそれこそ〈意識〉し て〈存在〉しているのではなかろうからである。ところで哲学(観念)上のことに関してなおも いえば、彼がそこに立ち、上記した〈即自存在〉や〈対自存在〉などと名付け得る諸〈観念〉を 〈産出〉させたは、筆者が〈意識(即自)〉に唯一〈存在〉するとみた〈理性(知性)〉による以 外になかろうと。したがって筆者にすれば、彼自ら所有する〈理性(知性)〉を哲学(観念)上 のそれに見立て、ここから、彼は〈意識(即自)〉をはじめとした〈観念〉を案出し、〈観念〉の いくつかを〈存在〉させるとまでいい放つと。彼の場合、はじめに〈理性(知性)〉が〈存在〉 しないで、どうして〈即自〉や〈対自〉の、〈事物や他者〉の、要は〈もの〉の〈存在〉ではない、

諸〈観念〉(用語)が、かつかかる用語のみか、その論理的〈脈絡〉に従わされたと思える、哲 学(観念)上のや「現実」の〈可能的な意識〉などという〈観念(思想)〉(ここでは語句)がこ の〈理性(知性)〉の駆使によって打ち出されてくるのであろうか。打ち出されるといえるかぎ り、換言すると〈理性(知性)〉により〈思惟(認識)(観念) する〉とみえるかぎり、哲学(観 念)上の〈観念(表象)〉は〈意識(即自)〉や〈精神〉に各刻まれ〈存在〉するにちがいない。 このことは少なくも、彼が他で〈認識する〉〈認識される〉と記したことから、この〈能動〉と〈受 動〉を可能にする〈脳〉(〈脳〉はこの場合〈意識(即自)〉の〈場〉をさす)の一能力〈理性(知 性)〉が〈存在〉せずに成り立たない証左になろう。しかしながら、〈観念(表象)〉が〈意識(即 自)〉や〈精神〉の各〈場〉に刻み込まれたにしても、「まったき今なる、ならびに〈可能的な意 識〉の「現実」」において、〈存在〉するか、しかも〈観念(表象)〉通りに〈存在〉できるかは 疑わしいと答えておく。またここで、筆者がこの〈意識(即自)〉のほか、〈精神〉や〈わたし〉 の各〈場〉で、〈意識〉全体が構成されるとみたことについて触れおくと、たとえばデカルトが 〈脳〉解剖の実験に立ち会って、当時のもろもろの〈部位(場)〉(名称)をもって見定めていた のに比べ、サルトルにいう三つの〈場(部位)〉がそれぞれ、〈脳(意識)〉全体のうちの、どこ を占めるのか、さらに〈即自〉が〈対自〉に〈変化(変身)〉する際、〈脳(意識)〉全体はその 内部や表面も含めた全面が〈対自〉に、〈対自〉の〈無〉にさせられるのか、それとも〈意識(即 自)〉の〈場〉だけにかぎられ、〈対自〉やその〈無〉に晒されるのか、さすれば〈無〉は〈精神〉 や〈わたし〉の各〈場〉にかかわるのか否か、はたまたそのとき〈精神〉や〈わたし〉をどのよ うに〈脳〉の内部か表面かに、哲学(観念)上のこととしても浮かび出されるか、消え去られる かさえ、彼は一切答えてはくれない(以上のことはさらに後述するが、彼の哲学が哲学(観念) 上の〈意識〉における、〈即自〉の〈対自〉への〈変化(変身)〉を中心に語るだけにとどまるよ うにみえる以上、その試みは〈存在論〉を主眼にするのではなく、〈観念論〉にあろうことを露 呈させずにいないと察知される)。だからそのなかで、筆者には〈意識(即自)〉の、対〈精神〉 や〈わたし〉の各〈場〉との例でいえよう、他の〈場〉への関係が〈意識(即自)〉からする〈能 動〉関係にあると、したがって〈意識(即自)〉はこの〈能動〉だけの役割を有する〈場〉であ るとみえるし、そう読もうにもかかわらず、彼にかかる答えを見出せないのが最たる不満なので ある(サルトルを語ることでも、浅学の筆者にすぎないがだ)。

前段までに記した〈意識(即自)〉に続いて、〈精神〉のことはどうであったか。たとえば〈精神〉は、〈意識(即自)〉における〈理性(知性)〉の〈作る(能動)〉〈作られる(受動)〉という働きで生じる、あらゆる〈観念(能力)〉が伝えられたり、一方では外的〈世界〉が〈諸感覚〉として「受容され」たりする、〈受動〉の〈場〉になるといえた。こうした見方は疾うに一見したところである。そこでこの上記したことを除いて、筆者は一度触れた〈精神〉に関することに

はできるだけ繰返さずに済むように配慮しても、その〈精神〉については何を結語し得るのかで ある。サルトルが〈精神〉を持ち出したは、〈意識(即自)〉が自ら生み出す〈諸感覚〉と諸「感 情」(嘔吐や不安)をはじめとした、あらゆる〈観念(能力)〉の、また外的〈世界〉から〈精神〉 に「受容される」、「現実」の〈諸感覚〉の、いわば集合の〈場〉を用意することにあった。だが 〈精神〉はなぜ各能力の〈受動〉としてのたまり〈場〉とされたのか。それは〈意識(即自)〉が 〈意識〉全体のなかの、他の〈場〉に対し、〈能動〉的に働きかけるとみられる以上、この哲学(観 念)上の〈精神〉は〈精神〉側からみると、〈受動〉的に配置された〈場〉でなければならないし、 「現実」の〈諸感覚〉が「受容される」〈精神〉も〈受動〉の〈場〉であることに変わりはなかっ たからである。それに加えて、哲学(観念)上のことでは、〈意識(即自)〉は自らが〈産出〉し た、あらゆる〈観念(能力)〉を自らの〈場〉に残存させずに、〈精神〉に伝えたと再度いうにし ても、何ゆえとみることができるのか。〈意識〉全体を〈意識 (即自と対自)〉〈精神〉や〈わたし〉 で構成した彼にあって、たとえば外的〈世界〉は、〈意識(即自)〉に関係しないと、しかし〈精 神〉〈わたし〉や〈意識(対自)〉のそれぞれに関係するとすでに触れおいたように、「関係しない」 という関係も含め、当の各〈場〉でさえ相互に何らかの関係にあろうと捉えないことには、どう して彼が〈意識(即自と対自)〉のほかに、〈精神〉や〈わたし〉を持ち出したのか分からなくな る(したがって彼は〈意識(即自と対自)〉に〈精神〉や〈わたし〉を関係させ得た)し、かか る関係なくして、彼に主張される〈統合〉は哲学(観念)上のことであっても、およそ絵に画い た餅(絵空事)になる。だから筆者はこの関係を〈意識(即自)〉と〈精神〉や〈わたし〉にみ ると指摘したことにおいて、まずは「〈意識(即自)〉から〈精神〉への関係」を、次いで「〈精神〉 と〈わたし〉の関係」を、そして「〈精神〉(もしくは〈わたし〉)から〈意識(即自さらには対自)〉 への関係」をこの順次(の関係)で取り上げ各間うことができるわけである。そこで上記した「ま ずは」の関係では、〈意識(即自)〉の〈理性(知性)〉で働きかけ生じた、あらゆる〈観念(能力)〉 がそのもととなった〈理性(知性)〉能力本体を〈意識(即自)〉に残し、〈精神〉に「受容される」 という、〈意識(即自)〉の〈能動〉と〈精神〉の〈受動〉の関係にあったことを確認しておくべ きである(「次いで」や「そして」でいう各関係が〈能動〉〈受動〉関係を有するか否かは後述に 譲る)。それにまた、筆者にいう〈能動〉〈受動〉が一能力を成り立たせるに関係して用いられる ともみることができた。〈感覚〉を例にして語ると、彼にあって、〈理性(知性)〉が自ら目的に 定めた対象に発揮する能力〈感じる〉は何かしらデカルトにいう〈思惟する(penser)〉に与し た一能力にみえたり、しかも〈作為する(faire)(作る)〉〈作られる(être fait)〉の両語が「存 在と無」の作品に使われたりするからであろうか、筆者にはこの〈感じる(sentir)〉が〈能動〉 能力として、その作用から生み出された〈感覚(sensation)〉(たとえば〈理性(知性)〉で〈マ ロニエの樹〉を見て(感じて)〈マロニエの樹〉)が〈意識(脳)(即自)〉に〈能動〉能力として 《表象(観念)》されては、〈感じる〉とその〈感覚〉がデカルトにさらにいわせよう〈同一のことがら〉になる関係を有するごと〈に聞こえて〈る。だが〈意識(即自)〉はあらゆる〈観念(能力)〉を一度は〈精神〉に伝達させたあと、彼はこれも不思議に思われることに、そのうちの、〈理性(知性)〉的〈観念〉とおぼしき能力(筆者はたとえば〈投企〉〈参加〉〈行動〉や〈選択〉などをこの能力に相当させる)を〈精神〉に残存さすがままにし、かの哲学(観念)上のと「現実」の〈諸感覚〉ならびに哲学(観念)上の諸「感情」(嘔吐や不安)を、〈精神〉(もしくは〈わたし〉)にばかりか、〈意識(即自)〉にさえこれ以上かかわらせないようにするためか、要するにサルトルは〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安)を忌み嫌い、わけても〈意識(即自)〉(の〈場〉)に再度「受け入れ」させない意図を持ったがためか、筆者にいう「否定(拒否)」の〈観念〉でもって、「否定(拒否)」するほかなかった。なぜかといえば、彼は〈意識〉全体のなかでの〈意識(即自)〉を〈理性(知性)〉だけで満たされる〈場〉にさせたかったと思えるからである。

そこで以上を踏まえ、〈精神〉について語るに、〈精神〉は、前段で「まずは」とした「〈意識(即 自)〉から〈精神〉への関係」と、同じく「そして」とした「〈精神(もしくは〈わたし〉)〉から 〈意識(即自)〉への関係」とに、この語が見受けられるにしても、かつ「まずは」とした関係は 疾うに一見したがゆえに、ここで繰返させないというにしても、「そして」とした関係にあって、 この関係が何ゆえ、「〈精神〉(もしくは〈わたし〉)から」と記されるほどに、〈精神〉に求めら れたのかである。筆者が思うに、それは〈意識(即自)〉が〈意識(対自)〉に〈向かう〉ために、 〈精神〉(実際には〈わたし〉)を新たに〈意識(即自)〉にかかわらせなければならず、これには 「次いで」とした「〈精神〉と〈わたし〉の関係」をいかにかすることでしか〈意識(即自)〉に 繋げられないことにあった。〈精神〉はあらゆる〈観念(能力)〉の、また「現実」の〈諸感覚〉 の〈受動〉の〈場〉であるとともに、〈わたし〉を外的〈世界〉に関係させる〈受動〉の〈場〉 でもあった。だから〈精神〉と〈わたし〉の各〈場〉との関係において、〈精神〉の方が〈受動〉 の〈場〉とみなされるならば、〈わたし〉の方は〈能動〉の〈場〉となって〈精神〉(筆者のみる ところ、〈精神〉に伝えられた〈理性(知性)〉的〈観念(能力)〉すなわち〈投企〉など)に働 きかけるようにかかわる以外になくなろうし、このことはすでに触れおいたことである。これを 外的〈世界〉側に立っていえば、外的〈世界〉は〈意識〉全体中の〈精神〉と〈わたし〉の各〈場〉 に関係する、すなわち一方では〈精神〉(の〈場〉)に〈受動〉的にかかわり、他方では〈わたし〉 (の〈場〉)をして〈能動〉的にかかわらせるところになろう。そこで筆者は外的〈世界〉との関 係を、この先〈受動〉の〈場〉としての〈精神〉と〈能動〉の〈場〉としての〈わたし〉の二つ に分け、まずはかかる〈精神〉についてみようとも、サルトルは何ゆえその〈受動〉の〈場〉た る〈精神〉に、あらゆる〈観念(能力)〉が伝えられたり、「現実」の〈諸感覚〉が「受容され」 たりすると語ったのか。これは一に、外的〈世界〉に、〈精神〉が「現実」の〈諸感覚〉によっ

て〈受動〉的に、また〈わたし〉が〈能動〉的に各関係していた場合を除いて、外的〈世界〉は 彼に「〈意識 (即自)〉に関係しない」と明言されることに起因したと、だから一に、〈意識 (即自)〉 に外的〈世界〉からの〈諸感覚〉が、ましてや諸「感情」(嘔吐や不安)が「受容される」こと はなかったと、要は〈意識(即自)〉は自らによる〈諸感覚〉と諸「感情」(嘔吐や不安)を〈産 出〉するだけにかかわったと、そのうえーに、こうした諸〈観念(能力)〉を〈産出〉できたは〈意 識(即自)〉が有する〈理性(知性)〉に従うからにほかならないし、この〈理性(知性)〉が働 きかける対象はそれ自らが「目的に定めた対象」であり、外的〈世界の諸対象〉ではなかったと、 だから一に、外的〈世界〉が、さらにいわば〈受動〉的〈精神〉や〈能動〉的〈わたし〉がそれ ぞれ、〈意識(即自のみか対自)〉をばかりか、これらの相互を対象にして〈思惟(認識)(観念) する〉ことはなかったと、要は〈意識(即自)〉を除いた外的〈世界〉〈精神〉や〈わたし〉がお のおの、たとえば、それ自身で他を〈認識したり、利用したり〉、かの〈嘔吐〉や〈不安〉と命 名できたりする〈理性(知性)〉の機能を持ち合わせてはいないことによったといえるからであ る。この外的〈世界〉〈精神〉や〈わたし〉に各〈理性(知性)〉の機能がないのは、哲学(観念) 上のことでも「現実」のことでもそうなのだ。それに〈思惟(認識)(観念)する〉機能に与る ことがないとみた外的〈世界〉と〈わたし〉を、哲学(観念)上のことにあって、〈意識(即自)〉 の〈理性(知性)〉が〈他者〉と名付けたが、それでもなぜか〈精神〉に対し、〈他者〉とも何か とも命名したりはしなかった(序でにいうと、〈精神〉が〈無化〉や〈無〉にされるとした表記 も見当たらないのだ)。むろん、〈事物や他者〉と表現さすだけか、この謂で〈即自存在〉と呼ば れる外的〈世界〉の、その〈他者〉は、〈意識〉全体のなかの一〈場〉である〈わたし〉を〈他者〉 とみなす、この〈他者〉とは相違させて捉えられねばなるまい(〈意識〉にも〈即自存在〉なる 表記が見受けられた。「現存在」をさす、この〈即自存在〉はしかし〈もの〉でなかった点で、〈も の〉がゆえの、〈他者〉たる外的〈世界〉(〈即自存在〉)との違いを明確にさせておかねばならな くなる)。

さりとて、今上記したこと、たとえば〈精神〉が〈他者〉とは表記されていないことは、それが何を示唆させるかは別にして、外的〈世界〉や〈わたし〉が各〈他者〉としてあらわされたことに比べて(これも各〈他者〉との相違は別にして)、またたとえば〈精神〉が〈無化〉や〈無〉と記されていないことは、〈意識(即自)〉が〈無化〉に、〈意識(対自)〉が〈無〉に、〈自ら(自己)〉が、要は〈わたし〉が〈無化〉や〈無〉にされると表現されたことに比べて、サルトルが〈精神〉をいかに見立てるかを、前記した語句では、〈精神〉に「何を示唆させるか」を語るからして、〈精神〉は〈他者〉の扱いでも、〈無化〉や〈無〉の表示でもなくなったのか、その彼の語ることを筆者なりに取り上げてみなければならない。筆者が例にするは、先記していた、「外的〈世界〉との関係を、...〈能動〉の〈場〉としての〈わたし〉(にみる)」という、あるいは「〈精神〉(も

しくは〈わたし〉)から〈意識(即自)〉への関係」という各語句に関してであり、それぞれが何 を意図させるかを探ることによって、明かされるばかりか、この証明を筆者なりに試みては、筆 者が「〈精神〉は〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」」と記してきたことに対してもようや く答え得るのだ。以上をみるうえで、それでも予め断わるべきは、筆者が『存在と無』を読んで 教えられ、〈精神〉や〈わたし〉を上記した各語句にまとめたとて、彼がこのような各語句で、〈精 神〉や〈わたし〉をあらわしていたのではないこと、たとえば「付け足しにされた」という表現 は筆者の試みであって、彼の言ではないこと、しかし先記二語句中の〈わたし〉に関しては、い ずれも同じ〈わたし〉を、さらに〈わたし〉だけか、〈精神〉も哲学(観念)上の、また「現実」 のそれぞれをさすことにある。そこで筆者は、「〈精神〉(もしくは〈わたし〉)から〈意識(即自)〉 への関係」と書いた語句より、「もしくは〈わたし〉」を当面外したうえで、〈精神〉のことを質 してみる。しかしながら〈受動〉の〈場〉の役割以外にない〈精神〉と〈意識(即自)〉との、 この関係は成り立つはずがなくなろう。なぜなら「〈精神〉から」とは〈精神〉が働きかけるの を意味させることだから、〈受動〉(の立場) に立っていえることではないからである。にもかか わらず、筆者がこうした関係として記したは、〈精神〉と書かずに捨ておいたままでの関係を問 うのでは、〈意識(即自と対自)〉〈精神〉や〈わたし〉の各〈場(部位)〉で構成されよう〈意識〉 全体の関係(繋がり)はなくなるのでないかと、彼が〈統合〉と語ったは何かと疑問をたえず抱 えてしまうことにあるからである(すでに筆者は〈統合〉には〈精神〉が加わってこないことを 承知しているのだが)。〈意識〉全体のそれぞれがまずは相互に関係する(繋がる)と捉えなくば、 まったく〈わたし〉の出番もなく、どうして〈意識〉は〈対自〉になることができようか。不可 能なのだ。筆者が〈精神〉に括弧して、この〈わたし〉を付したのは、かかる「関係(繋がり)」 を求め見出すためにほかならない。このことを以下で順次みる前に、「〈精神〉 から〈意識 (即自)〉 への関係」とした際の、その〈精神〉はどのように見立てられ扱われたかを筆者なりに語らねば なるまい。〈精神〉は〈意識(即自)〉で〈産出〉したあらゆる〈観念(能力)〉が伝達されたり、 外的〈世界〉からの〈諸感覚〉が「受容され」たりする〈場〉で、〈受動〉たる動き(「行動(運 動)])の働きしかしなかったがゆえに、〈精神〉自身で〈意識(即自)〉へ〈能動〉的に働きかけ る動き(「行動(運動)」)は、哲学(観念)上のや「現実」のことでも不可能であるといえた。 だが彼は何ゆえ〈意識〉(全体)に、その一たる〈場〉〈精神〉を作り上げたのか。それは上記で 知る通り、〈精神〉が〈諸感覚〉をもって外的〈世界〉と関係せしめる〈場〉にさせるためであっ た。つまり彼はなかでも〈諸感覚〉を忌み嫌っていたのかどうか分からねど、なぜか外的〈世界〉 からの〈諸感覚〉を〈意識(即自)〉に取り入れようとは認めなかった。だから彼が〈感覚〈と いう観念)は意識と世界との関係に関する、確かな理論からは決然と締め出されなければならな い〉と述べた既出引用文は、筆者がしばしば記した、「〈意識(即自)〉は外的〈世界〉に関係し ない」との証左になる以上、「現実」の、かかる〈諸感覚〉と関係させられる〈場〉が〈意識(即自)〉以外に設定されねばならなかった。それが〈精神〉といわせる〈場〉であり、〈人間と世界は相対的な存在であ〉るという「人間」にとって、外的〈世界〉と〈相対的〉にかかわるためには、この〈精神〉が「人間」をあらわそう〈意識〉(全体)の一としてかたちづくられ、〈諸感覚〉をもたらす外的〈世界〉に対応せずにおられなくなったことにある。このときしかし、こうしたかかわりにあって、〈精神〉にその「現実」の〈諸感覚〉だけでなく、これを含めた、あらゆる〈観念(能力)〉が、そのなかには例の〈投企〉〈参加〉〈行動〉や〈選択〉という各〈観念(能力)〉が居残り〈存在〉するとみるにしても、このそれぞれが〈意識(即自)〉によって、また外的〈世界の諸対象〉によって生み出されては、〈意識〉全体のうちの一〈場〉に〈受動〉的にかかわらざるを得なくなるとされるからして、その〈場〉たる〈精神〉が〈意識(即自)〉にはむろんのこと、外的〈世界〉にさえ各「付け足しにされた」と指摘できるは、筆者一人だけが思うことであろうか。そうではないはずである。なぜならなかでも外的〈世界〉が〈意識(即自)〉に関係すると語られるならば、〈精神〉は彼に構想されずに済ませられたであろうといえるからである。要するに筆者にとって、〈精神〉はあたかも外的〈世界〉用として作り上げられたかのように映るのである。

以下を想起してみる。「〈意識(即自)〉から〈精神〉への関係」では、〈精神〉は〈意識(即自)〉 のあらゆる〈観念(能力)〉が伝達(受容)される〈場〉であったために、〈精神〉は〈意識(即 自)〉に「付け足しにされた」という表現が可能になった(そうでなくば、〈精神〉にとって、〈意 識(即自))からの、かかる伝達(受容)関係はなくてよかろう)。この関係がまた〈受動〉のそ れであるは、〈精神〉をしてとくに、外的〈世界〉からのを含む〈諸感覚〉を、あるいは諸「感情」 (嘔吐や不安)を伝達(受容)せしめた関係にあることをもさした。なかでも諸「感情」たる〈嘔 吐〉や〈不安〉は、「〈意識(即自)〉が外的〈世界〉に関係しない」と捉えられていたがゆえに、 〈意識(即自)〉が〈産出〉する〈観念(能力)〉でしかないのであり、もはや外的〈世界〉(たと えば〈マロニエの樹〉)から〈精神〉に、ましてや当の〈意識(即自)〉に「受容される」〈観念(能 力)〉でないことが明かされた。要は〈嘔吐〉や〈不安〉なる諸〈観念(能力)〉は思うに、〈意識〉 全体のなかの一〈場〉また彼によると〈意識〉全体自身ともみなされる〈意識(即自)〉内の働 き(「行動(運動)」)でもたらされ、おのおのが他の一〈場〉〈精神〉に伝えられるだけだから、 外的〈世界〉などとかかわることではなかったのだ。したがって、例の〈実存〉の契機を〈嘔吐〉 や〈不安〉にみると語られたは、筆者には不思議以外の何ものでもなくなる(〈実存〉の契機は 筆者にすれば、 すでに一見し、 さらに後述する 〈投企〉 のほかなかろう)。 なぜなら 〈嘔吐〉 や 〈不 安〉はそれ自身、「現実」の〈諸感覚〉と同様に、外的〈世界〉から〈精神〉に「受容される」〈観 念(能力)〉であり得なかったと、〈嘔吐〉や〈不安〉の諸「感情」が〈精神〉に〈存在〉すると

されるならば、それは〈意識(即自)〉で〈作る〉〈作られる〉当の諸〈観念(能力)〉が〈意識(即 自)〉から〈精神〉に伝えられるにすぎなかったと繰返しいい得るからである。つまり〈嘔吐〉 や〈不安〉が〈作られ〉たあとは〈意識(即自)〉から伝達されること、それが〈精神〉に「受 容される」こと以外、「〈意識(即自)〉から〈精神〉への関係」にあってみられる〈意識(即自)〉 ならびに〈精神〉すら、いかなる働き(「行動(運動)」)もできなくなる。換言すると凝り間違っ ても、〈嘔吐〉や〈不安〉が外的〈世界〉からの〈諸感覚〉のように〈精神〉に、ましてや〈意 識(即自)〉に「受容される」と、かつそれぞれによって、まさか〈精神〉が、〈意識(即自)〉 が各〈無化〉や〈無〉に繋がるなどと断じてはならなかったということである。そのうえ〈精神〉 についていえば、〈精神〉は外的〈世界〉からのを含む〈諸感覚〉の〈場〉でもあるにせよ、し かしこうした〈諸感覚〉を、さらに諸「感情」(例の〈嘔吐〉や〈不安〉)に、さらにまた諸「情 動」や諸「情念」にさせる機能を持ち合わせてはいないし、もとより〈理性(知性)〉によって、 それ自らに定めた目的対象をして〈作る〉〈作られる〉に掛けては、諸〈観念(能力)〉を実現せ しめる働き(機能)さえ有することがない(〈理性(知性)〉の在りかは〈意識(即自)〉であった)。 とどのつまり「〈意識(即自)〉から〈精神〉への関係」における〈精神〉は、〈受動〉の〈場〉 であったがゆえに、そこに「受容される」あらゆる〈観念(能力)〉をもはや〈能動〉として機 能させることができないだけか、だから〈精神〉自ら〈意識(即自)〉に、またのちに問う〈身体〉 にかかわること、さらに〈無化〉や〈無〉にさせられることも不可能であるといわねばならぬと ともに、これらの哲学(観念)上の〈観念〉を打ち出すはおよそ彼の自由に任せられては、その 〈精神〉の設定(構想)をとやかくいうべきでないやも知れぬが、それでも同時に、「現実」の〈精 神〉が何かをみんとするとき、かかる〈精神〉にはいかなる機能も役割もないと答えるしかない ならば、疑問ばかりが残る(たとえば「現実」のにあって、その〈精神〉は本当に役立つのか〉 ように思えてならないことなのだ。

ところが、この疑問が疑問でなくなるは、これまでの拙論のなかで、筆者に先きに「〈精神〉から〈意識(即自)〉への関係」と記させた語句中の〈精神〉に当てはまるところに見出されたのであり(なぜかは後述による)、途中から「〈精神〉(もしくは〈わたし〉)から〈意識(即自)〉への関係」として、〈わたし〉を並列に書き足させた語句中の〈精神〉にではないということである。だから前段から続く問いの語句「付け足しにされた」は「〈精神〉から〈意識(即自)〉への関係」での〈精神〉に適当されないといわせねばならない。要はこの場合、〈精神〉は〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」とみてはならない。なぜなら疾うに触れおいた通り、〈精神〉は〈意識(即自)〉からのあらゆる〈観念(能力)〉が伝達(受容)される〈場〉と認められる、両者の関係では、「〈精神〉は〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」と確かにいえるが、しかしこれ以外での、つまり「〈精神〉から〈意識(即自)〉への関係」における〈精神〉にさえ、〈精神〉

の〈意識(即自)〉への〈能動〉的な働きが見当たらないために、もはやこの〈精神〉のいかな る機能も役割もないと判断せざるを得なくなり、その意味で「〈精神〉は〈意識(即自)〉に「付 け足しにされた」」といわせよう見方は否定されねばならぬからである。さすれば筆者は、「〈精 神〉から〈意識(即自)〉への関係」が見立てられるといい出すにしろ、なぜ「〈精神〉から」と 記させ得たかを明確にしておかねばならぬであろう。「〈精神〉から」と書いた〈精神〉には、あ らゆる〈観念(能力)〉が、そのなかでも〈投企〉〈参加〉〈行動〉や〈選択〉の各〈観念(能力)〉 が蓄えられており、これらは〈精神〉に〈意識(即自)〉から伝達(受容)されたまま、何も生 じることなく居残るのみでは、やがていつか消え去るにちがいない〈観念 (能力)〉でしかなく なろう (以下〈投企〉の語に代表させる)。〈精神〉に〈存在〉していよう、外的〈世界〉からの も含まれる〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安) は別にして、〈投企〉が何かに役立つとみなさ れるならば、たんに「〈精神〉から」と筆者に記さすだけでなく、「〈精神〉(もしくは〈わたし〉) から〈意識(即自)〉への関係」とされるごとくに、この語句中に括弧を付した語が挿入されて 捉えられる必要があった。なぜなら〈精神〉にみられた〈投企〉に〈わたし〉が働きかけるよう にかかわっていなければならなかったからである。それはすでに述べおいた通り、サルトルに 〈わたしは…投企である〉といわせる文章でも証明されることである。この文意は〈精神〉に居 残った〈投企〉の方から〈わたし〉に、ならびに〈意識(即自)〉に働きかけることにあるので はなく、〈意識〉全体の一〈場〉である、〈わたし〉の〈場〉の〈わたし〉だけが〈投企〉に働き かけ得ることにあった。また〈精神〉や〈意識(即自)〉の各〈場〉は〈投企〉をいかにかしよ うとする(働きかける)〈能動〉の役割を担わなかった。このために、〈わたし〉の登場(出番) がなくてはならなくなった。なぜなら、外的〈世界〉から生じる〈諸感覚〉が「受容される」〈受 動〉の〈場〉たる〈精神〉はそれ自身、例の〈投企〉にあたかも再度話題に取り上げる〈能動〉 の働きかけすらできないし、一方の、あらゆる〈観念(能力)〉を〈産出〉する〈能動〉の働き かけのほかに、〈精神〉に伝える(働きかける)〈能動〉の役割を有する〈意識(即自)〉はそれ でも、彼に外的「〈世界〉に関係しない」主旨のことをいわせたのみか、筆者には一担〈精神〉 に送り出した(伝えた)、例の〈投企〉自体を〈意識(即自)〉に〈受動〉的に戻すことなど一切 できないとみえたのだから、〈投企〉がどのようになるかは、〈精神〉や〈意識(即自)〉でなしに、 これら以外の〈わたし〉に委ねられかかわらねばならなくなるからである。したがって彼は〈投 企〉すなわち〈わたし〉によってこそ、〈わたしのために、(外的)世界があらわれるようになる〉 といい得たわけである。その外的〈世界〉は〈わたし〈投企)〉が〈能動〉として「働きかける」 なかで〈あらわれる〉対象であり(〈わたし(投企)〉が〈能動〉であることはのちに明かされる)、 〈精神〉に〈受動〉として「受容される」、例の〈諸感覚〉で〈あらわれる〉対象ではなくなる。 このとき、外的〈世界〉から生じる〈諸感覚〉が〈意識(即自)〉でなしに、〈精神〉に関係する ことは、「〈意識(即自)〉は外的〈世界〉に関係しない」と彼にいわす、その主旨を証しすると ともに、〈意識(即自)〉自らが〈産出〉した〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安)をいかに〈精 神〉に伝えたとて、これらは当然のこと、外的〈世界〉に起因し、そこからさらに〈意識(即自)〉 にかかわる諸能力ではあり得ない、換言すると外的〈世界〉が〈精神〉に〈受動〉的に関係する は確かである一方、外的〈世界〉と〈意識(即自)〉とはそれぞれに立ってその関係をみるにせよ、 いずれも〈受動〉的また〈能動〉的に関係することがないという証しになるといえる。だから〈わ たしのために、(外的)世界があらわれるようになる〉ことは、外的〈世界〉自体が〈意識(即自)〉 だけか、そのうえ引用文中の〈わたし〉までのおのおのに対し、〈能動〉として「働きかけ」て〈あ らわれる〉のでなくなるし、〈意識(即自)〉により〈産出〉された〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔 吐や不安)さえ外的「〈世界〉に関係しない」ことを、さらに〈わたし〉に関係しないことを含 意させる証しとなる。とどのつまり、上記した〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安)を含む、 そのあらゆる〈観念(能力)〉が〈精神〉に伝わると、要はこのあらゆる〈観念(能力)〉は外的 〈世界〉からもたらされるのではないと筆者にみられている以上、繰返すが、これらはすべて〈意 識(即自)〉で〈作る〉〈作られる〉しかないことを、〈わたし〉にはこれも後述する理由で、〈投 企〉(〈参加〉〈行動〉や〈選択〉)なる(諸)〈観念(能力)〉を除いて関係しないことを証しさせ る。〈意識(即自)〉から一度〈精神〉に「受容され」た〈投企〉(など)はこれ(ら)が哲学(観 念)上の〈観念(能力)〉にとどまらないとき、〈意識(即自)〉とでなしに、〈わたし〉とかかわ るほかないとみておかねばならない。〈わたし〉はかかる〈投企〉(など)と関係する役割以外持 たせられはしなかったのだ。

ところで〈わたし〉すなわち〈投企〉になると捉えたことがいかに展開されてのことなのかをみていくために、筆者は疾うに述べたことをここに想起しておく必要がある。これを少しくまとめおくと、筆者が〈わたし〉を〈投企〉にかかわらせ、〈投企〉の「実践(実行)者」に見立て得ることは、〈わたし〉や〈投企〉が前段最後近くに触れたごとき、哲学(観念)上のそれぞれではもはやなく、〈身体〉を動かさずにいない「行動(運動)」を伴わせた、「現実」の〈わたし〉や〈投企〉に充当させておかねば(哲学(観念)上の〈わたし〉や〈投企〉は〈観念〉ゆえに、そこに〈身体〉やその動き(「行動(運動)」)を含ませることがない)、〈わたし〉や〈投企〉に〈意識(即自)〉への「橋渡し(仲立ち)」を担わせることができず、しかも〈意識(即自)〉を〈意識(対自)〉に〈変化(変身〉〉さすことも不可能になろうことにある。以上のことを今すぐにでも明らかにさせねばならぬが、筆者はその前に、いまだ結語をみていない、次なるいくつかのことを片付けてからにする。そのいくつかの一は、筆者が何ゆえ「もしくは〈わたし〉」と括弧を加えて「〈精神〉から〈意識(即自)〉への関係」と表記し得たかにある。それは〈精神〉自体をして「〈意識(即自)〉への関係」を成り立たせぬことを含意させども、サルトルが〈意識〉全体

の一〈場〉に〈精神〉をあらゆる〈観念(能力)〉の「受け皿」として取り上げる以上、筆者は かかる〈観念(能力)〉の役割がどうかを確かめねばならぬし、筆者に「〈精神〉から〈意識(即 自)〉への関係」が窺えるといわせるとき、かの一〈場〉を代表する〈精神〉(の語)がたとえ名 目的に使用されようとも、まずはこうした関係(の語句)の一部を占めるに宛がわれるべきと判 断させるのであり、そう捉えなくば、括弧を付してまで、他の一〈場〉たる〈わたし〉を記すと ころの、〈わたし〉の出番の根拠が見失われてしまうからである。要は〈受動〉の〈場〉でしか ない〈精神〉はだから、〈意識(即自)〉で生じるあらゆる〈観念(能力)〉の、いわば「たまり場」 となるのであり、そのなかの〈投企〉(など)と〈わたし〉は関係することができた(括弧した 語が書き添えられたのはこのためである)。すると上記から、 筆者にいう「かかる〈観念(能力)〉 の役割がどうか」について、また〈精神〉は〈受動〉の〈場〉である以外に、何か他の役割を有 するように扱われるかについて問われくる。簞者には、前者は〈意識(即自)〉に生じ、〈精神〉 に「受容される」あらゆる〈観念(能力)〉を例の、外的〈世界〉からのを含む〈諸感覚〉なら びに諸「感情」(嘔吐や不安)と〈投企〉〈参加〉〈行動〉や〈選択〉(これらは〈投企〉(など)と、 また〈投企〉と表記してきたし、本文以下では〈投企〉で表記する)とに分けて質すことが必要 である(のちに〈投企〉から順にみる)が、後者は〈精神〉が他のいかなる役割も持ち得ないと、 したがって哲学(観念)上の〈精神〉はむろんのこと、「現実」の〈精神〉さえ何の役にも立た ないと答えるほかない。そうでしかないことを語っておこう。〈精神〉は「〈精神〉から〈意識〈即 自)〉への関係」という、括弧(内の「もしくは〈わたし〉」)抜きの表記では、「〈意識(即自)〉 への関係」を成り立たせないし、その繋がりの役割を担えない(どうして〈受動〉の〈場〉にす ぎない〈精神〉が〈意識(即自)〉に〈能動〉として「働きかけ」得るのか、不可能なのだ)の であり、「〈精神〉から」とした〈精神〉が〈能動〉でないままで、どうしてその〈意識(即自)〉 をしてさらに〈意識(対自)〉たらしめさせんとする〈変化(変身)〉に役立ち得るかは予想だに されないのだ。こうしてみると、〈精神〉に「受容され」ていたあらゆる〈観念(能力)〉のうち、 しかし上記中の〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安)がではなく(なぜかは後述する)、〈投企〉 が括弧した〈わたし〉と結びつかされ一つ(合体)になったとみえた途端、〈精神〉自身は〈わ たし〉の〈能動〉(これも後述する)によって、〈投企〉(たる〈観念(能力)〉)を〈精神〉の意 味する〈受動〉から解き放させる、つまり〈投企〉の「実践(実行)者」なる立場を〈わたし〉 に明け渡すばかりか、あまつさえ、ことが哲学(観念)上のくわたし〉がでなしに、「現実」のくわ たし〉が語られねばならなくなると、これに従わされる〈精神〉も「現実」の〈精神〉にみなさ れようが、しかし「現実」の〈精神〉はすでに有名無実なのであり、有って無きがごとき〈場〉 であるほかないし、哲学(観念)上の〈精神〉にあっても、その〈投企〉に〈わたし〉がかかわ るよう〈観念〉するにしても、〈精神〉はそのままほったらかし(置き去り)にされるか、不要 となるかで、もはや問題にされなくなるにちがいない。要するに彼のめがける哲学において、上記したところを明確に打ち出しはしないとみえるがゆえに、〈精神〉は、いや筆者にいわすと、〈わたし〉と並んで〈精神〉もさほど深く考究される対象になっていなかったということである。しかしながら彼が一方で「〈意識(即自)〉は外的〈世界〉に関係しない」主旨を語っていたにしても、〈精神〉をこそその外的〈世界〉と「現実」の〈諸感覚〉を通して関係させたり、〈意識(即自)〉で生じるあらゆる〈観念(能力)〉がこの〈精神〉に伝達(受容)されたりする〈場〉をまるで突然用意させた感が否めないは筆者には、何かしらつじつま合わせのための、〈精神〉の構想(設定)にあったと思えてならないのだから、この〈精神〉の在り様に疑問を抱かざるを得なくなるわけである。

その一は、前記した「〈精神〉から〈意識(即自)〉への関係」に対して、〈精神〉は〈意識(即 自)〉に「付け足しにされた」とみてはならぬことにある。〈精神〉自身は一見していた通り、〈意 識(即自)〉に「働きかけ」得る〈能動〉でも、〈意識〉全体に〈能動〉の一〈場〉として配置さ れるのでもなかった。したがって例の「〈意識(即自)〉から〈精神〉への関係」のことであるな らば、〈精神〉は〈意識(即自)〉で〈産出〉されたあらゆる〈観念(能力)〉が「受容される」〈受 動〉の〈場〉であったがゆえに、〈意識(即自)〉に〈受動〉として「付け足しにされた」とみな し得るであろう。つまり〈精神〉は〈意識(即自)〉からのあらゆる〈観念(能力)〉を引き受け る〈場〉だからして、〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」ことになる。ここにいう「付け足 しにされた」はこの謂である。しかし今問う「〈精神〉から〈意識(即自)〉への関係」にあって、 〈精神〉はたとえ「〈精神〉から」と記されども、〈意識(即自)〉が〈能動〉(の場)であるように、 〈能動〉(の場)であり得なかったがゆえに、上記の「関係」は例の〈投企〉が「受容される」〈精 神〉とはいえ、かかる〈精神〉を「〈精神〉から」とした語句のままでは不成立にとどまるので あり、だから筆者は名目上は「〈精神〉から」としたうえで、これを括弧内の「〈わたし〉から」 にいい換えてもみたわけである。後述もするが、「から」が起点を示すならば、ことはそこを出 発点にしてはじまる「働きかける」〈能動〉 でなければならず、 それゆえ括弧した 〈わたし〉 は〈能 動〉である必要があろう(ただしこの〈能動〉の、ここでいう意味については断わることがある。 〈精神〉や〈わたし〉の各「働きかける」〈能動〉には、〈意識(即自)〉のような、それ自らが〈思 惟(認識)(観念) する〉〈能動〉やその〈思惟(認識)(観念)〉〈受動〉なる働きが、要は〈作る〉 〈作られる〉作用がないし、ましてこのあらゆる〈観念(能力)〉を〈産出〉したり、いずれかの 〈場〉たとえば〈精神〉に伝えたりできる〈能動〉たる機能がない。つまり〈精神〉や〈わたし〉 のいずれにさえ、〈理性(知性)〉の働きがないということである)。要するに「〈精神〉から」で はなく、「〈わたし〉から」ならば、「〈意識(即自)〉への関係」は成り立つのである。〈わたし〉 についてはともかく、〈精神〉にとっては、〈受動〉の〈場〉にすぎないとみられる以上、〈精神〉

は「〈意識(即自)〉へ」と「働きかける」という〈能動〉(の場)であることがもはや不可能な のだ。万が一〈精神〉が〈能動〉を可能にしよう〈場〉と見立てられても、「〈精神〉から」、例 の〈投企〉でもって、「〈意識(即自)〉へ」 と「働きかけ」たとて、当初より〈受動〉(の場)゙で なく〈能動〉(の場)でしかない〈意識(即自)〉はその〈投企〉を「受容」することに繋がらせ ない、さすれば「〈精神〉から〈意識(即自)〉への関係」は成立しなくなるわけである(それは 〈わたし〉を除いて、〈精神〉や〈意識 (即自)〉 はいずれも〈投企〉をどうすることもできない〈場〉 であるのを示唆させるからである。しかし筆者は上記した「関係」において、「〈精神〉から」を 「〈投企〉から」とさえ置換できなかった。なぜなら〈意識〉全体をさす〈意識(即自)〉〈精神〉 や〈わたし〉なる各〈場〉との「関係」が相互にいかにあるかをみておかねばならぬのであって、 一〈投企〉たる〈観念(能力)〉による、他との〈場〉〈意識(即自)〉の「関係」を質すところ にはなかったといえるからである)。したがって「〈精神〉から〈意識(即自)〉への関係」にあっ て、〈精神〉は〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」という表記は成り立たなくなる、つまり 〈精神〉が〈意識(即自)〉に〈受動〉としてかかわるならば、〈意識(即自)〉に「付け足しにさ れ」ることになろうが、〈能動〉としてあるならば、不可能であろうと繰返すほかないのだ。だ から〈精神〉は〈能動〉であることができない。そのことがここで証明されるとともに、本段落 の半ばの括弧内で筆者にいわしめた〈能動〉と関係させられる〈わたし〉を(いかなる〈能動〉か、 括弧の〈能動〉と〈わたし〉が何ゆえ関係するかも後述する)、〈投企〉に結びつける以外になく なったといわなければならぬのだ。

そして一は、「〈意識(即自)〉への関係」が「〈精神〉から」にではなく、「〈わたし〉から」に 求められるにせよ、まず哲学(観念)上ので問う〈わたし〉はなぜ、これも哲学(観念)上の〈投企〉に対し「働きかける」〈能動〉でなければならぬのかにある。〈意識〉全体をさす三つの〈場〉のなかで、〈投企〉を何とかし得るは〈わたし〉(の場)しかなかったのであり、このことは筆者がすでに「〈精神〉や〈意識(即自)〉はいずれも〈投企〉をどうすることもできない」と述べたことで明かされるにちがいない。だが〈わたし〉の〈場〉の〈わたし〉は何ゆえ〈能動〉にみられるのか。これについては、疾うに引用した文章が参考になる。すなわち〈意識という観念さえ、わたしの可能的な意識を指示させるだけである〉、〈わたしは、わたしの存在の根源そのものにおいて、他者を対象(客観)化すべき投企であり、あるいは他者に同化すべき投企である〉(この一文は筆者にこれまでときに〈わたしは…投企である〉と表記させた、当の文章である)や〈自由は自らが投企する目的によって、換言すると自らが存在しなければならない未来によって定義される〉と。さらに次なる引用文も同様である。

La liberté, étant assimilable à mon existence, est fondement des fins que je tenterai

d'atteindre, soit par la volonté, soit par des efforts passionnels. (5)

わたしの存在(実存)と同一視できる自由は、意志によるにしろ、情熱的な努力によるにし ろ、わたしが到達しようと試みる諸目的の根拠である。(括弧内は筆者)

Je suis épreuve d'autrui. (6)

わたしは他者経験である。

Mon choix a pour limite la liberté même. (7)

わたしの選択は自由そのものを限界として持っている。

La liberté étant choix est changement. (8)

自由は選択であるがゆえに、変化である。

以上の諸引用文から、〈わたし〉が「働きかける」〈能動〉をあらわすと思える語句や文章を再度取り上げてみると、これにはたとえば、〈わたしの可能的な意識〉が、〈わたしは、…他者を対象(客観)化…他者に同化すべき投企である〉が、換言すると〈わたしは他者経験である〉が、また〈(目的に)自らが投企する〉が、〈(諸目的に)わたしが到達しようと試みる〉が該当する。上記した語や文章を目にして分かるように、そこには〈わたし〉が哲学(観念)上の〈観念〉にとどまってはおれぬことが、つまりここでいう〈わたし〉は哲学(観念)上の〈わたし〉をさすよりも、まったき今である、「現実」の〈わたし〉として、あるいは〈可能的な〉「現実」や〈未来〉の〈わたし〉としてみられることが含意されていると、要はこの「まったき今」である「現実」に〈わたし〉の「動き」が伴なわれていなければならぬことが、しかも〈わたし〉の「動き」には、サルトルに〈わたしの身体〉といわせるほどだから、〈身体〉の「動き」(「行動(運動)」)が当然加味させられていることがそれら引用に共通して語られると読むことができる。

この「動き」こそ〈わたし〉が〈(諸)目的に〉「働きかける」〈能動〉を示唆させずにおかないが、さすれば〈わたし〉の「動き」は「いかなる〈能動〉」にみられるのであろうか。たとえばかの〈意識(即自)〉で意味された〈能動〉と同じであろうか。〈意識〉全体での二つの〈場〉の「関係」では、「〈意識(即自)〉から〈精神〉への関係」の場合のように、〈わたし〉の〈場〉

の〈わたし〉が〈精神〉の〈場〉に「受容され」た、例の〈投企〉に「働きかける」〈能動〉を 可能にするのであり、この点一見して〈意識(即自)〉における「働きかける」〈能動〉と変わり はしないごとくに見受けられる。しかし〈意識 (即自)〉 が自らにあらゆる〈観念 (能力)〉を〈産 出〉するごとく、かつ〈精神〉に伝えるごとく「働きかける」〈能動〉に対して、〈わたし〉の「動 き(能動)」は同じ語の〈能動(action)〉を使用するとみえども、厳密にはかかる〈意識(即自)〉 のような〈能動〉とは異ならざるを得ないと指摘し得る。それでは〈わたし〉の「動き(能動)」 は何か。すなわち〈わたし〉が〈精神〉の〈場〉に伝えられ「受容され」た〈投企〉に「働きか ける」〈能動〉は、上記一引用文に〈わたしは、…他者を対象(客観)化…他者に同化すべき〉 と記された例を持ち出していうと、〈わたし〉はこの〈他者(他人)〉を〈投企〉に置換させたと ころでの、〈投企〉を〈対象(客観)化〉し、〈投企〉に〈同化〉することにある(筆者が〈わた し〉と〈投企〉は「一つ(一体)になる」「合体する」と書いた謂である)と。このことは〈投企〉 がまさに〈わたし〉の「動き(能動)」にさえ等しくなることである(筆者がこれまでにも〈わ たし(投企)〉と表記したはこのかぎりでしかない)。だから筆者が〈わたし〉の「動き(能動)」 と述べた、この「動き(能動)」には、そう語る以上、もはや哲学(観念)上の〈わたし〉に終 始させるのではない、「現実」にかかわる、「現実」の〈わたし〉が、したがって哲学(観念)上 の〈投企〉ではない、「現実」の〈投企〉が含意されていなければならない (哲学 (観念) 上の 〈わ たし〉や〈投企〉の各〈観念〉であっただけでは、おのおのは何の役にも立たない。すると後述 に譲るほかないが、サルトルがめざすと思われる哲学は、筆者をして〈観念論〉といわしめる哲 学はこうした役に立たない諸〈観念〉によって、それでも成るといえるのかである、要は「現実」 までも問うことになる〈観念論〉は〈観念論〉であるといえるのかである)。換言すると〈わたし〉 や〈投企〉は「現実」のという「まったき今」が、あるいは彼にいう〈実存 (existence)〉が哲 学(観念論)に想定されることなしに、有名無実になるからして、もとより「現実」の〈わたし (投企)〉として語られなければならなくなるばかりか、(身体)を伴なわせてはじめて、例の外 的〈世界〉に〈能動〉的に向かい「働きかける」ことを可能にし、 この「まったき今」の外的〈世 界〉すなわち〈事物や他者(他人)〉の真只中に〈存在〉することができるようになるわけである。 そしてもうひとつの、「現実」の〈わたし(投企)〉の「動き(能動)」が筆者に哲学(観念) 上に見出されるといわせる「関係」に、すなわち今質している、「〈精神〉から」ではない、「〈わ たし(投企)〉から〈意識(即自)〉への関係」になくてはならなくなる。この「関係」にはしか し、注意しておくべきことがある。それは、〈わたしは…投企である〉という〈わたし(投企)〉 がその「動き(能動)」でもって〈意識(即自)〉に「働きかける」とき、当の〈意識(即自)〉 はすでに〈能動〉でも〈受動〉でもないことにある、要するに〈意識(即自)〉それ自身が〈意 識(対自)〉に〈変化(変身)〉することに、つまり〈意識(即自)〉自らが〈意識(対自)〉に〈変 化(変身)〉するための〈意識(即自)〉でなければならないことに、この〈変化(変身)〉自体 をして〈能動〉や〈受動〉と呼ばせてはならないことに、つまり〈変化(変身)〉をして〈意識〉 の〈場〉に〈即自〉とは異なる、〈意識〉の〈対自〉たる、新たな〈場〉をかたちづくらせては ならないことにある。だが〈わたし(投企)〉が〈意識(即自)〉に「働きかける」ことをどのよ うにして確かめ得るのかである。〈わたし(投企)〉と〈意識(即自)〉の関係は、〈わたし(投企)〉 をして〈意識(即自)〉を〈無化〉にさせるためであったが、筆者に語らせていたように、何よ りもまず〈わたし〉が〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」関係になければ成り立たなかっ たとみる。かかる「付け足しにされた」関係にあればこそ、〈わたし〉は、〈精神〉や〈意識(即 自)〉とともに、〈意識〉全体の一〈場〉を形成するが、しかし外的〈世界〉に〈受動〉的にしか 関係しない〈精神〉ならびに外的〈世界〉に関係しない〈意識(即自)〉の各〈場〉の在り様の 代わりに、唯一外的〈世界〉に〈能動〉的に「働きかけ」得る関係を有しては、〈わたしのために、 (外的) 世界があらわれる〉とされたからして、その真只中に、〈精神〉や〈意識(即自)〉より 先んじて〈存在〉を確保させたあとで、外的〈世界〉を〈精神〉にではなく、〈意識(即自)〉に、 そのうえ〈意識(対自)〉にかかわらせることができたのであり、〈わたし〉に外的〈世界があら われる〉ためには、〈意識(即自)〉自らが〈諸目的〉と見定めた〈諸目的(諸観念)〉に〈わた しが到達しようと試みる〉なかで、すでに〈意識(即自)〉で〈産出〉された〈目的(観念)〉す なわち〈投企〉をば、今度は〈身体〉の「動き」を伴なわすことで「現実」を意味させる〈投企〉 にしつつ、この「現実」の〈投企〉をしてさらに〈諸目的(諸観念)〉の一にちがいない、〈無化〉 に向かわせる〈意識(即自)〉に繋げられねばならなくなる(上記した、〈わたしが到達しようと 試みる〉一文中の〈わたし〉は「現実」の〈投企〉と書いたがゆえに、 これに倣い、 「現実」 の〈わ たし〉 を、あるいはサルトル自身をさすと察知されるからして、〈わたし〉 は哲学 (観念) 上の 〈わ たし〉と受け取れはしない)。したがって〈わたし〉は〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」 とみなければ、〈わたし〉 はどこと結びつくか (どこに 「付け足しにされた」 か)。 〈わたし〉 が 〈投 企である〉とき、この〈わたし(投企)〉に対し、〈意識〉全体を構成する、他の〈場〉たる〈精 神〉や〈意識(即自)〉はそれぞれかかわれないのをはじめ、「どうすることもできない」だけか、 そもそも〈精神〉の〈受動〉のや〈意識(即自)〉の〈能動〉の各働きも停止しているのだから、 〈わたし(投企)〉は、それが彼に〈即自を無化する〉〈無化された即自〉や〈即自の無化〉など と表現された場合には、疾うに一見していた通り、もはや〈能動〉の働きではなくなった、この 〈意識(即自)〉以外に「付け足しにされた」ことがないといわねばならなくなる。以上のことは 当然、〈わたし(投企)〉が〈意識(即自)〉に「働きかける」〈能動〉である証しにさせるばかり か、これによって〈わたし〉は〈無化〉を可能にする〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」 関係になくてはならぬことを断じさせずにおかない。それに、〈わたし〉が「働きかける」ことは、

こと〈わたし〉に対するかぎりでは、〈投企〉がかかわることをさす(前記引用文に掲げられた〈わたしの選択〉の〈選択〉も、かつ筆者に「〈投企〉(など)」と記された際の、他の〈参加〉や〈行動〉もこの場合と同様である)し、これが「現実」の〈わたし(投企)〉をいうのであれば、「働きかける」〈わたし(投企)〉とはまさに〈身体〉を伴なわせた「動き」(「行動(運動)」)を、換言すると〈投企〉と〈同化〉した〈わたし〉とその〈身体〉の同時的〈能動〉を示唆させるほかなかろう(ここにいう「現実」のはその〈投企〉を「実践(実行)」する〈わたし〉の「まったき今」を語るだけか、これも前記引用文にみられた〈わたしの可能的な意識〉という語句中の〈可能的な〉と訳す形容詞さえ、筆者は「現実」のに与させて捉えおいていた)。

しかしながら、筆者がサルトルをして〈投企〉なる〈観念(能力)〉を打ち出させてしまった がゆえに、そのための〈わたし〉を〈意識〉全体のうちの一〈場〉として用意せしめたとみる、 この指摘は穿った見方によるのであろうか。そうでもあるまい。たとえば〈投企〉なる〈観念(能 力))を〈産出〉し、〈精神〉に伝える、こうした〈能動〉の役割を担う〈意識(即自)〉は、一 担そこから〈精神〉に送り出した〈投企〉に対しもはや関知できないといえたのだから、彼が〈投 企〉を提起したにとどまらず、〈投企〉にかかわらねばならぬとされた〈わたし〉はおよそその 次善の策の 〈思惟 (観念)〉 として持ち出されるように思われるし、 さらに何か (筆者にすれば 〈投 企〉) と関連させられる必要のある、〈意識(即自)〉の〈無化〉を前面に押し立てるごとき主張 に展開される段階において、〈わたし〉がこの〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」と筆者に いわせたことにならなくば、〈わたし(投企)〉は〈無化〉に関係しない、すなわち〈無化〉の因 にすらなり得ないにちがいないわけである(〈受動〉の〈場〉たる〈精神〉が〈意識(即自)〉へ と関係することは、また〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」とした一例はすでに触れた通り、 不可能なのである)。〈わたし〉が〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」とみることで、筆者 ははじめて、〈わたし〉が〈意識(即自)〉から〈精神〉に「受容され」た〈投企〉に「働きかけ」 ては〈同化〉したり、この〈わたし(投企)〉がさらに〈意識(即自)〉に「働きかけ」たりし得 る〈能動〉であることを明らかにできるばかりか、これにより〈わたし(投企)〉は〈わたし〉〈精 神〉や〈意識(即自)〉の各〈場〉を含めた〈意識〉全体にかかわることを確認できる。要は〈意 識〉全体を占める、他の二つの〈場〉と関係を有するは〈わたし〉〈の場〉だけなのだ(たとえ ば「〈意識(即自)〉から〈精神〉への関係」を参照するにせよ、〈意識(即自)〉は他の一つの〈場〉 〈精神〉にしかかかわらなかった。また序でに指摘しておくと、〈投企〉に〈わたし〉の〈能動〉 が関係することは、〈投企〉はこれを「どうすることもできない」〈意識(即自)〉に、ましてや〈精 神〉に関係しないとみえるからして、〈わたし〉に「付け足しにされた」すなわち関係するとい い得るし、〈投企〉は〈わたし〉に〈同化〉されたといえるからして、〈能動〉となることにある)。 筆者が先きに問うていた「〈わたし〉はなぜ哲学(観念)上の〈投企〉に対し「働きかける」〈能

動〉でなければならぬか」にはだから、〈わたし〉こそ〈わたし〉を含めた、〈意識〉全体の三つ の〈場〉の関係を成立させる、いわば立役者になるにしても、かかる〈投企〉なる〈観念〉が〈精 神〉に伝えられただけでは、この〈投企〉は〈わたし〉に関係することがないと、それゆえ〈投 金〉をいかにかするうえで、彼は哲学(観念)上の〈わたし〉が打ち立てられると答えられる。 しかしそこで質さねばならぬは何ゆえ〈わたし〉が〈能動〉になるとみられるかである。この問 いに対して、筆者が一度は検討済みの、〈わたしはこの机を意識することを意識する〉という引 用文を再び持ち出し、次のように答えてみる。まず〈この机を意識する〉語句の主語となるのは 〈わたし〉ではなく、〈意識 (即自)〉でなければならなくなるし、その働きが〈この机を意識する〉 ことであり、その〈意識する〉はむろん〈能動〉でなくてはならないと、そして筆者に疾うに「〈わ たし〉がすなわち〈意識(即自)〉」になるのではない(両者が等しいとみられるならば、そのい ずれかを立てるだけで十分であろう)といわせたにあって、〈わたしは…意識する〉という〈意 識する〉は〈意識(即自)〉が〈意識する〉のと同様、〈能動〉に違いないといえども、上記した ことからはしかし、〈意識(即自)〉と同一と捉えられる〈能動〉ではなくなると。それについて は一見してきた通りである。一例を示せば、〈意識(即自)〉が〈この机を意識する〉に対し、要 は〈この机〉を〈思惟(認識)(観念)する〉に対し、〈わたし〉は〈思惟(認識)(観念)する〉 ことができない点にあった。すると〈わたし〉には〈能動〉の働きがないのではないか。だがそ うとはいい切れない。なぜなら〈わたし〉が〈精神〉に在る〈投企〉へ、また〈意識(即自)〉 へ各「働きかける」〈能動〉になると受け取られなければ、〈わたしは…投企である〉とされるは、 また〈意識(即自)〉に〈無化〉が生じるとされるは何ゆえなのか、不明のままに終始しようか らである。〈わたし〉の〈能動〉の働き方が〈意識(即自)〉の〈能動〉の働き方と同じでなくと も(〈意識(即自)〉は〈投企〉をはじめとした、あらゆる〈観念(能力)〉の〈産出〉とこれら の〈精神〉への伝達なる、各〈能動〉の働きを可能にした)、〈わたし〉にあたかも〈わたし〉用 の〈能動〉の働きがなくば、哲学(観念)上のだけでなく、〈身体〉とかかわらねばならなくなる、 「現実」の〈わたし〉を〈わたし〉に予測させる〈能動〉を、あわせて「現実」の〈わたし〉を して〈即自の無化〉ならびに例の〈統合〉を可能にさせはしないであろう。

わけても「現実」の〈わたし〉すなわちこの〈投企〉に〈身体〉がかかわるは、こうした〈わたし(投企)〉が外的〈世界〉に「働きかける」〈能動〉として参入していることを含ませる。〈意識 (即自)〉は自ら〈投企〉であらぬからして、「外的〈世界〉に関係しない」とみることもできる。サルトルが外的〈世界〉に関し、〈人間存在から世界に向かう〉と書き綴るかぎり、まずそこに問われる関係は外的「世界の人間(存在)への関係」ではなく、「人間(存在)の(外的)世界への関係」であった。次に〈人間存在〉とは「即自と対自との関係」にある〈意識〉と〈わたし〉で〈構成され〉ていた。そして彼は「〈意識(即自や対自)〉すなわち〈わたし〉ではない」

と述べては、外的〈世界〉をこの〈意識〉にでなしに、〈わたしのために、(外的)世界があらわ れるようになる〉と語るからして、〈わたし〉に関係させた。このことから、〈わたし〉なしに、 外的〈世界〉に結びつかないことが、さらにその〈わたし〉を通さずには、〈わたし〉は、また 外的〈世界〉はそれぞれ〈意識(即自や対自)〉に繋がらないことが彼に意図されたと読まなけ ればなるまい。それが彼にいう〈人間存在〉であったのだ。さりとて彼が〈意識〉全体たる三つ の〈場〉のなかで、外的〈世界〉に関係しよう〈場〉を、何ゆえ外的〈世界〉からの〈諸感覚〉 が「受容される」、〈受動〉としての〈精神〉の〈場〉と外的〈世界に向かう〉、〈能動〉としての 〈わたし〉の〈場〉に個別に割り当てさせねばならなかったのか、それでいて〈意識 (即自や対自)〉 の〈場〉に対して、〈意識〉は何ゆえ外的〈世界〉に関係しないとみたのかである(後者(外的〈世 界〉)が〈即自〉にではなく、〈対自〉に関係することは後述する)に関することを除き、筆者は それぞれの問いに筆者なりに答えてきたが、しかし彼から三つの〈場〉について明確な解答が引 き出されないことも事実だといわざるを得ない。と同時に、およそ三つの〈場〉とは〈観念〉(で 述べ語られる論)によりもたらされる以外にないし、筆者にすれば、〈わたし〉の〈場〉の〈わ たし〉なしに、こうした〈観念論〉に達することはなかろうとみておかねばならない。しかもこ の〈観念論〉に〈身体〉とかかわらずにいない、「現実」の〈わたし〉を持ち込んだことも問題 であるが、少なくもかかる〈わたし〉を踏まえずに、〈意識(即自や対自)〉の各〈存在〉(を述 べ語る論)だけで成立させるように問う〈存在論〉哲学であってはならないのだ。(〈存在論〉ま でも含み語らせる、この哲学はそれゆえ新たな観念(用語)を次から次へと導出し積み上げさせ て展開していくためか、これらの結語になかなかたどりつけないでいるのが、筆者なりの、長く だけになった、このサルトル論である)。だから筆者が思うに、〈わたしのために、(外的)世界 があらわれる〉ような、一〈他者経験〉を通した〈わたし(投企)〉こそ、〈意識(即自)〉本来 の〈能動〉でなくとも、〈即自の無化〉を〈対自〉の〈無〉にさせるべき、すなわち〈統合〉を 実現させるべき、〈わたし〉用の〈能動〉でなければならなくなったのだ。〈意識〉全体のなかの 一〈場〉の〈わたし〉はまた彼に〈他者〉と語らせているが、筆者にとって〈他者〉の意味は〈受 動〉の働きたる〈精神〉の〈場〉を除き、〈意識(即自)〉の〈場〉からみて、〈わたし〉が〈他者〉 という〈場〉を占めるからか、〈意識(即自)〉以外での〈能動〉を他の〈場〉として、要はその 〈他者〉として背負わせられねばならない、〈意識(即自)〉の、いわば分身か代役かになると映 ることにある。そうでなければ、〈わたしは...意識する〉と記された〈わたし〉はここでもすで に触れおいたように、サルトル本人に置き換えられるしかなくなろうと繰返してかまわなくな る。以上は「〈わたし〉が〈能動〉である」とみなした、筆者の見方となるが、ここからも、〈わ たし〉が〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」といい得るし、それなしに、「〈わたし〉が〈能 動〉である」ことは不可能であろう。つまり彼は〈わたし〉の〈能動〉を〈意識(即自)〉の〈能 動〉の働きの中身とは別にみるにしても、〈わたし〉の〈能動〉が〈意識(即自)〉のかかる働きを出所とする「分身」になるか、はたまたかかる働きに倣う「代役」を果たすかのいずれかをも見定めることなく、少なからず〈わたしは…意識する〉と書き記すことができなかった(〈意識する〉はもともと〈意識(即自)〉の〈能動〉たる働きをあらわす語(動詞)であるからして、この語句の〈わたし〉(主語)にとっては〈意識(即自)〉に「付け足しにされ」ていなければ、こうした表記は不可能になろうだけか、筆者が〈わたし〉は〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」と捉える以上、筆者は彼が「分身」か「代役」かに対し、どう答えようとも、そのいずれをも認めおくほかなかろうといわねばなるまい)。

「〈わたし〉が〈能動〉である」とみることによって、〈意識〉全体の一たる、〈わたし〉の〈場〉 の〈わたし〉は、〈精神〉や〈意識〉の各〈場〉に、かつ〈他者経験〉を可能にさせよう外的〈世 界〉にかかわることができた(要は〈わたし〉の〈場〉を含む、〈意識〉全体の三つの〈場〉を 結ばせ合うのが〈わたし〉であるし、〈わたし〉が二つの〈場〉に関係させられなくば、サルト ルにいう〈意識〉(全体)は成り立たないといえるだけか、この〈わたし〉はまた〈意識〉(全体) では〈他者〉(の〈場〉)ともいわれたからして、〈他者経験〉と記される〈他者〉が〈他人〉を さしたこととは当然相違させておかねばならない)。さらに〈わたし〉が〈投企(能動)〉である ことにあっては、〈わたし(投金)〉を哲学(観念)上の〈わたし(投金)〉にとどまらせるのみ では「現実」の〈わたし(投企)〉に役立たれることがない。「現実」の〈わたし(投企)〉に向 けてどうするのか。彼は〈わたしの身体〉と述べていたのだから、〈わたしの身体〉を〈わたし〈投 企)〉において動かす(用いる)ほかなくなる。これすなわち「現実」の〈わたし(投企)〉とな る。それこそが「現実」の〈即自と対自との関係〉をも成り立たせる、〈わたし(投企)〉の役割 である。〈身体〉を伴なわせ得る〈投企〉を通して、その「現実」の〈わたし〉が外的〈世界〉 に対し、〈事物(経験)〉や〈他者経験〉として「働きかける」ことでもって、〈わたし(投企)〉 という表記が可能になる(したがって〈投企〉を〈意識(即自)〉にかかわらせるは哲学(観念) 上のや「現実」の各〈わたし〉であって、哲学(観念)上のや「現実」の各〈意識(即自)〉や〈精 神〉でもない。だがその際、彼に強調される〈わたし (投企)〉が〈身体〉とともに語られくる「現 実」の ⟨わたし (投企)⟩ をさすのでなければならぬことはいうまでもない。また ⟨わたし (投企)⟩ が「現実」に「働きかける」〈能動〉にみられなければ、哲学(観念)上の〈わたし(投企)〉で 済ませられる〈観念論〉でしかなくなるであろう。しかして「現実」の〈わたし(投企)〉が取 り込まれる〈観念論〉は疾うに触れたように、果たして〈観念論〉といわれるのであろうか。そ れはここではなく、後述する以外にない問題ともなろう)。〈他者経験〉とは、彼がこの語を〈観 念(思惟)〉したことによるにしろ、一般に語られることは彼にあって、その哲学(観念)上の ではない、「現実」の〈わたし〉が実際に〈投企〉を試みて外的〈世界〉に〈存在〉せしめられ ることを含意させずにおかないばかりか、「現実」の〈投企〉すなわちこれに伴なう「行動(運動)」 する〈身体〉は、そのうえ〈他者経験〉として参入している外的〈世界〉はそれぞれ〈わたし〉 に「付け足しにされた」といって過言でなくなる(〈わたしは…投企である〉ことにとって、〈わ たし〉には〈投企〉なる〈観念〉にとどまらず、「現実」の〈投企〉でなければならぬことが示 唆される。かかる〈投企〉は「行動(運動)」を必要としたからして、〈身体〉を欠かせられなく なる。〈身体〉を動かす〈投企〉によって、この〈わたし〉は外的〈世界〉の真只中に〈存在〉 し得る。そのことは〈わたし〉なしに、〈身体〉や外的〈世界〉が質されぬことを意味させるし、 これらは〈わたし〉に各「付け足しにされた」ことでなければ語れないのだ)。要するに、〈わた し〉の出番(登場)は〈意識〉(全体)内で「〈意識(即自)〉から〈精神〉への関係」が成り立っ て以降にあり(〈わたし〉なる〈観念〉も〈意識(即自)〉の働きで〈産出〉され〈精神〉に伝え られるであろう)、このとき〈わたし〉の〈場〉の〈わたし〉が〈精神〉にかかわることでその〈わ たし〉や〈投企〉と〈同化〉し、この〈わたし(投企)〉を〈意識(即自)〉へかかわらせるとみ たがゆえに、〈わたし〉の〈場〉の〈わたし〉が〈意識(即自)〉に「付け足しにされ」ていなけ れば、また「現実」の〈投企〉すなわち〈身体〉やこの〈投企(身体)〉の「行動(運動)」を可 能にする場所すなわち外的〈世界〉が〈わたし〉に「付け足しにされ」ていなければ、〈意識〉 全体はそれとして関係し合うことは、すなわち〈統合〉することはないし、それどころか、筆者 にいう、彼のこうした諸〈観念〉すらなくして、彼が主張していた〈意識(即自や対自)〉のほ かに、〈意識〉全体のことであり、〈精神〉や〈わたし〉をして〈意識〉全体の一一に含ませるこ とになろうとも、何ゆえその〈精神〉や〈わたし〉の各〈場〉を持ち出すに至ったか、分からな くなるであろう。たとえば、〈観念〉で示された「〈意識(即自)〉に関係しない外的〈世界〉」は それでも「現実」の〈わたし(投企)〉の〈意識(即自)〉への〈能動〉的かかわりによって、〈わ たし〉と接触(関係)せしめられるだけでなく、その〈わたし〉は同時に当の〈意識(即自ばか りか対自)〉とも関係させられるのだ。このことは〈わたし〉が〈意識(即自)〉に、かつ「現実」 の〈投企(身体)〉も外的〈世界〉も〈わたし〉に各「付け足しにされた」とみておかないこと には、〈わたし〉がそれぞれと関係し得ないことを意味させるにちがいない。だからたとえば、 「現実」の〈わたし〉がサルトルに置き換えられ、〈意識(即自)〉に「付け足しにされた」〈わた し(サルトル)〉にみなされようが、その「現実」の〈わたし(サルトル)〉が、さらには哲学(観 念)上の〈わたし(サルトル)〉さえもが、彼にいう哲学(観念論)の中心に位置づけられたよ うには見受けられなくなる。だが一方で、この「現実」の〈わたし〉こそその〈能動〉的〈わた し(投企)〉をもって、〈意識(対自)〉の現出に役立つといい得るのに、換言すると〈意識(即自)〉 を〈意識(対自)〉に〈変化(変身)〉させる〈わたし(投企)〉によって、〈わたし〉の〈場〉の 〈わたし〉はサルトル哲学(観念論)の要諦であり、鍵であると思われるのに、〈わたし〉が〈意 識〉全体のうちの〈他者〉であるからか、はたまた彼の哲学(観念論)での主役が〈意識(即自 や対自)〉にあるからか、〈わたし〉はさほど彼の考究の対象にならずに、〈意識(即自ばかりか対自)〉に「付け足しにされた」、いわばその付属(装飾)品に扱われるほかなかった(彼に例の〈精神〉を〈ときに意識とも名付けたりする〉と語られたように、〈わたし〉が〈意識〉と同等に捉えられていてもだ。〈わたし〉が〈意識〉に等しいーにみられるのであれば、何ゆえ〈他者〉なのかをはじめ、〈わたし〉の、さらなる説明が彼に求められてしかるべきであろう。また彼の哲学(観念論)での〈意識(即自や対自)〉を主にすることにあって、それでも〈意識(即自や対自)〉に、たとえば〈身体〉がかかわるとみてはならない(〈意識〉全体を〈脳(身体〉〉といわせるならば別の話になるが、しかしそれは〈観念論〉ではなくなろう)。つまり〈意識(即自)〉のあらゆる〈観念(能力)〉の〈産出〉は確かに〈意識(即自)〉内での「動き」(「行動(運動)」)によるにせよ、〈意識(即自)〉それ自身では〈身体〉を必要とした、「現実」の〈投企〉のごとき「動き」(「行動(運動)」)を〈意識(即自)〉にではなく、〈わたし〉に担わせたのだ)。

だから筆者にすれば、何よりもまず哲学(観念)上のことを取り上げるにあってさえ、いわゆ る《実存》の契機は、広く知れわたる〈嘔吐〉や〈不安〉にではなく、〈投企〉にあるといわね ばならなくなる。筆者はこれを主張するに、繰返しになれど、次のことから確認しはじめる必要 がある。〈意識(即自)〉であらゆる〈観念(能力)〉が〈産出〉された。〈意識(即自)〉はそれ らを〈精神〉に伝達させた。〈意識(即自)〉にはしたがって、〈理性(知性)〉の能力の〈能動〉 的働きしかないとみることができた。そこで筆者は、例の〈投企〉が〈意識(即自)〉において、 突然降って湧くように生み出された〈観念(能力)〉ではないと、 つまり〈意識(即自)〉による、 〈投企〉(産出)以前の〈能動〉的〈観念(能力)〉に従わせられてもたらされると捉え得るならば、 「〈投企〉(産出)以前」のかかる〈観念(能力)〉とは何であったかを想起しておかねばなるまい。 筆者がみるに、〈意識(即自)〉が「〈投企〉(産出)以前」に発した〈観念(思惟)〉(「何」)は、〈意 識(即自)〉からすでに〈精神〉に送り出されていた諸〈感覚(という観念)〉や諸「感情」(嘔 吐や不安)に対して、また一方では外的〈世界〉から〈精神〉に「受容され」ていた、「現実」 の〈諸感覚〉に対して〈能動〉的に「働きかける」〈意識(即自)〉の、〈意識(即自)〉への「受 け入れ」を不可能にする、「否定(拒否)」なる〈観念(思惟)〉であった(後者にいう〈諸感覚〉 はみての通り、〈意識(即自)〉に直接「受容される」のでないからして、この点からも、この〈諸 感覚〉を生じさす外的〈世界〉は〈意識(即自)〉に関係しなくなるといわねばならぬわけである)。 そこでーに、筆者が諸「感情」(これを以下〈嘔吐(不安)〉と表記する)を〈観念(能力)〉と みなしたはなぜか。哲学(観念)上の〈意識(即自)〉では〈諸感覚〉が諸〈感覚(という観念)〉 と書かれたのだから、これと併記させてある〈嘔吐(不安)〉も〈観念(能力)〉であるは当然で ある。それに〈嘔吐(不安)〉はある意味〈意識(即自)〉で〈産出〉される〈諸感覚〉と関係し ており、この〈諸感覚〉をもとに発する能力ともいわれるからである。その〈嘔吐(不安)〉な る〈観念(能力)〉さえ一担〈精神〉に伝えられてしまうと、筆者に当の〈意識(即自)〉がかか る〈観念(能力)〉に対し「どうすることもできな」くなるといわせたは、〈精神〉に伝わってい た〈嘔吐(不安)〉にとっても、それ自身すでに〈意識(即自)〉に関係しないことを示唆させる ほか、〈嘔吐(不安)〉は例の外的〈世界〉の何らかの対象から、まさか〈嘔吐(不安)〉と名付 けられ呼ばれるわけがないために、上記の括弧内に述べたことと同様、この〈嘔吐(不安)〉に おいても、外的〈世界〉は〈意識(即自)〉に関係しないことを再度明らかにさせてくる。つまり、 外的〈世界〉から「受容される」、「現実」の〈諸感覚〉がたとえば視覚を通して〈精神〉に捉え られる〈感覚〉でしかないのに比べ、〈嘔吐(不安)〉は〈意識(即自)〉自らの〈能動〉的働き から生じ、〈精神〉に送り出された点で、両能力の出所の相違がみられるが、他方で「現実」の〈諸 感覚〉はだから、外的〈世界〉にかかわるとみなされども、その〈精神〉が〈諸感覚〉をそれと して〈精神〉の〈場〉に〈存在〉させるにすぎない点では、要は外的〈世界〉自らが〈諸感覚〉 にさえ関知しない点では、〈意識(即自)〉が名付けた〈嘔吐(不安)〉に外的〈世界〉を関知さ せないと触れおいたことと同様にみてかまわぬし、この〈嘔吐(不安)〉を〈観念(思惟)〉させ、 そう命名し得た〈意識(即自)〉の方はだから、外的〈世界〉に関係することがなくなるという ことである。

また一に、筆者は〈意識(即自)〉が自らに当初〈観念(思惟)〉しては、〈精神〉に送り出した〈嘔吐(不安)〉をば、再び「受け入れ」るよりか、「否定(拒否)」する〈観念(思惟)〉で対応させ、この「否定(拒否)」をもって、即座に〈意識(即自)〉に例の〈投企〉なる〈観念(思惟)〉を表出させ得たとみるが、果たしてこうした見方は許されるかである(何ゆえ〈意識(即自)〉が〈嘔吐(不安)〉を「否定(拒否)」するのかは、そのさらなる〈能動〉的働きによって、「否定(拒否)」に取って代わるべき〈観念(思惟)〉たとえば〈投企〉を打ち出すためにあると思われる)。このことをしかりと断じるからには、筆者なりの証明が必要である。その際、以下のことが繰返しになるやも知れぬが、取り上げられていなければならない。まず、〈精神〉に疾うに伝えられていた〈嘔吐(不安)〉に対し、〈意識(即自)〉は〈嘔吐(不安)〉を「否定(拒否)」しようと、「否定(拒否)」なる〈観念(思惟)〉を生み出し、〈精神〉に伝えるべく「働きかけ」た(〈嘔吐(不安)〉はこれで「否定(拒否)」される)と同じく、〈投企〉も〈意識(即自)〉の働きで〈産出〉され、〈精神〉に伝えられたことになるといえるにせよ、その〈投企〉は〈嘔吐(不安)〉を「否定(拒否)」したのちにすぐ、〈意識(即自)〉で生まれることにある。そして、かかる経過ないしは経緯には時間的経過が、あるいはむしろ、哲学(観念)上の〈観念(思惟)〉にあって、サルトルにいう、〈必然性の観念〉たるべき〈論の筋道〉がみられるのだ。〈嘔吐(不安)〉

やこの「否定(拒否)」から〈投企〉へという時間的経過のこともさりながら、こうした諸〈観 念(思惟)〉の経緯は〈論の筋道〉に従われていることを明かしくるし、これらに〈論の筋道〉 がたどられないようでは、〈嘔吐(不安)〉が「否定(拒否)」なしに、しかも〈投企〉すら関与 しない、〈実存〉の契機に充当するともかぎらなくなる。このときしかし、〈投企〉の語が明記さ れる以上、〈投企〉はいつ、どこで役立つごとくに用いられる〈観念(思惟)〉になるのか。その 通りでは、彼がなぜ〈投企〉を持ち出すに至るかの経緯さえ分からなくなるばかりか、〈投企〉 は〈意識(即自)〉の能力〈理性(知性)〉をして〈嘔吐(不安)〉やその「否定(拒否)」の諸〈観 念(思惟)〉を導出させたうえで、これらの〈論の筋道〉にかかわらせる一つとして提示された ことが不可能になる。だがそうはならなかった。筆者はそこに立って、〈精神〉に送り込まれた 〈嘔吐(不安)〉がそれ自身で〈精神〉にて〈実存〉の契機とされるのではなく、〈実存〉の契機 をば〈意識(即自)〉にみられることとし、その〈意識(即自)〉に「働きかける」〈投企〉に委 ねることを(なぜかは後述もする)、それには〈投企〉にとって、〈嘔吐(不安)〉の「否定(拒否)」 を踏まえねばならぬことを、こうした〈投企〉でもって、再び〈意識(即自)〉に立ち会うよう に関与せしめることを、かつ「否定(拒否)」や〈投企〉を打ち出していた〈意識(即自)〉にお いて、残像したか否か分からねども、筆者が思うに、「否定(拒否)」なる〈観念(思惟)〉が万 が一残像したままであるならば、当の〈意識(即自)〉にその〈無化〉を呼び起こす契機に繋が ろうことを、はたまたそこにはかかる〈論の筋道〉が筆者からすると、彼独自の「知る作用(認 識の起こり) | たる〈認識論 (観念論)〉として整合し一貫されてあることを知り得る。だから〈嘔 吐(不安)〉なる〈観念(思惟)〉に対し、「否定(拒否)」や〈投企〉なる各〈観念(思惟)〉が 関係するとみたにあって、彼がかりに〈嘔吐(不安)〉を上記と無関係に、直接〈意識(即自)〉 に「受け入れ」させると語ったならば、当然〈意識(即自)〉が〈嘔吐(不安)〉に向けた「否定 (拒否)」や〈投企〉なる各〈能動〉的〈観念(思惟)〉を発するなどはあり得ぬであろう(〈精神〉 の〈場〉に居残っていた〈嘔吐(不安)〉がいかなる助けも介さずに、自ら〈意識(即自)〉にか かわることはない。彼がこうした〈認識論(観念論)〉をいかに思うがままに振るまえるよう操 作させてもだ) し、そもそも〈嘔吐(不安)〉の「否定(拒否)」やこの「否定(拒否)」と同時 に打ち出されるにちがいない〈投企〉(〈参加〉〈行動〉や〈選択〉) は筆者にすると、〈嘔吐(不安)〉 からの解放を手立てさせる、当の各〈観念(思惟)〉であったと受け取ることができる(たとえ ば〈嘔吐(不安)〉を「否定(拒否)」しただけにとどまっていては真の解放にならない。そこで 彼はこの「否定(拒否)」に〈投企〉という〈観念(思惟)〉を課すことで、哲学(観念)上の〈嘔 吐(不安)〉(なる〈観念(思惟)〉)から完全に脱け出し得ると断じた)。しからば彼は何ゆえ〈嘔 吐(不安)〉を取り上げたのか。筆者の穿った見方でしかないやも知れぬが、彼には〈投企〉の ことが念頭にあり、〈投企〉を主張するうえで、要は彼にいう〈実存〉を掲げるうえで、哲学(観 念)上の〈嘔吐(不安)〉をば〈必然性(この場合では因果関係)の観念〉としてこしらえおく(作為する)必要があったと指摘してかまわない(だから彼に窺える〈観念論〉での因にあっては、一別段〈嘔吐〉や〈不安〉でなくともよいわけである)。その〈投企〉とは繰返しおくが〈嘔吐(不安)〉の「否定(拒否)」に立ち会えばこそ、そこに持ち出されねばならない〈観念(思惟)〉であると、さらにこのとき、〈投企〉が〈嘔吐(不安)〉にではなく、その「否定(拒否)」に直接かかわると、さらにまた〈投企〉の関与しない「否定(拒否)」はかかるままでは〈意識(即自)〉はむろんのこと、その〈無化〉にさえかかわらせることがない、そうした、哲学(観念)上の〈観念(思惟)〉でしかなかったと。要するに〈投企〉は〈嘔吐(不安)〉の「否定(拒否)」をもっていかにかされるべきかの、当の〈観念(思惟)〉に当てはめられたのであり、〈投企〉が〈実存〉の契機であることではじめて、〈意識(即自)〉に関係してくるという繋がりを持つことになる。だが筆者がそう語ったにせよ、当初〈意識(即自)〉で〈産出〉された、この〈投企〉がいかにして再度〈意識(即自)〉にかかわり得たか、さらなる問題を惹起させる。筆者はしかし、これを段を改めて扱うことにし、ここでは〈実存〉の契機に、〈精神〉にみられた〈嘔吐(不安)〉はもとより、当の〈精神〉や〈意識(即自)〉各自身が充当するのではないと結語するにとどめおく。

それで一に、サルトルはどうしたかである。いわずと知れたこと、彼は〈わたしは...投企であ る〉と〈観念(思惟)する〉ことによって、〈意識〉全体のなかの、〈わたし〉の〈場〉の〈わた し〉をこの〈投企〉とかかわらせるべく登場させ、かの問題を、すなわち「〈投企〉がいかにし て再度〈意識(即自)〉にかかわり得たか」を乗り切ろうとした。すでに触れおいたように、〈意 識(即自)〉からの〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安)は〈精神〉に送り込まれた諸能力であ り、また外的〈世界〉からの〈諸感覚〉は〈精神〉に「受容され」た諸能力であっただけに、諸 能力はともに〈精神〉に関係し、これらに対しもはや「どうすることもできない」でいる〈意識 (即自))には、ましてや〈わたし〉には関係することがなかった(つまりこれらの諸能力に〈意 識(即自)〉や〈わたし〉はかかわらないのだ)。だから例の〈投企〉も〈精神〉に伝えられてい なければ、〈精神〉に不在する〈投企〉に〈わたし〉が何も〈能動〉的に「働きかけ」たりする、 要は〈わたし〉の出番を〈意識(即自)〉からも求められたりすることさえなかろうし、〈わたし〉 がその〈投企〉に〈同化〉して〈投企である〉必要もなくなるであろう。あるいは〈意識 (即自)〉 が一担〈精神〉に送り出していた〈投企〉を「どうすることも」できる(いかにかに為し得る) ならば、〈投企〉に対し用意された感のある〈わたし〉は必要でなくなるにちがいなかろう。〈わ たし〉とともに〈投企〉が語られているかぎり、上記のようなことはない。したがって〈わたし〉 は〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安)のではなく、〈投企〉のために、〈投企〉だけと関係す るといわねばならなくなるわけである。しかり、哲学(観念)上の〈わたし〉すなわち〈投企〉

にあって、この〈わたし(投企)〉こそ、一方で〈わたし(投企)〉による、外的、〈世界〉への〈能 動〉的接触(関係)を、他方でその接触(関係)をして同時に、〈意識(即自)〉への〈能動〉的 「働きかけ」を可能にさせる。換言すると彼にとって、〈実存〉を誘導すべき、〈即自〉 から〈対自〉 への〈意識〉の〈変化(変身)〉をめがけることは、何よりそのめざす〈観念(思惟)〉に〈わた し(投企)〉なる〈観念(思惟)〉を仲に立てて、再び〈意識(即自)〉に向かわせることに、要 は外的〈世界〉と(現に)接触していることにあった。〈意識(即自)〉が関係しなかった外的〈世 界〉(誰もが各生きる社会)に「働きかけ」得る〈能動〉が〈わたし(投企)〉であり、かかる〈能 動〉は同時に、〈意識(即自)〉に「働きかける」ことになるのであった。このように、〈わたし(投 企)〉を導入せずば、〈意識(即自)〉は自らと外的〈世界〉や〈精神〉のそれぞれに対し「どう することもできない | でいるのだから、再度〈意識(即自)〉に立ち返らせ、これを〈意識(対自)〉 にするには、〈わたし(投企)〉の〈能動〉的働きに任かせられるしかなくなるわけである。〈わ たし(投企))の〈意識(即自)〉への「働きかけ」は〈意識(即自)〉を〈実存〉に向かわせる がゆえに、〈意識(即自)〉への橋渡しとなる〈わたし(投企)〉はその〈実存〉の契機になって いなければならぬことは、しかし筆者にすると、〈意識(即自と対自)〉を中心にした哲学(存在 論)が説かれているとは思えないのだ。なぜなら筆者にあって、彼にいう〈存在論〉の中核たる、 〈即自〉と〈対自〉の各〈意識存在〉は、少なからず〈意識(即自)〉に「働きかける」〈わたし(投 企)〉の仲介をして〈意識(即自)〉をはじめて外的〈世界〉に結びつけさすとした、こうした「知 る作用(認識の起こり)」が先きに成らずに語られてはならぬであろうといわざるを得ないから である。筆者がこれまで「あらゆる観念(能力)」と表記してきたそれは要するに、「知る作用(認 識の起こり)」としての、彼にいう〈意識〉全体を形成する〈意識(即自)〉〈精神〉と〈わたし〉 の各〈場〉の間を哲学(観念)上のことでだけでなく、「現実」のことでも行き来しよう「あら ゆる能力」でしかなかった。つまり彼が諸〈感覚に存在を与えるために〉と語っていたのだから、 諸〈感覚〉をはじめとした「あらゆる能力」の機能とこの働きを明らかにしたうえで、かかる〈存 在〉を肯定しないかぎり、その〈意識〉の〈即自〉と〈対自〉の各〈存在〉を問えるはずがない (たとえ彼自らも〈即自存在〉や〈対自存在〉という名称(観念)で〈存在〉しているわけでな いにしてもだ)。むろんここでは「あらゆる能力」ならびにそうした機能(働き)とは何かを繰 返しはしないが、それでも〈意識(即自)〉や〈わたし〉は〈能動〉的(働きの各〈場〉)であり、 〈精神〉は〈受動〉的(働きの〈場〉)であったことが確認されたほか、彼が〈こうした場を...精 神と名付けたり、ときには意識とも名付けたりする〉と記したほどだから、この〈精神〉と同様 に、〈わたし〉を〈わたし〉の〈場〉と、その〈場〉を〈意識〉全体に与させるためか、〈意識〉 とさえみなすことができたやも知れぬ。

しかし一に、〈精神〉や〈わたし〉が〈意識〉と同等に扱われるならば、これらをはじめから〈意

識〉と表記しておくべきでないか、何ゆえ〈精神〉や〈わたし〉の各〈場〉があえて設定された のか、しかも同等とみては、何ゆえ〈わたし〉が〈他者〉と表現されるか、筆者には見当がつか - ない。だから〈意識〉全体はそれぞれ異なる役割を担う〈場〉で構成されるがゆえに、かかる別 名を有したと捉えおくほかなかったのだ。かつ〈意識〉全体としてかかわるには、〈意識(即自 と対自)〉が中心であるは当然のこと、だからして何よりもまず〈意識(即自)〉による〈実存〉 の達成のために、これに役立つ〈精神〉や〈わたし〉である必要があった(ここからも彼が〈意 識存在〉を証すよりか前に、〈意識〉の〈即自〉から〈対自〉への〈変化(変身)〉までの、「あ らゆる能力」の「知る作用(認識の起こり(の機序))」に関した〈認識論(観念論)〉を語ると 受け取ることができる)。それゆえ〈他者〉である〈わたし〉は〈意識(即自)〉と同列に配置さ れたとみるは間違いである。なぜなら〈精神〉が〈ときには意識とも名付けられたりする〉とさ れた語句から推して、この〈意識〉とは〈精神〉や〈わたし〉が〈意識〉という働きをあらわす 一環として捉えることにあろう謂であり、〈精神〉と〈わたし〉は再度いうが、その〈意識〉の(ま ずは〈即自〉にかかわる)ために役立たれよう各役割を担うごとき、〈意識(即自)〉のいわば仲 問たるを示唆させども、しかし〈意識(即自)〉に対する〈わたし〉にあっては、〈わたし〉は〈意 識(即自)〉に「付け足しにされた」関係にしかないからして、「同列」と受け取ることができな いわけである。また例の〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安)を〈作〉り、これらを〈投企〉 を〈作〉り出すうえで各「否定(拒否)」するは、〈意識(即自)〉の働きによったからして、各 能力は〈投企〉を除き、〈わたし〉に関知することがなかった。つまり〈投企〉も含む、以上の 諸能力たる諸〈観念(思惟)〉自身は〈意識(即自)〉の働きで〈産出〉され、それらはすべて〈精 神〉に伝達されるだけであった(これをサルトルにみる「知る作用(認識の起こり(の機序))」 の一といわず、何というか)。さすれば諸能力が〈意識(即自)〉から送り込まれた、当の〈精神〉 とその〈意識(即自)〉との関係はいかにみえたか。筆者は疾うに、〈精神〉が〈意識(即自)〉 に「付け足しにされた」 関係にさえないことを指摘しておいた。要は〈意識 (即自)〉 から〈精神〉 に送り出された、あらゆる (観念 (能力)) がそのまま (精神) に居残っていては、 筆者がかの [(精 神〉から〈意識(即自)〉への関係」を想定してみても、〈精神〉自身はその〈投企〉以外、〈意 識 (即自)〉 にかかわらせるなどは不可能であった (〈意識 (即自)〉 の方もあらゆる 〈観念 (能力)〉 を〈精神〉に伝えたあとは、「どうすることもできない」でいた)。だから〈精神〉は〈意識〉と 〈名付けられ〉たにしろ、これと「同列」に配置されるのではないどころか、彼が構想した〈精神〉 の〈場〉は〈受動〉の〈場〉であるほかに役立つことがないし、あらゆる〈観念(能力)〉のう ち〈投企〉を除く、〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安)は哲学(観念)上の〈論の筋道〉にお いても、〈実存〉の契機になることがないわけである(〈精神〉が〈意識〉といわれる、その〈意 識〉にあって、問題にするに及ばない、論外の〈場〉でしかなくなることは、また〈投企〉が直

接〈意識(即自)〉にかかわるのでないことは、すでに明らかにしてあるが、後述もする)。だか ら〈嘔吐(不安)〉をはじめとした、上記の諸能力が「知る作用(認識の起こり(の機序)))にあっ て、これらに続く、〈意識(即自)〉の働きによる、「否定(拒否)」の、あわせてこの「否定(拒 否)」に立って生じる〈投企〉の各〈観念(思惟)〉なしに、〈実存〉の契機に相当させられると みてはならない(〈投企〉が「否定(拒否)」とかかわっていなければ、何ゆえ〈投企〉が〈論の 筋道〉の論理的一として語られ持ち出されくるか、彼から読み取れなくなろう。さらにこの〈投 企〉をもって〈意識(即自)〉に結びつかせないことには、筆者に「否定(拒否)」と〈意識(即 自)〉の〈無化〉(あるいは〈意識(対自)〉の〈無〉とが関連しなくなるだけか、まさに〈実存〉 の証しとなる、かかる〈無化〉(あるいは〈無〉)が何ゆえ生み出されくるか、分からなくさせる であろう)。要は〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安)が「否定(拒否)」されることは、「否定 (拒否)」が〈意識(即自)〉を〈無化〉にさせる、何らかのかかわりを有していないと、〈無化〉 がいかなる関係もなく、突然彼に主張されたと受け取られかねなくなる。これでは〈論の筋道〉 に反する。「否定(拒否)」はこの〈観念(思惟)〉によって〈意識〉(全体か即自か)にいわば何 も無い状態をもたらすことを示唆させるのだから、このことでも、〈意識(即自)〉の〈無化〉す る一に関係してこなければならぬわけである。それに〈意識(即自)〉の〈観念(思惟)〉により 〈作られる〉のが〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安)であるは確かだが、それでもこの〈感覚〉 的「感情」的能力が〈実存〉の契機にみなされてしまうと、〈意識(即自)〉を〈理性(知性)〉 による、その都度の論理に合った〈観念(思惟)〉を〈作る〉〈能動〉的働きの〈場〉に見立てて いると筆者には思える、その彼にあって、〈意識(即自)〉に関与させて見出されねばならぬ〈実 存〉自体は、その契機においてさえ、かかる〈感覚〉的「感情」的能力をば、同じ〈理性(知性)〉 の〈産出〉〈観念(能力)〉である、例の〈投企〉に比較させては、〈投企〉と同質な〈観念(思惟)〉 と捉えてならないどころか、この〈感覚〉的「感情」的〈観念(能力)〉でもって生じるのでは もはやないと語られるのだ。換言すると〈実存〉の契機は、かつ〈意識(即自)〉が〈無化〉や〈無〉 をめざす〈実存〉は〈論の筋道〉に合致させられる、彼の知的論理で操作されねばならぬからし て、〈理性(知性)〉とはおよそ異質な〈感覚〉的「感情」的能力によって成るはずがないという ことである。加えてこうした能力が彼の知的論理の一に数えられたにしても、彼はその操作にお いて、この〈感覚〉的「感情」的能力を直接また一度ならず〈意識(即自)〉にかかわらせはし なかった。彼はそうするより早くに、(意識(即自))をして〈観念(能力)〉を次々に〈作〉り 出させる〈理性(知性)〉の〈場〉とするためか、その〈場〉に〈感覚〉的「感情」的能力をは じめとした、あらゆる〈観念(能力)〉を残存させるのではなく、〈精神〉という〈場〉に追いや るのであった。

しかるに一に、〈意識(即自)〉のあらゆる〈観念(能力)〉が〈精神〉に追いやられたのだから、

〈意識(即自)〉はあらゆる〈観念(能力)〉を〈利用〉することも、「どうすることもできない」 でいる一方、〈精神〉は〈受動〉の〈場〉としての働きしかなく、〈精神〉自身で〈意識(即自)〉 に関与し得なかったのだから、この〈精神〉に追い出された〈投企〉の〈意識(即自)〉への関 係も不可能にさせられたのか。否であった。なぜならここでも、サルトルにみられる、哲学(観 念)上の〈論の筋道〉は、〈投企〉の〈意識(即自)〉への関係に対する、〈わたし〉の出番(登場) なしに成り立たなかったといわざるを得なくなるからである。〈意識〉全体をかたちづくる〈意 識(即自)〉や〈精神〉の各〈場〉のほかは、この〈わたし〉の〈場〉であって、その〈わたし〉 は繰返すが、以下に記すごとく、〈精神(投企)〉と〈意識(即自)〉に関係した。すなわち、す でに〈精神〉に〈存在〉していた〈感覚〉的「感情」的能力に対し、〈意識(即自)〉による「否 定(拒否)」の〈観念(思惟)〉が〈精神〉に向けて〈能動〉的に「働きかける」かすると即座に、 〈意識(即自)〉が〈投企〉を〈観念(思惟)〉しては、〈精神〉に送り込んだ機に、これもまた〈能 動〉的働きを可能にするとみた〈わたし〉が〈投企〉に「働きかけ」て〈投企〉と〈同化〉し(こ の瞬間から〈投企〉も〈能動〉的能力になる)、この〈わたし〈投企〉〉をもって、外的〈世界〉 と同時に、〈意識(即自)〉にかかわり得ることを示唆させるだけか、わけても〈意識(即自)〉 にあって〈わたし(投企)〉は〈意識(即自)〉に〈実存〉の契機としてかかわり、これにより、〈意 識(即自)〉自らが〈変化(変身)〉させられて、まずは〈無化〉なる〈意識(即自)〉に、さら に〈無〉すなわち〈自由〉なる〈意識(対自)〉にせしめられる関係を有すると。だから〈無化〉 や〈無〉すなわち〈自由〉の原動力は〈わたし(投企)〉でなければならぬし、〈わたし〉に関し ては、〈わたし〉は〈意識(即自)〉にだけでなく、〈意識(対自)〉にさえ各「付け足しにされた」 といい得たわけである。こうして〈投企〉を〈わたし〉に関連させて読む筆者は、「〈精神〉から 〈意識(即自)〉への関係」と記したなかでの語〈精神〉を〈わたし(投企)〉に置き直しおく必 要があろう。〈わたし(投企)〉に置換された〈精神〉は確かに〈意識〉全体を〈受動〉の一〈場〉 として構成された役割を担ったが、しかしその〈精神〉にそれ以外の役割を付与できないとみえ たからか、筆者はそれ以上のことで〈精神〉を問題にせずともよいと指摘しておいたのだ。つま り〈精神〉自身は、外的〈世界〉からの〈諸感覚〉が「受容される」か、〈意識(即自)〉からの 〈感覚〉的「感情」的能力が伝えられるにすぎない〈場〉であるためか、〈精神〉の方から〈意識 (即自のみか対自)〉に、〈わたし〉に、また外的〈世界〉に「働きかける」各関係を有すること は不可能であった。さすれば筆者がこの〈意識(即自)〉に関連させて表記した「〈精神〉は〈意 識(即自)〉に「付け足しにされた」」とはどうみることができようかである。〈精神〉自身が〈意 識(即自)〉に関係しないと述べた以上、およそ「付け足しにされた」という表現は適当しない のではなかろうか。いやそうとはいいい切れない。この「付け足しにされた」は、「〈わたし〉は 〈意識(即自と対自)〉に「付け足しにされた」」と同様、その語義以上のことを意味させるので はない。それは、〈精神〉があらゆる〈観念(能力)〉を伝達させた〈意識(即自)〉との関係なしに、〈精神〉の〈場〉が生み出され、かつ〈受動〉の〈場〉になりはしなかった(要は「付け足しにされた」は〈意識(即自)〉の〈精神〉に対する、〈能動〉的働きを踏まえたうえで、〈精神〉に用いられる語句であり、その謂を超えるのではない)し、何より〈意識〉全体を構成する一〈場〉なる〈意識(即自)〉が〈意識〉全体の中核であり、残る〈精神〉と〈わたし〉の各〈場〉が〈意識(即自)〉の〈場〉と同列に配置されるのでないことを証す(語句になる)からである。また〈わたし〉の方はといえば、彼は筆者に表記された〈わたし(投企)〉たる語句表現を一度も使わずに、個別に語るからして、筆者が〈投企〉の語に〈わたし〉を重ね合わせて読むことを強いられるは確かだが、しかし〈わたし〉は〈他者〉であると記されるように、ことが〈わたし〉と〈投企〉とに関するだけではないと知るとき、そこに散見した〈わたし〉から、筆者はその何かを探ろうとて、これまで述べてきた以上のことを見出せないと、換言すると彼の哲学に占められる、〈わたし〉の位置は軽んじられないと筆者に思われるに、それを否定すべき見方(思想)が彼にみえてこないといっておくほかなかったのである。

そして一に、上記した〈わたし(投企)〉は哲学(観念)上の〈わたし(投企)〉にとどまるだ けで済ませられるのかである。否であった。このくわたし(投企)〉にはさらに筆者にいう「動き」 が同時に伴なわれていなければならなかった(そうみておかないと、再度いうが、〈わたし(投 企)〉は〈わたしのために〉〈あらわれる〉べき、外的〈世界〉に現に接触することが不可能にな り、こうした接触のなかで、〈わたし(投企)〉が〈実存〉の契機として〈意識(即自)〉にかか わり、そのうえ〈意識(即自)〉の〈無化〉から展開されよう〈実存〉に達することさえできな くなろう)。「動き」とは当然、哲学(観念)上の〈わたし(投企)〉を〈産出〉させる、〈意識(即 自)〉の働きを、つまり〈意識(即自)〉内での「行動(運動)」をさすことにみられるが、しか しここでいうはそれだけにかぎらない「動き」(「行動(運動)」)、つまり〈意識(脳)〉以外の「動 き」であることになる。それは誰の指摘を待つまでもなく、〈身体〉の「動き」である。〈身体〉 の「動き」はまた、筆者にすでに〈わたし(投企)〉は「外的〈世界〉に現に接触する」といわ せた通り、「現に」という、〈身体〉の「現実」の「動き」を語るのでなければならない。したがっ て今問う〈わたし(投企)〉は、なるほど哲学(観念)上の〈わたし(投企)〉も「現実」に〈観 念(思惟)〉されたことにちがいなかろうが、それでもサルトルにとって、哲学(観念)上の〈わ たし(投企)〉を基にするはむろんのこと、そこだけにとどまるよりか、その〈身体〉の「動き」 を「現に」伴なわせた、「現実」の〈わたし(投企)〉にかかわらせることにあったと察知される。 以上からみえることは、この「動き」のことを〈わたし(投企)〉に当てはめなければ、彼の哲 学はまったき〈観念(理想)論〉に終始しようことを示唆させる(だがこの「動き」のことを彼 の哲学に取り込んでも、〈観念論〉といわれるかの判断は後述に譲る)。また「動き」が課せられ

ない〈わたし(投企)〉のことであれば、「現実」の〈無化〉や〈無〉は生じないであろう(しか し筆者にすると、彼がどれほど〈無化〉だ〈無〉だと叫んだとて、この〈無化〉や〈無〉は、「現 実」の〈無化〉や〈無〉であってさえ、もしや〈観念(思惟)〉に基づかされたそれぞれである かぎり、かのヴェーユにいう、外的〈世界〉に接して出会わざるを得ない〈生の現実〉たる、〈不 幸〉の〈受苦〉を、〈世界の美〉の〈歓喜〉を通したところでの、各〈空無(vide)〉によっても たらされたのではないし、これと比較すらできないことは確かだと断じずにおれない。彼にいう 〈無化〉や〈無〉に、彼女にいう〈空無〉にとって欠かせない能力は、前者では〈感覚〉的「感情」 的各能力ではなく、〈無化〉や〈無〉と〈観念(思惟)〉させるだけの〈理性(知性)〉であり、 後者では〈身体〉に発し〈魂〉に伝えられる〈感受性〉であった)。それに〈わたし(投企)〉と いう「働きかける」〈能動〉をもって、外的〈世界〉たる「現実」をその都度〈無化〉に向かわ せる〈意識(即自)〉に体現させるべく、〈身体〉を動かしめたとて、当の「現実」はこの〈身体〉 の「動き」にあわせられた現実としてあらわれるのではない、要は〈意識(即自)〉はその〈無化〉 をすぐさま実現させるのではない。だから機会ある度に、〈意識(即自)〉(現存在)は〈実存〉 の契機に出会わねばならぬ(〈身体〉が伴なう〈実存〉の契機はそれゆえ〈投企〉によるのであり、 もはや「感情」的能力なる〈嘔吐〉や〈不安〉によるとみてはならない)ことが、かつその〈意 識(即自))(現存在)を〈意識(対自)〉(本来的存在)にすべき〈実存〉をめざすことが彼の哲 学に促されてくる。このように、〈わたし(投企)〉に〈身体〉の「動き」が課せられることでは、 〈わたし(投企)〉は「現実」にかかわっていなければならなくなるだけか、すでに哲学(観念) 上の〈わたし(投企)〉でなしに、「現実」の〈わたし(投企)〉であることを、さらに〈投企〉 の「実践(実行)者」はもとより〈わたし〉であることを意味させる。そして〈身体〉を動かす、 「現実」の〈わたし(投企)〉であったればこそ、哲学(観念)上の〈意識(即自)〉の〈無化〉は、 次いでその〈意識(対自)〉の〈無〉はそれぞれ、「現実」の〈無化〉に、「現実」の〈無〉に受 け取らせ得よう(哲学(観念)上の〈意識(即自と対自)〉も当然かかる〈身体〉の「動き」の もとで、「現実」の〈意識(即自と対自)〉になり得ようが、この「現実」のときにあって、果た して〈意識〉は〈意識〉を〈即自〉だ〈対自〉だとして、それこそ〈意識〉する必要があろうか、 ないのだ)し、万が一「現実」の〈無化〉や〈無〉に達し得るならば、〈即自〉から〈対自〉に〈変 化(変身)〉した〈意識〉は外的〈世界〉(の「現実」) に接触したことになろうといわなくては なるまい(こうした「現実」が問われる際、例の、哲学(観念)上の〈精神〉がそれとしてある とみられるはまだしも、「現実」の〈精神〉自身がいかにあるかにあっては、〈意識(即自と対自)〉 や〈わたし〉のおのおのに対してさえいかなる関係も持ち合わせていないと指摘できるからして、 筆者はとくに「現実」の〈精神〉をさして論外であるといっておくしかなかったのである)。

サルトルはしかし、〈身体〉のことを前段までに触れたほかに、どう捉えていたとみることが

できるか、疾うに取り上げおいた諸引用文を踏まえ、そこから〈身体〉に関する、彼の主張を聞 き、筆者が「知る作用」を中心に問うてきた範囲で筆者なりの見方を交えながら、以下にまとめ おくことにする。一に、〈意識(即自)〉自らが〈感覚〉的「感情」的〈観念(能力)〉を〈作る〉 以外(むろんこれらはすべて〈精神〉(の場)に伝えられていた)、外的〈世界〉から生じる、「現 実」の〈諸感覚〉は〈意識(即自)〉に関係しないとされるがゆえに、〈精神〉に「受容される」 だけであった(ここに「現実」のと記したは、その際の〈諸感覚〉を諸能力とみなすことを、ま た上記した〈感覚〉的「感情」的〈観念(能力)〉という二表現も「現実」においては〈能力〉 であることを含意させる)が、不思議なことに、彼は後者でいう〈諸感覚〉をば〈身体〉(感覚 諸器官)から、たとえば〈精神〉に「受容される」とはみていなかったということである。これ は外的〈世界〉と〈意識(即自)〉は関係しないとした、彼の立場を証明することになる。要す るに、外的〈世界〉からの、「現実」の〈諸感覚〉は〈意識(即自)〉に関係しないと彼にいわせ たのだから、筆者には、「現実」の〈諸感覚〉が「受容される」〈場〉をあの〈精神〉として新た にこしらえざるを得なくさせたと、また彼の場合、かかる〈諸感覚〉は一般に語られよう、〈身体〉 (感覚諸器官)によって、〈意識(即自)〉にも〈精神〉にも伝えられなかったといっておかねば ならぬわけである(〈意識(即自)〉で〈産出〉される〈感覚〉的「感情」的能力も外的〈世界〉 に起因しなかったし、〈身体〉(感覚諸器官)に関係するのではなかった)。ここから彼にあって、 〈諸感覚〉や諸「感情」と〈身体〉(感覚諸器官)はこの後者から〈精神〉や〈意識(即自)〉へ という「求心」的伝達や、わけても〈意識(即自)〉から後者(身体感覚諸器官)へという「遠心」 的伝達なる各関係もみられないことが、だから〈諸感覚〉や諸「感情」を〈身体〉(感覚諸器官) に〈存在〉させるのではないことが、とどのつまり後者(身体感覚諸器官)は〈諸感覚〉や諸「感 情」の出所とならない、要は〈諸感覚〉や諸「感情」でないことが結語される。〈身体〉(感覚諸 器官)は〈身体〉の一部であるにもかかわらず、〈諸感覚〉や諸「感情」に対し、こうした関係 のない関係しか持たされはしなかった。

一に、上記した「伝達」とは、誰もが死ぬまで働き続けよう、「現実」の〈身体〉内での「動き」(「行動(運動)」)であるばかりか、サルトルにいう〈身体〉にとって、この「動き」はまた、外的〈世界〉に「現実」に「働きかける」〈わたし(投企)〉がまさに「働きかける」に同時に伴なわせられる、〈実存〉に向けた、〈身体〉を動かす「行動(運動)」のことを指し示させずにいなかった。ところが彼が筆者に〈わたし(投企)〉と表記させるのでなしに、たんに〈投企〉として用いたり、〈身体〉の方をときに〈わたしの身体〉と表現したりするにあって、筆者はこの〈投企〉と〈身体〉を、しかも〈投企〉と〈身体〉の「動き」を関係させる、彼の文章や語(句)をみかけることができないでいた。それでもたとえば、〈事物と他者(他人)〉をさす外的〈世界への現前〉という〈現前〉の語からは、かかる関係がみられるやも知れぬと予想できなくもないが、し

かし〈現前〉の語意に〈投企〉を当てはめたとて、〈現前〉は〈身体〉もしくは〈身体〉の「動き」 までもあらわすはずがあるまい(「現実」のを語る際はなおさらそうにちがいない)。彼がまた 〈投企〉の語意に〈身体〉もしくは〈身体〉の「動き」を含ませてあると述べるならば、別の話 に受け取られようが、しかし〈投げ企てる〉〈投企〉が〈わたし〉の「働きかける」〈能動〉で可 能になろうとみえるにしろ、そこに〈身体〉もしくは〈身体〉の「動き」を伴なわせよとは筆者 に読めなかった(ここも哲学(観念)上のことならまだしも、「現実」のを語る際はなおさらそ うにちがいない)。それゆえ筆者は〈身体〉なかでも〈身体〉の「動き」のことが〈投企〉と関 係させられずに、両者が彼に個別に論じられていたと捉えおくほかなくなるわけである(ただ筆 者に〈わたし(投企)〉と表記させたことでは、〈わたしの身体〉と〈わたし(投企)〉は関係さ せられるとみることができる。なぜなら〈わたしの身体〉といわせる〈わたしは…投企である〉 からであった。彼にいう〈投企〉がかかる意味で用いられたならば、それでよしと予想も可能で あろうが、それでもその明記がないだけか、およそ例の、〈身体〉の「動き」のことは語られて はいないのであった)。〈身体〉の「動き」について彼に記されないとみられることはだから、こ れが哲学(観念)上のや「現実」のことであろうとなかろうと、〈身体〉の「動き」をしてもた らされよう、疲労、苦痛(苦しみ)、ヴェーユにいう〈不幸〉などに関する、いわゆる〈心身(身 心)〉の変容が彼に問われることがない、要は彼はそうした思想を持ち合わせてはいないといっ ておいたのだ。したがってここではそのことよりか、彼に〈投企〉と(〈身体〉の「動き」のこ とを除いて触れることになる)〈身体〉とを関係させずに別々に論じていたことが証されねばな らない。その一として、筆者は〈わたしのために、(外的)世界があらわれる〉や〈身体は、(外 的)世界の諸対象に...属しているのではない〉という各既出引用文を持ち出すことができる。こ れらを比べてみると、前者の文章の〈わたし〉に外的〈世界があらわれる〉には〈わたしがわた しの世界 – 内 – 存在 (être-dans-le-monde)) であるべきであって、そのために、かのハイデッガー が〈世界 - 内 - 存在 (In-der-Welt-sein〉を、なかでも〈内 - 存在 (In-Sein)〉を〈了解 (Verstand)〉 (9) としてみなしていたように、サルトルにおいては、例の〈投企〉が打ち立てられていなければな らなかったことに、だから外的〈世界のなかの(人間)存在〉たらんとする〈わたしは...投企で ある〉必要が生じていることに対し、後者の文章の〈身体〉はその〈事物と他者(他人)〉なる、 外的〈世界の諸対象〉に、要は外的〈世界〉自体に〈属しているのではない〉といわれるところ で区別される。

さすればサルトルに語らせる〈身体〉は何かに答えをみつけなくてはならないであろう。むろん彼にいう〈身体〉の特徴に関しても、すでにわずかながらも掲げおいた諸引用文で知ることができるし、ここはそのおのおのを読んで把握するほかないが、それでもたとえば〈わたしがわたしの身体から逃れるのはわたしの無化によってである〉と記されることでもって、こうした一特

徴からさえ、〈身体〉は当の〈わたし〉とばかりか、前記した外的〈世界〉と、〈精神〉と、かつ 〈意識(即自と対自)〉のそれぞれといかなる関係にあるかないかを確かめたうえで、〈身体〉は 何かだと結語しても遅くはない。まず、〈身体〉と〈わたし〉についてである。〈わたしの身体〉 という表記からは〈身体〉と〈わたし〉が一見関係する(たとえば〈身体〉は〈わたし〉の一部 である)ごとき関係にあるとみられようが、上記した通り、彼にあっては、〈わたし〉が〈投企〉 と〈同化〉できるからして〈投企〉に等しく捉えられていたとて、〈わたし(投企)〉を促す〈身 体〉の「動き」に、しかもその「現実」の「動き」に関し触れ得なかったためか、〈身体〉と〈わ たし〉は筆者にすると、〈身体〉をして〈わたし(投企)〉たらしめることにならないといわねば ならなくなるし、〈わたしの身体〉の〈わたしの〉は〈意識〉全体のうちの〈わたし〉の〈場〉 の〈わたし〉に関係するにすぎないのであり、またこの〈意識(わたし)〉は〈身体(脳)〉をさ しはしないのだから、〈わたしの身体〉とはその〈わたし〉が〈わたし〉の〈場〉に位置し、そ こからみた〈身体〉をいう以外のことではなく、さらにこれを抜きにしてさえ、〈身体〉が〈わ たし〉に、〈わたし〉が〈身体〉にかかわるなどといってはならない。〈身体〉と〈わたし〉が無 関係であることは、〈身体はわたしにとって、外在的(なもの)でも、認識される(もの)でも あり得ないであろう〉(10)という引用文をもって証明されるからである。つまり〈身体〉が〈わ たし〉に〈外在的(なもの)〉としてあるのではないにもかかわらず、〈認識される(もの)〉で ないとみられるからして、関係することがないわけである(序でにいうと、この引用文から、〈意 識〉全体のなかで〈他者〉とされる〈わたし〉がこの〈他者〉であるゆえか、〈認識する〉〈認識 される〉働きを可能にするのではないことが、だからかかる働きは〈意識(即自)〉にしかない ことが明らかにされたと読み取り得る)。また彼が〈わたしの世界(‐内‐存在)〉と記させた際 の〈わたしの〉も上記した〈わたしの身体〉の〈わたしの〉と同様に捉えられると指摘しておく。 次に、〈身体〉と外的〈世界〉や〈身体〉と〈精神〉についてである。筆者がこの二項を一括す るは、外的〈世界〉や〈精神〉のいずれも、およそ〈身体〉と関係することがないと見て取れる からである。これを証すに再度記す、外的〈世界〉に関する引用文は〈身体は...(外的)世界の 諸対象 (事物と他者) に…属しているのではない〉であった。要は彼は例の〈わたし〉が外的〈世 界〉にかかわる(だがこれは外的〈世界〉が〈わたし〉に関係するのを示唆させない)ことに対 し、〈身体〉は外的〈世界〉に関係しないとみるほかなかった。一方外的〈世界〉が〈わたし〉 にではなく、〈精神〉にかかわるといえたは、外的〈世界〉から生じた〈諸感覚〉が〈精神〉に「受 容され」たことによるだけであり、そこに〈身体〉が絡むことは一切なかったからである。何せ 〈身体〉は〈諸感覚〉ですらなかったのだから(〈諸感覚〉が〈精神〉にかかわり、前記した〈わ たし〉にではないことは、ここで〈諸感覚〉と〈身体〉が無関係とみられたことからも、〈わたし〉 が〈身体〉と関係しなくなることを明かさずにいないといわせ得る)。このように〈精神〉は、〈身 体〉とはもとより、〈わたし〉とも、あるいは〈意識(即自ましてや対自)〉とも関係しないとされるならば、〈諸感覚〉が「受容される」以外の、それぞれとのいかなる役割をも持ち得なかろうし、穿った見方やも知れぬが、彼が外的〈世界〉との関係の保持のためにのみ〈精神〉(の場)を、あわせて外的〈世界〉に関係しなかった〈意識(即自)〉の代わりに、サルトル本人以外をさす〈わたし〉(の場)をこしらえようとした印象を抱かせるは筆者ばかりであるまいといっておいたのだ。そして、〈身体〉と〈意識(即自と対自)〉についてである。これを明らかにするに、既出引用文以外のそれにも聞いてみよう。

Le corps... c'est ce qu'elle (la conscience) est; elle (la conscience) n'est même rien d'autre que corps.⁽¹¹⁾(括弧内は筆者)

身体は...意識がそれであるところのものである。意識は身体のほかの何ものでもない。

Il (le corps) la (la conscience) rend possible jusque dans sa liberté même. (12) (括弧内は筆者)

身体は意識を、まさにその自由においてでさえも、可能ならしめる。

筆者は上記二引用文中の〈意識〉に関し、以下のことを繰返してでも指摘しておく必要がある。すなわち、サルトルは〈意識〉に対して、〈即自〉(現存在)と〈対自〉(本来的存在)を打ち出し、その〈対自と即自との関係〉をば〈即自〉から〈対自〉へと〈変化(変身)〉(の関係に)させるために、〈意識〉をして、〈対自は即自に対する、無化や徹底的否定であ〉らしめさせねばならぬことを主張していたと。するとこうした〈意識〉にかかわる〈身体〉の方は彼にいかに表現されていたかである。かかる〈身体〉が何かを探るに、筆者はこれまで適宜取り上げてきた既出引用文から、〈対自は身体である〉や〈身体は対自よりほかの何ものでもない。身体は対自のうちの、ひとつの即自でない〉、要は〈身体は…即自でない〉という各文章に注意せずにおれなくなる。ここから、上記二引用文中あわせて三箇所に記される〈意識〉(の語)はすべて、〈即自でな〉〈、〈対自〉にいい換えられて受け取ることができる。彼はこれをもって〈対自 - 存在としての身体(Le Corps comme Etre-Pour-Soi)〉(13)という(ちなみに既出引用文〈他者は他者の諸体験の統合的一致として、…わたしの体験を組織立てにくる〉をもって、〈対他 - 身体(Le Corps-Pour-Autrui)〉(14)という)。だから既出引用文〈意識は意識の身体を実存(存在)する。…意識は意識としてしか、意識の身体を実存(存在)することができない。したがってわたしの身体は、わたしの意識の身体を実存(存在)することができない。したがってわたしの身体は、わたしの意識のひとつの意識的構造である〉とされたなかの、〈意識的構造〉の形容詞(意識的)を

除いた名詞〈意識〉も上記と同じく〈対自〉に置き換えてかまわなくなる(この段落に持ち出し た諸引用文のうち、たとえば〈ひとつの即自〉や〈ひとつの意識的構造〉という各語句の〈ひと つの〉についてはすでに説明しておいたと、また〈わたしの体験〉や〈わたしの意識〉という各 語句の〈わたしの〉も前記した通り、〈わたしの身体〉の〈わたしの〉と同様、〈わたし〉の〈場〉 からみた〈体験〉や〈意識〉として用いられていたと付記しておく。なかでも彼に〈体験〉と記 させた際、〈意識(即自も対自も)〉は外的〈世界〉に関係しないといえたがゆえに、〈わたし(の)〉 でなければ〈体験〉できないのだと。さらに〈わたしの身体は、わたしの意識のひとつの意識的 構造である〉といわせたにあって、〈わたし〉の〈場〉からみるならば、〈身体〉は上記した〈対 自(- 存在)としての身体〉になろうし、それが〈意識〉全体をかの三〈場〉で構成する、〈意 識的構造〉の〈ひとつ〉(の〈場〉)であろうと)。しかし以上のことを知り得たとて、〈わたしの 身体〉という表記は彼に何を意図させるにあったのかである。筆者は疾うに、〈わたし〉と〈身体〉 が関係しないと述べただけか、かかる表記は〈意識〉全体の一〈場〉たる〈わたし〉からみた〈身 体〉でしかないと断じおいた。にもかかわらず、彼が何度となく〈わたしの身体〉という語句を 使い、これを役立たせようとするからであろうか、その〈わたしの身体〉に対し、〈身体の第三 の存在論的次元 (La troisième dimension ontologique du Corps) \(^{(15)} と名付けたことは、これが 〈第三の〉といわれるからして、〈対自(‐存在)としての身体〉や〈対他‐身体〉に次ぐ〈身体〉 であり、「第二の」〈対他 - 身体〉が〈他者(他人)〉の〈身体〉をさすことでは、「第一の」と〈第 三の〉に共通する、〈意識〉全体内の〈意識(対自)〉や〈わたし〉のことから除かれるにしても (〈意識〉全体の--〈場〉〈精神〉は一切〈身体〉に関係しないため、この際も論外となると付記 しておく)、それならばなおさら、この「第一の」〈身体〉に対するに、〈わたしの身体〉は〈わ たし〉にとっていかなる〈身体〉であり、「第一の」〈身体〉といかに関係するか(否か)を確認 させることを課してくる。もともとーなる〈身体〉だからして、この〈身体〉がこれも本来一な る〈意識〉とどうかかわるか(否か)を質すだけでかまわぬのに(だが彼はいわゆる〈心身合一〉 を認めることがない)、〈第三の〉に至るまでの〈身体〉や〈意識(即自と対自)〉と〈わたし〉 を構想し、その「使い分け」を得意にするとみえる彼にあって、それでもおよそ〈第三の〉〈身体〉 は「第一の」〈身体〉とは別の〈身体〉でないとみなしおかねばならない。おのおのが別々の〈身 体〉であれば、一なる〈身体〉であり得なくなろう。それでは〈第三の〉〈身体〉はどうみられ るか。かかる〈わたしの身体〉は〈わたし〉が〈わたし〉の〈場〉からみるのだから、〈わたし〉 に対象として受け取られる〈身体〉になる。その「対象」は必ずや〈意識(対自)の身体〉でな くてはならない。要は「対象」としての〈身体〉は筆者にすれば、〈意識(対自)の身体〉のた めにこしらえられた感を否めなくさせよう。そうでないかぎり、〈わたし〉によって「対象」と しての〈身体〉が〈意識(対自)の身体〉と一なる〈身体〉にたらしめられることはない(たと

え〈わたし〉や〈意識(対自)〉の各〈場〉にかかわることであっても、これも一なる〈意識〉のことに変わりがない)。また〈わたし〉すなわち〈身体〉であり得ぬために、〈わたしの身体〉は〈わたし〉にとって「対象」としてなければ〈意識(対自)の身体〉に繋がることはない(この繋がりの経緯については、またこの繋がりゆえに彼に発想されたのが例の〈統合〉の〈観念(思惟)〉であると思えることについては後述する)。換言すると「対象」としての〈身体〉が〈意識(対自)の身体〉に当てはめられることで、「対象」としての〈身体〉を〈意識(対自)の身体〉にさせ得る、〈対自は身体である〉(あるいはこの文章の主語と属詞を入れ替えて、「身体は対自である」)と彼に語らせることができたのであり(そうでなくば、彼が〈第三の〉〈身体〉を〈観念〉するなどは不要になろう)、それではじめて、彼は彼なりに〈身体〉のことをば〈乗り越え〉られるほどに明らかにさせ得たといえるのだ。

サルトルは〈わたしはわたしが存在するかぎりにおいて、わたしの身体である〉とも述べてい た。ここでいう〈わたし〉は彼本人を直接さすのではなく、哲学(観念)上の〈わたし〉のこと であるし、〈わたしの身体〉の方は筆者にすると、前段に記した「対象」としての〈身体〉にみ られることにあった。したがって〈わたしが存在するかぎり〉(〈存在する〉は〈être〉であり、 〈exister (実存する)〉という語でないために、この場合は〈意識〉が〈即自〉であるのと同様、〈わ たし〉も〈即自〉として〈存在する〉)、〈わたし〉は〈わたしの身体〉(「対象」としての〈身体〉) をそれこそ「対象」に位置させるほかなくなる。そうせざるを得ないは、〈わたしの身体〉たる 〈身体〉が〈即自でない〉(要は〈存在する〉といえないばかりか、筆者にさらにいわせると、〈身 体〉を〈即自でない〉という〈観念〉として打ち立てておいたにすぎない)し、〈身体〉が〈わ たし〉によって〈観念〉されるのでもない(〈観念〉するは〈意識(即自)〉の働きである)から である。だが筆者は何ゆえ〈わたしの身体〉を「対象」に見立てるといい得るのか。これを知る には次に掲げる既出引用文が欠かせなくなり(それは筆者が〈わたしは...投企である〉と何度も 用いた、その全文となる)、そこからかかる「対象」が何と(同じに)受け取られるかを筆者に 見定めさすことができる。すなわち、〈わたしは、わたしの存在の根源そのものにおいて、他者 を対象(客観) 化すべき投企であり、あるいは他者に同化すべき投企である〉 とされた文章にあっ て、筆者が〈わたしの身体〉(「対象」としての〈身体〉)をそこに記された、外的〈世界〉にお ける〈他者(他人)〉(もしくは〈事物〉)(これらは現に〈存在する〉)と同じく捉え得るならば、 〈他者(他人)〉などはむろんのこと、〈観念〉 により打ち立てられた〈わたしの身体〉も〈わたし〉 の〈場〉からみた「対象」にしか位置づけられないであろう(「からみた」の「みた」とは「知 る作用(認識の起こり)」の〈感覚〉のことでなしに、「(の)立場に立つ」とされる謂である) とともに、〈わたし〉は〈わたし〉において、〈他者(他人)〉の〈身体〉(「第二の」〈身体〉すな わち〈対他一身体〉)を、ならびに今問う「対象」としての〈身体〉すなわち〈わたしの身体〉

をまさに〈対象(客観)化〉させ、それぞれに〈同化〉することができると語られる。だから〈対 象(客観)化〉や〈同化〉にとって、「対象」としての〈身体〉は〈対他 − 身体〉と同様な「対象」 に位置していなければならぬし、この〈対象(客観)化〉や〈同化〉にさせるに、彼に〈観念〉 された〈投企〉(〈参加〉〈行動〉や〈選択〉)しかもはやなかろうといい得るわけである。なぜか は、〈対象(客観)化〉や〈同化〉に対し、〈投企〉の〈観念〉を持ち出さず、黙しているのでは、 つまり何も〈観念〉しないのでは、〈対象(客観)化〉や〈同化〉は成ることがないからである。 いずれの場合であっても、ここではしかし、〈わたしの身体〉を例にすると、〈意識(即自)〉で〈産 出〉された、いわば〈表象〉にすぎぬ「対象」としての〈身体〉が〈対象(客観)化〉や〈同化〉 させられたは、この〈投企〉の〈観念〉によってこそなのであり、かかる〈身体〉の〈対象(答 観)化〉や〈同化〉をしてその〈投企〉(の〈観念〉)を、〈対自は身体である〉という〈対自〉 に向かわせることに繋がるとみなさなければならなくなる。そしていうまでもなく、その〈投企〉 (の〈観念〉) を可能にさせるのは、上記引用文にみられる〈わたし〉以外にないのだ。なぜなら 〈わたし〉のほかに、〈意識〉全体のうちの〈意識 (即自と対自)〉も〈精神〉も外的〈世界〉に「働 きかける」ことが、これすなわち〈投企〉を担うことができなかったからである。〈投企〉がす でに触れたごとく、〈わたし〉に〈同化〉しないでは、どこにも〈投げ企て〉られずにいるは当 然であった。

しかも〈わたしは…投企である〉はこのように〈観念〉された〈わたし(投企)〉をさすだけ にとどまらせるのではなかった。〈投企〉なる語は確かに〈投げ企てる〉ことの語意を有するの だから、それ自身にそうした何がしかの「動き」をすでにあらわし含ませているやも知れぬが、 しかしこのことは筆者からすると、〈わたし〉に伴なわれた〈投企〉という「動き」にすぎない、 要は〈投企〉が〈わたし〉にかかわっているのであり、〈身体〉を動かす「動き」すなわちその〈投 企〉ではあり得ないと判じおかねばならなくなる。なぜなら哲学(観念)上の〈わたし(投企)〉 や「対象」としての〈身体〉にあって、サルトルはかかる〈わたし〉と〈身体〉とが端から関係 することはないとみていたために、繰返すが、〈投企〉なる〈観念〉の方をこの段落冒頭の一文 で知る通り、〈わたし〉に当てはめさすことを、同時に〈わたし(投企)〉の方の「動き」となる ことを意味させて、〈投企〉(の語)を用いていたと察知される。さらにこの「動き」は「動き」 といわれる以上、もはや哲学(観念)上の〈わたし(投企)〉をさすにあらず、「現実」の〈わた し(投企)〉にかかわっていなければならなかった。要するに彼は「現実」の〈身体〉の「動き」 すら問わなかったのだから、〈わたし〉を実際に動かさずに、「現実」の〈投企〉にはなり得なかっ たということである。それゆえ彼は〈投企〉と〈同化〉したといえる〈わたし〉こそが外的〈世 界〉に現に「働きかけ」得る「動き」を「実践(実行)」するしかないことを主張していたわけ である。だが彼にとって、〈投企〉とかかわらねばならぬは〈わたし〉以外にないと語られども、

何ゆえ〈投企〉に、筆者にいう〈身体〉の「動き」を重ね合わせて捉えられなかったか、換言す ると彼はなぜ哲学(観念)上のや「現実」の〈身体〉の各「動き」を問わなかったのかである。 それは〈身体〉が哲学(観念)上の、「対象」という〈身体〉にあってみてさえ、その〈身体〉 が〈即自でない〉といわれるからである(さすれば、「現実」の〈身体〉のこと、しかもその「動 き」のことなどは推して知るべしであろう)。したがって〈即自でない〉〈身体〉に「動き」を課 することができないがゆえに、彼はその「現実」の〈身体〉を質し得なかったとみることが可能 になる。だから筆者には、〈身体〉の「動き」抜きの、彼にいわせよう「動き」すなわち〈投企〉 に見立てられるとはいえ、その〈投企〉はまさに動く「現実」に触れ得ないことを、つまり「現 実」の〈身体〉の「動き」を〈わたし〉に取り込ませないことを示唆させるだけか、こうした〈投 企〉にみえることはすべて〈観念(論)〉に立ってのことでしかないと指摘して過言ではない。 それに〈即自でない〉〈身体〉は〈即自でない〉と〈観念〉される〈意識(即自)〉で〈作られる〉 にしても、〈身体〉それ自身、この〈意識(即自)〉ばかりか、〈わたし〉にも、また〈即自存在〉 である外的〈世界〉にも無関係であったために、彼はそれぞれに対する〈身体〉を、その「動き」 を〈投企〉として語る必要などはなかったのである。再度いうが、彼にあって、〈事物と他者〉 たる外的〈世界〉に「働きかける」は〈わたし〉が「実践(実行)」する〈投企〉であり、〈意識 (即自)〉(内の働きで〈観念〉した〈投企〉)でも、ましてや筆者にいう「現実」の〈身体〉の「動 き」(筆者にはかかる「動き」も〈投企〉にみえる)でもなかった。さらに筆者に不思議に思え ることに、彼がこの〈わたし(投金)〉を現に〈意識(即自)〉に仲立ちさせるだけで、〈わたし(投 企)〉と関係しない〈身体〉を〈意識(対自)の身体〉にするためにか、〈意識(即自)〉を〈無化〉 に、〈無化〉により生じる〈意識(対自)〉を〈無〉にせしめることができると断じたことにある。 しかしてここで〈身体〉に関していわねばならぬは、〈意識(即自)〉において〈第三の〉〈身体〉 すなわち「対象」としての〈身体〉と〈観念〉された〈身体〉は、〈わたし(投企)〉によって、「第 一の」〈身体〉すなわち〈対自(-存在)としての身体〉になると、しかも〈即自でない〉や「対 自である」といわせるならば、〈意識〉が〈即自〉や〈対自〉と呼ばれるのと同じに扱われたり(た だし〈身体〉では〈即自〉のことは除外される)、あるいは〈意識(対自)〉に「付け足しにされ た」りするごとくに捉えられてかまわぬのではなかろうか。しかり。しかし〈第三の〉や「第一 の」とした、彼の見方がゆえか、各〈身体〉が〈意識(即自)〉で〈作られ〉し〈観念〉のそれ でしかないと見受けられては、誰もに現に所有される〈身体〉が彼に語られくるか(それが否で あれば、〈観念(論)〉から逃れられないことが証されよう)疑問である。そして以上のことから しても、彼に〈身体は捕えどころがない〉といわせるゆえんになろうとだけはいい得るのだ。

さて、この〈身体〉が〈意識(対自)の身体〉であるとされたほかに、サルトルは〈わたしが わたしの世界-内-存在の統合的一致において、そのことすべてを乗り越えるかぎり、わたしの 身体である〉とも、また〈この対自とこの世界との統合機能〉とも述べていた。最初の文章中の、 こうした〈統合的一致において、そのことすべて〉と記された〈すべて〉に含まれるそれは、続 く引用語句である〈この対自とこの世界〉という、並列した各語がさす中身に隠されている。筆 者がすでに一見した通り、〈この対自〉なる中身はもとより〈意識(対自)〉のことであり、その 〈意識(対自)〉に「付け足しにされた」〈対自としての身体〉のことであるし、〈この世界〉の中 身はその〈意識(対自)〉に「付け足しにされた」〈わたし〉のことであり、この〈わたし〉に「付 け足しにされた」外的〈世界〉のことであった。筆者はかかる〈意識(対自)〉、その〈対自とし ての身体〉、〈わたし〉と外的〈世界〉の〈すべて〉が繰返しいうが、外的〈世界〉に「働きかけ」 得る〈わたし(投企)〉によって、〈意識(即自)〉にかかわらせ(仲介させ)ては、その〈意識(即 自)〉の〈無化〉を通し、〈意識(対自)〉を現出せしめると同時に、この〈意識(対自)〉(もし くは〈対自としての身体〉)を〈無〉たらしめるときはじめて、 少なくも〈精神〉を除外した〈意 識)全体に亘る〈統合〉に加えられ、そうした〈統合的一致〉が哲学(観念)上のうえで可能に させられていたとみる。これは思うに、〈意識〉全体のなかで、〈意識 (即自と対自)〉 すなわち 〈わ たし〉ではないとみられた(〈わたし〉が〈意識(即自と対自)〉のそれぞれに「付け足しにされ た」から当然である)ことを〈統合〉することである。だから彼は〈統合的一致において〉、か の〈身体〉をば〈対自としての身体〉ではなく、〈わたしの身体〉といい得たのである。筆者は このことを以下に記す例から読み取らねばなるまい。上記した〈対自〉の〈無〉は〈即自〉を〈無 化〉することでもたらされた。したがって〈わたし〉の方はその〈即自〉に「付け足しにされた」 と指摘できたがゆえに、その〈即自〉の〈無化〉の影響を受けて、〈わたし〉も〈無化〉させら れねばならぬし、むろん疾うに語った〈対自〉の〈無〉に伴ない〈わたし〉も〈無〉になったれ ば、〈わたし〉がかかる〈対自〉に「付け足しにされた」関係を有することを証すであろうだけか、 これに倣い外的〈世界〉の〈無〉に(ただし「現実」の外的〈世界〉それ自体に〈無〉が〈存在 される〉かは疑問である)、同時に〈身体〉の〈無〉にも(ただし彼は〈身体〉が〈無〉になる とは語っていない。筆者にすると、〈身体〉は「対自である」という〈観念〉によって、〈意識〈対 自)〉に与されるだけであり、〈身体〉に〈無〉が見受けられたとしても、〈身体〉の〈無〉は〈意 識(対自)〉の〈無〉に見立てられるにちがいない)展開されるであろう。さすれば筆者には、 これまで取り出した引用文中の語句が、たとえば〈即自を無化する〉や、その〈即自〉をあらわ す〈自ら(自己)〉をもって〈自ら(自己)を無化する〉とした各訳語〈即自〉と〈自ら(自己)〉 が〈すべて〉の〈一致〉をねらいとする〈統合〉においては、筆者をして〈即自〉と〈自ら〈自 己)〉を〈わたし〉に換言させると捉えられる(筆者はこの謂で、〈自ら(自己)〉の訳語をとき に〈わたし〉に変えて用いてきた)のだから、ここにいう〈対自としての身体〉も〈わたしの身 体〉にいい直すことができると受け取られねばならない。なぜなら〈意識〉と〈わたし〉に代表 される〈この対自とこの世界との統合機能〉すなわちこうした〈統合的一致〉にあって、〈意識〉全体はそれこそーになる必要があると繰返し得るからである。しかしながら、哲学(観念)上の、例の〈投企〉なる〈観念〉に終始させずに、実際にこの〈投企〉を「現実」の〈わたし〉(現に外的〈世界〉に「働きかけ」ている〈わたし〉のこと)に代えて試みた場合に、果たして「現実」の〈統合〉が〈意識〉や〈わたし〉たる〈人間存在(個別的存在)〉に現出させられるのであろうか。疑わしいと答えおくほかあるまい。外的〈世界〉という「現実」に現に〈わたし〉が〈投企〉して(「働きかけ」て)、〈意識〉を〈無化〉や〈無〉にしたとて、〈意識〉は死を含意させないし、当の「現実」すら〈意識〉の〈無化〉や〈無〉に〈一致〉して〈存在〉しているわけではない。それにかかる新たな〈統合〉を〈観念〉するよりか、「現実」の人間にあっては、すでに不完全でありながらも、ヴェーユにいわれるごとく、〈心身合一〉として〈統合〉することに立つとみる方が妥当に思われるのである。

この〈無〉はまた〈自由〉とされる。〈対自は…自由であり〉、〈自由はまさに…無である〉こ とがそうなのであり、筆者に〈無〉すなわち〈自由〉と記させた理由になる。〈無〉は他の引用 語句を参照しては、〈徹底的否定〉であったがゆえに、〈自由〉は〈意識(対自)〉や〈対自とし ての身体〉の、〈わたし〉や外的〈世界〉の〈すべて〉を〈徹底的否定〉要は〈無〉にさせるこ とであった。さらに〈自由はこの無化よりほかの何ものでもあり得ない〉と語られていた。そこ で今記した文章中の名詞〈無化(Ia néantisation)〉に付された指示形容詞〈この(cette)〉は、 同引用文に散見する〈即自を無化する(néantiser I'en-soi)〉の〈即自〉をさすとみえども、し かしこうした表現にとどまらず、また他の引用語句では、〈自ら(自己)を無化する(se néantiser)〉と書かれた、この再帰代名詞〈se〉を上記のような〈自ら(自己)〉と訳したにあっ て、筆者は前段で取り上げ答えた通り、その訳にし得る、諸引用文中の〈se(自ら(自己))〉を 各文脈によっては何も〈即自〉とだけでなしに、ときに〈わたし〉と、あるいはときに外的〈世 界〉と受け直すことが許される。すなわちわけてもかの〈統合〉の場合において、〈意識(即自)〉 の〈無化〉は〈意識(対自)〉の〈無〉にとって欠かせなくなるし、これに倣わずにおれないと 指摘した〈わたし〉や外的〈世界〉はそれぞれの〈無化〉なしに、〈わたし〉や外的〈世界〉の 各〈無〉をかたちづくれないどころか、〈意識〉全体にかぎっていうと、その同じ―にみなされ なくなると。そういえるは〈意識(即自と対自)〉に各〈わたし〉が、〈わたし〉に外的〈世界〉 がおのおの「付け足しにされ」ていたと捉え得るからであった。しかして「対自である」〈身体〉 についていうと、かかる〈身体〉はそのように見立てられる以上、当然〈意識(対自)〉に関係 せざるを得ないだけか、この〈身体〉が自ら〈無化〉や〈無〉になる働きを持ち得ぬからして、 一に〈意識(対自)〉に「付け足しにさ」せられるほかないし、一にだから〈意識(即自)でない〉 といわれねばならないわけである。したがって、〈対自〉に「付け足しにされ」、かつ〈即自でな

い〉〈身体〉には〈身体〉自身の「動き」がみられなくなると、しかもこうした〈身体〉の「動き」は「現実」での「動き」をさすだけであると、さらに〈即自〉から〈対自〉へと〈変化(変身)〉する、「現実」での〈意識〉内の「動き」は〈身体〉の「動き」から除外されるからして、彼は〈身体〉をば「現実」の〈身体〉ではなく、〈意識〉内の「動き」(働き)で〈産出〉された、哲学(観念)上の〈身体〉として語る以外にないと結語され得るのだ。そこでは「現実」の〈身体〉が、「現実」の〈身体〉の〈無化〉や〈無〉(自由)が〈存在する〉はない。だから彼が〈自由〉をめざそうとも、〈身体〉には〈自由〉がない、要は〈身体〉を〈自由〉にすることができないし、この〈自由〉も「現実」のではなく、哲学(観念)上の〈自由〉にとどまるしかなかった。

筆者の以上の〈無化〉や〈無〉への見方に加えて、サルトルはこの段落における、複数の疑問 にどう答えてくれるのか。〈意識(即自)〉の〈理性(知性)〉の働きで、哲学(観念)上の〈無化〉 や〈無(自由)〉と〈投企〉を打ち出したり、〈意識〉を〈即自〉や〈対自〉と見立てたり、その 〈意識〉にさらに〈精神〉や〈わたし〉の各〈場〉を設定したりするはそれこそ彼の自由である。 だが〈身体〉の「動き」や〈身体〉の〈無(自由)〉を質すことがないとされるところで、どう して〈わたし〉が〈投企〉する「現実」を可能にさせるのか、つまり彼は〈わたし〉が外的〈世 界〉に〈投企〉し〈現前〉するだけで、〈即自〉の〈無化〉や〈対自〉の〈無(自由)〉が生じる という「現実」に対し、何ゆえそうなのかに答えてはいない。彼が〈身体〉の「動き」を伴なわ せた「現実」の〈投企〉を語るならまだしも、哲学(観念)上の〈投企〉要は〈意識〉全体の一 〈場〉〈わたし〉の「動き」すなわち〈投企〉だけによって、これも哲学(観念)上のにすぎない 〈無化〉や〈無〉になると主張したとて、その〈無化〉や〈無〉は〈わたし〉のみの「動き」(投 企)で、真に実現され得るか、この〈わたし(投企)〉はどのように試みられたために、〈即自〉 にかかわることを明らかにしているか、〈わたし(投企)〉はどこまでをその役割としているか (〈即自〉の〈無化〉までか、〈対自〉の〈無〉の現出までか)、いかにすればかかる〈無化〉から 〈無〉に繋がれる(関係する)か、〈無化〉と〈無〉という、換言すると〈即自〉と〈対自〉とい う、名称や役割の違いは〈意識〉自身の〈変化(変身)〉によるとしても、筆者にその〈実存〉 の契機とされる〈わたし(投企)〉はなおさらこうした〈変化(変身)〉に影響を与え得るか否か、 〈即自〉の〈無化〉とは、〈即自〉が〈認識する〉〈認識される〉働きをいかにさせることだとい わせるのか、この働きをたとえば判断中止 (epokē) にせよと命じさせることなのか、彼は〈身体〉 の「動き」を一考せずに除いたがゆえに、ヴェーユを例に触れおいたような、〈身体〉への負荷 (〈身体〉の「運動」量)を語ることがなくなるにしろ、しかしそれなしで、〈即自〉の〈無化〉 ばかりか、〈対自〉の〈無〉が成るといえるは何ゆえか、この〈無〉たる〈néant〉や〈rien〉には、 さらに〈徹底的否定〉や〈純粋否定性〉にはいかなる相違があるのかないのか、〈néant〉から 〈rien〉に展開されるのか否か、どうすれば〈対自〉は〈徹底的〉に〈純粋〉になり得るか、〈否 定(拒否)〉と〈徹底的否定〉や〈純粋否定性〉の違いは何か、〈néant〉での〈自由〉か、〈rien〉での〈自由〉なのか、およそ〈無〉である〈対自〉で〈自由〉はどのように現出するのか、〈対自〉〈わたし〉や外的〈世界〉の各〈無〉は〈即自〉にいかに〈認識される〉のか、〈人間存在は即自(存在)であることに対する欲望〉を叶えるにあるとされるに、〈対自〉の〈無〉からいつ、いかにして〈即自であること〉が、換言すると〈即自〉に戻ることが可能なのか(「戻る」と記したは〈対自〉が〈無〉に化したせいで、〈対自〉として〈存在〉しなくなるからして、〈即自〉になることを示唆させようが、そうみてかまわぬか)、その〈対自〉の〈無〉と〈わたし〉の〈無〉や外的〈世界〉の〈無〉は同じか異なるか、〈わたし〉は真に外的〈世界〉の一たる〈他者を対象(客観)化〉し、その〈他者に同化〉し得るのか(16)がみえてはこないのである。

しかし筆者のみるところ、サルトルには確実に語られていた思想があった。それは「認識論」 である。だが「認識論」とみなされるは何ゆえか。筆者がその理由に答えるは以下に述べる、筆 者の立つ立場からする主張を踏まえてのことになる。すなわち筆者がデカルトに〈能動と受動は 同一のことがらである〉といわせた見方に立っては、サルトルにいう、たとえば〈嘔吐〉〈欲望(願 望)〉〈投企〉〈無化〉や〈無〉などは「知る作用(認識の起こり)」における〈受動〉的能力であ ると知り得る。これらの〈受動〉的能力が〈産出〉されたはサルトルの場合、〈意識(即自)〉内 の能力〈理性(知性)〉の働きによるのであった。この〈理性(知性)〉はそれ自身が目的に定め た対象に「働きかける」能力であった。だから〈同一のことがらである〉とされた、一方の〈能 動〉をサルトルにみる際、この〈受動〉(的能力)としてもたらされる〈観念〉〈投企〉を例にし ていえば、かかる〈投企〉は同じ〈意識(即自)〉内の〈理性(知性)〉が〈思惟(認識)(観念) する〉〈能動(「働きかける」こと)〉のおかげで、すなわち〈投企する(pro-jeter)〉⁽¹⁷⁾という〈能 動〉的能力のおかげで生み出されるわけである。上記したなかのほかでは、〈欲望(願望) (désir)〉と〈欲望(願望) する (désirer)〉や〈無化 (néantisation)〉と〈無化する (néantiser)〉 が〈(受動と能動を)同一のことがら〉にさせよう。したがってその〈投企する〉や〈無化する〉 はこれもデカルトが〈思惟する(penser)〉を代表にいう〈意志する(vouloir)〉なる〈能動〉 的能力と同じくみてかまわぬのであり、サルトルにとっては彼独自の〈観念〉用語でしかなくな るにちがいない。加えて筆者が「知る作用(認識の起こり)」からする「認識論」すなわちその(観 念論〉を持ち出す以上、「認識(観念)論」は〈能動〉やこの〈受動〉の諸能力で組立てられね」 ばならぬと知るにしても、すでに触れた通り、〈諸感覚〉や諸「感情」も含め、〈意識(即自)〉 での〈理性(知性)〉の〈作る(認識する)〉(能動) や〈作られる (認識される)〉(受動) 働き によって〈産出〉された諸能力はしかし、かの〈投企〉をはじめ、すべて〈精神〉(の場)に伝 達されるだけであり、〈意識(即自)〉にはこうした諸能力を生み出す〈理性(知性)〉の能力以 外なかったといわざるを得なくなる。さらに筆者は、彼が〈意識(即自)〉の「知る作用(認識

の起こり) | を基点にして、これを〈意識〉全体に亘らせ質したのも「認識(観念)論」である とみることができる。〈意識〉全体を見渡し得る「認識(観念)論」になるとは、〈即自を無化す る〉とした例にあって、筆者にすれば、この〈即自を無化する〉際に、何より〈即自〉に「付け 足しにされた | (わたし) が登場させられ、かかる出番以前に (精神) に伝えられていた、かの (投 企〉に「働きかける」ことは、〈投企〉と〈同化〉するだけではなく、同時に〈即自〉にかかわ らせることを意味させ、この〈わたし(投企)〉が〈即自〉の〈無化〉を、その〈無化〉をして〈対 自〉を、この〈無〉すなわち〈自由〉を現出させることをさすと思えるからである。このように、 〈意識〉全体を形成しよう三〈場〉のうちの、中心的〈場〉〈意識(即自)〉が例の諸能力〈無化 する〉(作る)とその〈無化〉(作られる)の働きを他の〈場〉(精神〉や〈わたし〉の各働きよ り先行させたうえで、その各〈場〉と関係せずにいないことは、当の〈意識(即自)〉だけにと どまらず、〈意識〉全体のことをさして語られねばならぬからして、上記していた〈即自〉の〈無 化〉のことでいえば、何よりもまず例の哲学(観念)上の〈わたし(投企)〉を〈即自〉に仲介 させながら(しかし筆者はそこでは〈わたし(投企)〉のみの「動き」しかない、要は〈身体〉 の「動き」が伴なわれてはいないと読んだ)、〈即自〉を〈無化〉にし、次いで〈対自〉の〈無〉 を導き出す〈論の筋道〉に従わすことを含意させるところの「認識(観念)論」でもなければな らないのである(ただし筆者が〈意識(即自)〉で〈産出〉されるが、その〈場〉には〈理性〈知 性)〉の能力以外ないとみた際、その〈産出〉された諸能力を何とかすべく、〈精神〉や〈わたし〉 が用いられていたと指摘したはすでに語った通りである)。そして筆者には彼による、哲学(観 念)上の〈意識(即自)〉の〈理性(知性)〉の駆使で、かかる「認識(観念)論」を構築する方 が、要は〈投企〉〈無化〉〈無〉などと命名し、これらの〈観念〉をして〈論の筋道〉を組立てさ せる方が優先されなければならなかったと思われるのである。彼が〈観念論的立場を完全に放棄 する〉と語り、その代わりにか、〈存在論的関係〉や〈存在論〉における〈論の筋道〉を質すこ とをもって当てると主張するにもかかわらずにだ。

だから何ゆえ筆者の見方が可能になるかに答えなくてはなるまい。これもすでに触れおいたことであるが、そこから一言にしてみると、サルトルは上記した諸〈観念〉用語で構成された「認識論」(したがって「認識論」は「認識(観念)論」の表記通り、〈観念論〉となる〉に立って、〈存在論〉も論じ得るといえたからである。これを別角度からもう一度検討する。彼は〈無は、存在するのではない(ne pas être)〉〈存在される(être été)〉と断じた。彼の場合、外的〈世界〉から「現実」に「受容される」〈諸感覚〉によって、たとえばその何かが〈意識〉全体の一〈場〉〈精神〉(この〈場〉は〈意識(即自)〉ではない)に〈存在する〉か〈存在〉しないかは一目瞭然に明らかにされども、しかし〈精神〉に〈存在する〉か否かの判断を求めることは不可能であったし、この判断は筆者に不思議に思えることに、〈精神〉そのものと直接関係しないとみえる〈意

識(即自)〉に委ねられたのだから、それこそ〈精神〉は「現実」に「何か」がではなく、上記 した〈無〉が外的〈世界〉にあって、〈存在される〉という、その〈される〉ままで、こうした〈存 在〉を受け取ることができなくなるといわねばならないわけである。それゆえ、〈無〉が外的〈世 界〉に〈存在される〉のではないといわせるならば、こうした〈無〉に関する〈思惟(認識)(観 念)〉が〈精神〉で〈産出〉されない以上、奈辺に見出せるかは、もはやいわずもがなのこと、〈意 識(即自)〉であり、その〈意識の中心に現出する〉という〈無〉はだから、当初より〈意識(即 自)〉での〈思惟(認識)(観念)〉として生み出されるしかなかった(この場合では、外的〈世界〉 を〈無〉とみるも〈意識 (即自)〉に依拠せざるを得なくなる) と、 だからこれすなわち 「認識 (観 念)論」と指摘してかまわぬのであり、かかる「認識(観念)論」が先きになくば、〈無〉が〈存 在される〉と表現し得た、〈無〉の〈存在(論)〉すら彼に語れなくなろうというほかなくなるの だ。だがなぜ、〈無〉が外的〈世界〉にみられると記したにせよ、〈無〉が〈精神〉を通して〈意 識 (即自)〉に関係したといえるのか。それは疾うに―見したごとく、〈意識 (即自)〉 から 〈精神〉 に伝達されていた、〈投企〉なる〈観念〉に〈わたし〉が「働きかけ」て〈同化〉した〈わたし(投 企)〉をして〈意識(即自)〉への仲介を可能ならしめる繋がり(関係)にあったからである。こ うした関係なくしては、〈即自を無化する〉ことが、まして〈即自〉を〈対自〉に〈変化(変身)〉 させることが、かつ〈対自〉の〈無は存在される〉ことがなかろう。そのように、彼すなわち彼 の〈意識(即自)〉がいわせたのだ。筆者が一見していたように、〈無化〉や〈無〉はこれらを、〈意 識(即自)〉の〈理性(知性)〉の働きからする「知る作用(認識の起こり)」や〈論の筋道〉を 彼に語らせるうえでは、能力とみなされていなければならない。たとえば彼にあって、「現実」 に〈無は存在される〉か確認されるよりも、先きに〈無は存在される〉という〈観念〉が〈作ら れる〉ことなくば、この〈意識(即自)〉でのこのような〈観念〉として、その「現実」に適当 させる表記が不可能になる(だから〈意識(即自)〉はもともと「現実」たる外的〈世界〉に関 係しないと彼にみられたことから、〈無は存在される〉とした〈観念〉でもって「現実」に当て はめさすほかなくなる、要は〈観念〉が先きにこなければならぬわけである)し、しかして〈意 識(即自)〉に〈思惟(認識)(観念)する〉働きをみないことには(筆者にこの働きをみると、 換言するとこうした役割が〈意識(即自)〉に与えられていると捉えさせることは「認識(観念) 論」が彼になくてはならない証左になる)、〈無〉が「現実」に〈存在される〉ままでの〈存在〉 であるかの真偽はともかくも(彼が〈意識(即自)〉は「現実」たる外的〈世界〉に関係しない と主張する以上、筆者はこの見方に「偽」と答えるしかない)、かかる〈観念〉の表現はその信 憑性をそれこそ〈意識(即自)〉においてさえ疑わしくさせようだけか、〈意識〉〈即自〉〈対自〉 と〈わたし〉や外的〈世界〉がそれぞれ〈意識存在〉〈即自存在〉〈対自存在〉と〈わたし〉のや 外的〈世界〉の各〈存在〉に呼ばれることもなくなるにちがいない(彼は〈精神〉を〈精神存在〉

と呼ぶことは一度もない)。これらはすべて、筆者にすると、〈観念〉に〈存在〉が従う表現にすぎないと映るということになる。

しかし筆者のこの見方に反するように、サルトルが〈意識は認識されるかぎりでのではなく、 存在するかぎりでの認識する存在である〉と述べたことからは、〈意識〉が〈存在〉していなけ れば、〈意識〉すなわち〈即自〉は〈認識する〉〈能動〉も〈認識される〉〈受動〉の働きも不可 能である(この働きは〈能動〉からはじまるし、〈能動〉なくば、当然〈受動〉もない)にちが いない。だからたとえばこの〈意識(即自)〉にあって、これが〈存在する〉と彼にいわせる〈存 在論〉を優先させることに導き、その〈存在論〉なくして、〈認識する〉〈認識される〉働きがな いとみられもするわけである。それでも彼に〈認識する存在〉と記された〈認識する〉は〈能動〉 を示唆させる現在分詞の、また〈認識される〉は〈受動〉を示唆させる過去分詞の各訳語(この 〈能動〉〈受動〉は〈意識(即自)〉の働きを、要は「知る作用(認識の起こり)」を有する証左に なる)がいかにあるかである。これを〈認識する〉が修飾された〈認識する存在〉でみるに、こ の〈存在〉は上記引用文中の〈意識〉を〈認識する〉出所と見立てる〈存在〉に、要は〈意識存 在〉になるといえるにせよ、しかし筆者は〈意識存在〉に触れる前に、彼が当の〈認識する〉を 〈存在〉と捉えていたのかに対して、否と答えなくてはならない。にもかかわらず、誰もが〈意 識存在〉という〈意識〉に〈思惟(認識)(観念) する〉も疾うに盛り込まれていると、そもそ も〈認識する〉は〈存在〉でない(さすれば「認識(観念)論」になろう)と語っては、筆者の 否との答えを論外とみなすにちがいない。だがそうなのか。なるほどこの〈意識〉すなわち〈即 自〉だけが〈認識する〉(ばかりか〈認識される〉)働きを〈意識(即自)〉の特徴ある役割とし て持ち合わせると断じ得たとて、筆者はかかる働きが〈存在〉すると明言された記述に出会わず に、換言すると彼が〈意識(即自)〉の働きたる〈認識する〉を〈存在〉させずに、〈意識(即自)〉 の〈存在〉が何だと言及できるのかをたえず彼に聞かないでは済まされなかった。だから「訳語 〈認識する〉がいかにあるか」には上記からも窺える通り、〈認識する〉は〈存在〉とかかわりな く用いられる、つまりたんに〈存在〉を飾るに役立たれるしかないといわねばならなかった。し かも彼が〈観念論的立場を完全に放棄する〉と宣言していたのだから、「認識(観念)論」が問 題になることはなかったわけである。しかしながら、〈意識存在〉を含む〈意識〉全体を見渡し、 そこに〈存在する〉はこの〈意識(即自)存在〉だけでないことを想起するとき、果たして「認 識(観念)論」がないと断言できるか。〈意識(即自と対自)〉のほか、〈精神〉や〈わたし〉で 構成されていた〈意識〉全体に関係しよう「認識(観念)論」がみられると指摘した筆者に、彼 はどう応じてくれるか。おそらく彼はこれをも否定するにちがいない。何せ彼が〈精神〉やこの 〈存在〉のことはともかくも、〈わたし〉さらに外的〈世界〉やその各〈存在〉を〈意識(即自と 対自)存在〉の考究ほどに極めていないとみえたは〈わたし〉と外的〈世界〉をしてそれぞれ〈他 者〉やその各〈存在〉と呼ばせて片付けさせたにすぎないからである(〈意識(即自)〉の〈理性 (知性)〉がそれ自らに目的に定めた対象としての、外的〈世界〉なる〈他者〉は、また〈意識〉 全体の一〈場〉〈わたし〉なる〈他者〉はむろん各〈他者〉と〈思惟(認識)(観念)する〉こと で命名させられるからして、その〈存在(論)〉を問う前に、「認識(観念)論」の一に与される 必要がある)。そのうえ〈意識存在〉はときに〈存在意識〉とも表記され、その違いはすでに触 れたごとく、前者が〈意識〉を、後者が〈存在〉を前面に出すところにあるとみなしたが、この 前者からは〈存在〉よりか、〈意識(観念)〉が優先された語句と判じてかまわぬのではないか(こ の点でも「認識(観念)論」がないとはいえなくなる)。それに〈意識(即自)〉は自らに生じさ せた、例の〈無は存在される〉という〈観念(表象)〉を、まずは〈無〉と〈思惟(認識)(観念) する〉ことができたがゆえに、そこではじめて〈無〉が〈存在する〉か〈存在される〉か、これ もまた〈思惟(認識)(観念) する〉ことを〈意識(即自)〉に試みさせるようになるのではない か。要するに、彼が自らにいう〈意識(即自)〉にあって、〈思惟(認識)(観念) する〉ことや その〈存在〉を認めずに、この〈意識(即自)存在〉が〈存在する〉と語ることは不可能である。 加えて〈意識(即自)〉の〈理性(知性)〉が自らに目的に定めた対象を〈思惟(認識)(観念) する〉ことはそれが「現実」に「働きかけ」られてあることをさすのだから、そのとき同時に、 その何らかの〈観念〉が〈意識(即自)〉内に〈存在〉すると断言され得るのかである。対象が かかる〈理性(知性)〉で定めた対象であるかぎり、その働きによりもたらされる〈観念〉は、〈観 念〉が〈事物〉に関することであれ、〈意識(即自)〉に、当の〈事物〉をまさに〈存在〉〈事物〉 として〈存在〉させるのではなく、たんに映し出されたにすぎない〈表象〉なのであり、この〈表 象〉でもって〈存在〉させられるわけでもない。しかしここで留意すべきは、彼がこの〈事物〉 に関した〈観念〉をはじめとした、あらゆる〈観念〉を〈意識(即自)〉に〈表象〉させるとみ なしたは当然のことにしても、あらゆる〈観念(表象)〉をして〈意識(即自)〉に〈存在〉させ ずにおれなくなると捉えるばかりか、この〈意識(即自)〉にだけでなしに、「現実」においてさ え、その〈観念(表象)〉通りに〈存在〉させるとみたことにある。要は彼が何らかの〈観念〈表 象)〉を〈意識(即自)〉に現に〈存在〉させたり、あまつさえ「現実」に〈存在〉させたりする と語ることは、そのいずれの〈存在〉も〈意識(即自)〉に浮かび上がる〈観念(表象)〉のみで 成るとされるしかなかった。上記した「現実」はまさに外的〈世界〉をさしていう、その「現実」 以外でないとき、〈意識(即自)〉は外的〈世界〉に関係しないといえたからして、〈意識(即自)〉 の何らかの〈観念(表象)〉によって、その「現実」に〈存在する〉とされた〈存在〉を言及で きないにもかかわらず、彼はこうした〈存在〉を述べ語る〈存在論〉を主にすることができるの であろうか。何らかの〈観念(表象)〉を〈存在〉にも見立て主張される〈存在論〉はなるほど〈思 惟(認識)(観念) する〉だけで可能になるやも知れぬ(しかしこれは〈意識(即自)〉が外的〈世 界〉の〈存在〉を〈観念 (表象)〉にするのではない)が、それでも〈意識 (即自)〉には本来生の「現実」の〈存在〉を語る資格も、権限もないことによっている。誰かがこれを否定しても、この〈存在 (論)〉は架空のであり、本物の〈存在 (論)〉ではない。だから筆者は彼が〈存在論〉を強調していたにしろ、その〈存在論〉も〈観念 (論)〉の所産にすぎず、「現実」にかかわって成り立つのでないといわざるを得なくなる。

したがってサルトルにいう〈存在論〉が哲学(観念)上のそれとして、別段〈認識(観念)論〉 から除かれなくてよいとなれば、筆者がすでに何度か触れおいたように、〈認識(観念)論〉を 優先させた「認識論すなわち存在論」になるとみることができるであろうし、「認識(観念)論 そのものが存在論である」と記させたことも許されるであろう。だから筆者はこのことに対し、 「特殊な」〈認識(観念)論〉や〈存在論〉と名付け得たわけである。要は彼にあって、〈存在論〉 を打ち立てるだけではなかったのだ。彼がたとえば〈意識存在〉〈即自存在〉や〈対自存在〉の〈意 識〉〈即自〉や〈対自〉のことを〈思惟(認識)(観念)〉したうえで、「現実」にも〈存在〉させ ようとて、それぞれはかの〈可能的な意識〉からしか生み出されなかったのだから、〈可能的な 意識〉は〈可能的な〉を「現実」の意味で受け取ったところで、〈意識〉をさしていう「現実」 であり、外的〈世界〉という「現実」を語ることではない。それゆえ「現実」の各〈存在〉は〈意 識(即自と対自)〉としての〈存在(論)〉を示唆させるのであり、外的〈世界〉の〈事物〉とし ての〈存在(論)〉にはならないのだ、また筆者は彼に〈わたしは…投企である〉といわせたこ とから、〈わたし〉すなわち〈投企〉とみたは、すでにこれ自体〈観念〉的でしかない。それで もこうした〈認識(観念)(論)〉が先きにないかぎり、〈わたし〉の〈存在〉とされる〈存在論〉 さえ語ることができなくなる。〈投企する〉や〈投企〉で組立てられる〈認識(観念)論〉だか らして、筆者は「特殊な」それと名付け得たのであり、「現実」とかかわらせることのない〈存 在論〉だからして、「特殊な」と呼び得るのである。以上のほか、筆者に「特殊な」といわせるは、 〈理性(知性)〉の行使だけに依拠せざるを得ない〈認識(観念)論〉であることに、その〈思惟 (認識)(観念)する〉を〈わたし〉にではなく、〈意識(即自)〉の働きに充当させたことにある。 だから〈わたし〉あるいは外的〈世界〉の各〈存在〉のことは〈意識(即自と対自)〉の各〈存在〉 を質すことに比べ、さほど論究されてはいないと受け取り得たが、それでも「特殊な」〈認識(観 念)論すなわち存在論〉とみなされることで、〈わたし〉や外的〈世界〉とその各〈存在〉のこ とが問われねばならなかったし、「特殊な」〈認識(観念)論すなわち存在論〉といえるからこそ、 まさにこれが〈この対自とこの世界〉における〈意識(〈即自〉を〈変化(変身)〉させた〈対自〉)〉 〈わたし〉や外的〈世界〉をだけか、それぞれの〈存在〉を〈統合〉せしめ得ることになったわ けである。

さすれば筆者がサルトル哲学を〈観念論〉哲学になると強調したとて、何ゆえなのかを今一度

証しおく必要があろう。まずこれに向けて確認するは、〈観念論〉とは〈認識論〉に与する一であり、〈認識論〉には他に〈実在論(唯物論)〉も含まれていたことである。次に彼の哲学がこの〈観念論〉哲学でしかないと捉えられるは一に、彼にいう〈意識(即自)〉が外的〈世界〉に関係しないと、一に、彼にいう、その〈意識(即自)〉の能力〈理性(知性)〉の使われ方であると、一に、彼にいう〈身体〉は彼に所有される、生身の〈身体〉をさすのではないとみたことにある。この三点については、筆者がこれまで多少なりとも触れてきたことであるし、これを繰返すのでなければ、ここはなかでも、〈理性(知性)〉と〈身体〉に関した付記を補充することが課せられるであろう。そして彼にいう〈対自と即自との関係〉を、ときに取り上げてきたヴェーユに、要は彼女にいう〈思惟と行動との関係〉に比較させて、彼の哲学にはいかなる特徴があるとみられるか、あわせて筆者にいう〈認識(観念)論すなわち存在論〉が彼の哲学の特徴の一をかたちづくると肯定され得るか否かを検討しつつ、筆者は結局のところ、彼の哲学は何だと見て取れるかにも言及しておかねばならない。

〈理性 (知性)〉について付記すべきは以下の通りである。〈意識 (即自)〉に〈諸感覚〉や諸「感 情」(嘔吐や不安) を含めた、あらゆる〈観念(能力)〉を〈産出〉させるのが、〈理性(知性)〉(の 働き)であった。だが〈意識(即自)〉はこのあらゆる〈観念(能力)〉を〈精神〉にあたかも追 い出しては、〈意識(即自)〉自身に〈理性(知性)〉以外の能力を、その〈能動〉的〈受動〉的 働き以外を残存さすことがなかった。つまり〈理性(知性)〉は〈意識(即自)〉をいわば一人占 め(独占)した能力であった。そうなると、〈意識(即自)〉自身は外的〈世界〉に関係しないと みられていたにもかかわらず、〈理性(知性)〉が「自らに目的に定めた対象を〈思惟(認識)(観 念)する〉」ことでは、この「対象」を外的〈世界〉(現実のこと)に求める場合も想定できるの だから、〈理性(知性)〉の方から外的〈世界〉(現実)の「対象」はかくかくしかじかである、 要はこの通りだといえないことはなかろう(〈理性(知性)〉の働きがこのように可能になってい ても、そのことが外的〈世界〉(現実)に直接関係させているとみてはならない。なぜならこれ は〈観念〉でしかないし、〈観念〉にあっては、外的〈世界〉(現実)がこの〈観念〉通りにある か違うかをもたらすは別のことになるといわねばならぬからである)。さすれば上記(の経緯) をすでに筆者に語らせた〈人間の世界への関係〉に当てはめ、この「人間」を〈理性(知性)〉(に 依存する「人間」)に置換されることが許されるならば、かかる表記も当たらずといえども遠か らずになろう(同様に表記した〈世界の人間への関係〉の方は彼にあって、外的〈世界〉からの 〈諸感覚〉が〈意識(即自)〉やその〈理性(知性)〉にではなく、〈精神〉に「受容され」たし、 そのことではサルトルの哲学として主に論じられるのでないにしろ、〈精神(人間)〉は「世界」 と「関係」していたといえる)。だから〈人間の世界への関係〉を〈理性(知性)〉の行使だけに 頼るサルトルと、 たとえば同じく〈理性(知性)〉や〈理性(悟性)〉を用いて、 それぞれ外的〈世

界〉(現実)と関係させるように見受けられるデカルトやカントとを比べては、サルトルの〈理 性(知性)〉の使い方が上記したごとくに証明されると指摘できるわけである。要するに、デカ ルトにいう〈真理の探求〉の〈認識(観念)論〉的用法のことはともかく、筆者にみる、デカル トの「日常的用法」では〈感覚〉や〈想像〉の各能力なくして、〈理性(知性)〉の活用が組立て られなくなっているし、カントでは〈感覚〉を中身とするそうな〈感性〉を素材にしたうえで、〈理 性(悟性)〉が発揮される(〈感覚〉や〈感性〉を〈理性(知性)(悟性)〉に導入しては、各〈認 識(観念)論〉的用法はこれを〈観念論〉といわせぬやも知れぬ)のに対し、サルトルは再度い うが、〈諸感覚〉や諸「感情」(嘔吐や不安) さえ取り入れることのない、〈理性(知性)〉 だけを 役立たせた、自らの哲学(〈認識(観念)論〉)を構築していたと捉えられる(ちなみに、ヴェー ユは〈身体〉や〈魂〉(または〈身体〉と〈魂〉間)に各生じよう〈感受性〉(これは〈感覚〉で はなかった)を土台にした(〈感受性〉が生じるところ、〈身体〉にはたえず「現実」の「動き」 が伴なわれていた)、この体験に〈理性(知性)〉をばその〈手段として〉用いることを主張した。 また彼女にいう〈魂〉を〈脳〉とみておけば、例のデカルトでは、〈真理の探求〉や「日常的用法」 別に、その〈脳〉をおのおの〈精神(esprit)〉や〈魂(âme)〉と、ヴェーユでは一つの〈脳〉 を二つに、すなわち〈感受性〉を受け入れる〈魂(âme)〉から〈理性(知性)〉のみられる〈精 神 (esprit)〉へと繋がるように分けられていたと、サルトルでは一つの〈脳〉要は〈意識〉全 体を三つに、すなわち〈意識(conscience)〉、〈精神(esprit)〉や〈わたし(moi)〉の各〈場〉 に分かれていたと付記し得る。ただしサルトルにおいて、〈意識〉たる〈即自〉や〈対自〉が、 あるいは〈精神〉が、さらには〈わたし〉が各話題になったとき、話題以外の〈場〉はどうみな されるのか、話題の〈場〉とともに、〈意識〉全体の他として語られるか、それともそこから外 されるのか定かでない)。だからサルトルは〈理性(知性)〉だけからみる外的〈世界〉(現実) を述べるにとどまるしかなくなり、ヴェーユのように〈生の現実〉に自ら接して、これに自らの 〈理性(知性)〉を駆使させ忠実に伝える哲学(筆者にいう〈運動論〉)にはなり得なかった。た とえば〈何ものか〉が〈理性(知性)〉による〈観念〉で〈存在する〉や〈存在される〉とみら れても、その〈何ものか〉は果たして外的〈世界〉(現実)に〈観念〉のまま〈存在する〉か〈存 在される〉か分からないし、彼はそれが〈存在する(される)〉を明らかにさせないだけか、〈理 性(知性)〉にさえいわれることではもはやないと繰返させておかざるを得なくなる。

それでは〈身体〉についてはどうか。〈身体〉はしばしば〈わたしの身体〉として表記されていた。だからまず問うておくべきは、〈わたしの〉とはサルトル本人をさす(これは「現実」の〈わたし〉ともなる)か、〈意識〉全体のうちの一〈場〉〈わたし〉(これは哲学(観念)上の〈わたし〉となる)のいずれにみられるかである。その際確かなことは、〈わたしの身体〉の〈わたし〉が〈投企である〉と彼にいわせたことによって、疾うに一見した通り、〈わたし(投企)〉が外的〈世界〉

(現実) に〈能動〉的に「働きかける」ことをして、同時に〈意識(即自)〉への仲介を可能なら しめ、もってその〈意識(即自)〉を〈無化〉し、〈意識(対自)〉を、かつこの〈無〉を現出さ せる経緯にあって、〈身体〉の方は、一方でこうした〈対自〉の〈無〉に出会えども、この〈無〉 を〈対自〉の死(あるいは〈意識(脳)〉の死)とみないかぎり、他方で〈わたし〉と〈身体〉 の関係にとって、「現実」のや哲学(観念)上の〈わたし〉であれ、どの〈わたし〉も〈死〉(あ るいは〈意識(脳)〉全体の死)に至らぬかぎり、生身の〈身体〉を持ち続けているといえるこ とである。このように、生身の〈身体〉が〈意識〉全体のなかの〈意識〉や〈わたし〉(の各〈場〉) にかかわるとみられることはしかし、筆者にいう〈観念論〉にふさわしいことではない。内臓も 含まれる、〈身体〉感覚諸器官をたえず「行動(運動)」させる、生身の〈身体〉が、上記した〈意 識〉や〈わたし〉にだけでなく、外的〈世界〉(現実)に関係しようものならば、それは筆者に いう〈観念論〉でなくなることを示唆させるにちがいなかろう。〈観念論〉であるという証しの 一に、筆者は、彼が外的〈世界〉(現実)に起因し、〈身体〉感覚諸器官に「受容され」て生じる (反射する) (諸感覚) の〈場〉を〈意識(即自)〉や〈わたし〉にでなしに、〈精神〉にみていた ことを取り上げ得る。この〈精神〉は外的〈世界〉(現実)との関係において、〈受動〉の〈場〉 としての、また〈わたし〉は〈投企〉との関係において、〈投企〉と〈同化〉し得る、〈能動〉の 〈場〉としての、各役割を担わされていた。したがって〈精神〉や〈わたし〉はいずれも〈身体〉 とは関係しなかった(さすれば〈わたしの身体〉と表現された〈わたし(の)〉が何かは後述に 譲られよう)。それでは〈意識〉全体を構成する、残る一〈場〉〈意識(即自)〉の役割は何か。 これも何度か触れたように、かかる役割はあらゆる〈観念(能力)〉を〈思惟(認識)(観念)す る〉〈能動〉とその〈思惟(認識)(観念)〉なる〈受動〉でもって、例の〈投企する〉とその〈投 企〉を生み出す働きと、当の〈意識(即自)〉に〈変化(変身)〉を試みる(〈意識(即自)〉を〈意 識(対自)〉にする)働きとにあった。そのとき彼は、〈身体〉が〈即自でない〉〈対自である〉 と強調する以上、〈身体〉は筆者にすると、〈意識〉に関係し、少なからずこの〈対自〉に与させ て捉えられずにおれなくする。〈身体〉を〈意識(対自)〉に与さすとは何か。これが〈心身合一〉 を意味させようことであれば、〈観念論〉であり得ぬであろう。〈観念論〉である以上、〈身体〉 も〈観念〉でなければならなくなる。しかも〈意識(対自)〉への〈変化(変身)〉は〈わたし(投 企)〉によるにしろ、この〈わたし(投企)〉には、筆者のみるところ、〈身体〉がかかわることが、 ましてや〈身体〉の「動き」のことが彼に語られてはいないのだ(〈身体〉の「動き」が加味さ れるならば、これも〈観念論〉といえなくなろう)。だから〈身体〉は「現実」には〈身体〉の「動 き」が見当たらぬがゆえに、〈意識(即自)〉で〈産出〉された〈観念〉として「動」かねばなら ぬことを彼にいわせるだけとなったわけである。換言すると生身の〈身体〉は〈意識(即自)〉 と同じくみられては、〈意識(即自)〉と同様、外的〈世界〉に関係することがないからして、彼 にいわせる〈身体〉になり得なかったが、しかしこの哲学(観念)上の〈意識(対自)〉と同じにみえる〈身体〉は、例の〈統合〉において、これも哲学(観念)上の〈わたし(投企)〉により、外的〈世界〉に関係するということである。それに彼にいう、この〈身体〉は〈意識(対自)〉に「付け足しにされた」〈わたし〉に、なおも「付け足しにされた」〈身体〉でしかなかったとされると同時に、その〈わたし〉もまた〈身体〉と同様に、〈観念〉にすぎないといわねばならなくなる。かつ〈意識(即自)〉からみて、〈わたし〉が〈他者〉であるならば、かかる〈わたしの身体〉という〈身体〉も、〈対他-身体〉に倣わずとも、〈他者〉であるにちがいなくなろう。

したがってサルトルは「現実」の〈身体〉の「動き」のことを〈対自と即自との関係〉として 表現したのではむろんなく、たんに〈意識〉だけを〈対自〉や〈即自〉なる各〈観念〉に見立て た、その〈関係〉を質す。〈即自〉の〈無化〉と〈対自〉の〈無〉の関係は〈対自と即自との関係〉 の一例である。これを踏まえて、〈わたし〉の〈無〉が、次に外的〈世界〉の〈無〉がこうした 順序にて各〈存在される〉し、これを証しとして、哲学(観念)上の〈わたし〉が、同じく外的 〈世界〉が各〈存在する〉といえてくる。そうすると、このことをヴェーユにいう〈思惟と行動 との関係〉に適当させてみれば、彼は何よりもまず、すべての対象を〈必然性の観念〉に従わせ た〈観念(思惟)〉に先行され、そのうえで〈行動〉するとした〈関係〉になければならぬこと を主張してくるのではないかと読み取らせ得る。そしてこの〈行動〉は〈身体〉の「動き」を例 の〈わたし(投企)〉に課していなかったのだから、〈わたし(投企)〉は当然のこと、〈意識(即 自)〉内だけの「行動(運動)」であり、その「行動(運動)」は繰返すが、〈身体〉が「現実」に 「動」いているのではなく、〈行動〉たる〈観念〉として「動」かせたい〈欲望(願望)〉そのも のでしかないことを含意させる。こうした〈行動〉のことどころか、人は実際に〈投企(行動) する〉ことを要する(「現実」の〈投企(行動)〉なくば、実存主義哲学ともいわれなくなろう) とみることからして、彼の哲学を行動の哲学と呼ぶそうだが、しかし筆者が上記した理由をもっ てすれば、これを否定せざるを得なくろうはいうまでもない。しかも彼は〈わたし〉 すなわち〈投 企〉とみながら、その〈投企(行動)〉が〈わたし〉を(たとえば彼の哲学の)主役に、前面に 立てるのではなく(〈わたし〉にはいわばその権利がない)、〈意識(即自)〉にこの〈効力〉を与 えんとさせるのみであった。要は〈意識(即自)〉が〈投企〉たる〈観念(思惟)〉を試み、その 〈投企〉を〈行動〉に移させたいと〈観念〉していたにすぎないと。この〈観念〉によろう〈行動〉 はヴェーユが〈思惟と行動との関係〉と述べた〈行動〉とはおよそ異なっている。どこが相違す るか。彼女にみる〈行動〉がいかにあったかはすでに触れおいた通りで、ここでは繰返さないが、 それでも彼女が語ったかかる〈関係〉で指摘すると、その〈関係〉はもとより、「現実」に〈身体〉 を「動」かす〈行動〉を〈思惟(観念)〉より優先させていたことにある。これは彼女にとって、 彼にみる「知る作用(認識の起こり)」とはおよそ真逆の〈認識論〉であった。ただし彼女の場合、 その〈認識論〉は彼に代表される〈認識(観念)論〉でなしに、筆者があえて名付け得る、「知 る作用(認識の起こり)」という「運動論」であると付記せざるを得なくなる。

そこで筆者がこの〈認識(観念)論〉で成るとみた、サルトル哲学を、さらに「認識(観念) 論すなわち存在論」と表記したことについて触れおくと、こうした〈認識(観念)論〉と〈存在 論〉の関係にあって、筆者は当然、前者をして後者を語らしめると、換言すると〈認識 (観念) 論〉 を〈存在論〉に先行させて論じるなかに、当の〈存在論〉を含ませると捉えるのであり、彼に強 調されるように、〈存在論〉が主に〈考察〉されているのではないと指摘できることである。以 上のおよそのことはすでに一見しておいたが、それでも何ゆえ「認識(観念)論すなわち存在論」 なのかにここでも筆者なりに答えてみる必要がある。彼をはじめとする人間が持ち合わす諸能力 のうちの、たとえば〈理性(知性)〉による、〈思惟(認識)(観念)する〉能力が外的〈世界〉 や内的〈世界〉のあらゆるものごと(対象)に対し「働きかける」ことができるし、両〈世界〉 のすべてはある意味、その〈思惟(認識)(観念)〉で成り立ち得ると理解しているにしても、か つデカルトが《cogito ergo sum(〈わたしは思惟する〉ゆえに〈存在する〉)》といい、〈わたし〉 が〈思惟する〉ことからの因果でもって〈存在する〉とされた際に、〈思惟〉と〈存在〉という、 いわば地平(範囲)を異ならせ語らせるならまだしも(要は哲学では周知のように、〈認識論〉〈存 在論〉や〈実践論〉が各部門として哲学全体を構成するそうだ)、筆者がサルトルにいう〈存在論〉 をあたかも〈認識(観念)論〉に等しく表現したは再度いうが、何ゆえかである。筆者が先記し た「内的〈世界〉」とはサルトルの場合、もとより〈意識〉(の〈世界〉)をさすほかなくなる。 この〈意識〉はまずもって〈即自〉と、〈意識〉や〈即自〉はときに〈意識存在(存在意識)〉や 〈即自存在〉といわれていた。するとここから、誰もが思うに、両〈存在〉は〈意識〉や〈即自〉 (という各〈観念〉) なしに、〈意識〉や〈即自〉に付加されないだけか、かのデカルトにいう 【cogito (わたしは思惟する)】に倣い、⟨意識(即自) は思惟する、それゆえ意識(即自)は存 在する〉と換言することが許されるならば、〈意識(即自)〉がでなく、それ以外の何が〈思惟す る〉や〈存在する〉に充当させられるか。〈意識(即自)〉しかない。サルトルでは〈わたし〉が 〈思惟する〉ことはなかった。だから〈意識(即自)〉は〈存在する〉とみられる以上、その〈存 在(論)〉は〈認識(観念)(論)〉とともに語られなければならぬわけである。〈意識(即自)〉 に発する〈認識(観念)(論)〉にかかわらずに、どうして〈意識〉や〈即自〉の各〈存在(論)〉 が立てられるといえるのであろうか。否である。だが筆者が〈認識(観念)論〉と〈存在論〉を 「すなわち」で結んだことは、デカルトにいう《cogito》と相違はしないか。つまりデカルトが 〈わ たしは思惟する〉という〈認識論〉(これは筆者がみるに、〈真理の探求〉にだけでなく、「日常 的用法」にも通用する)(の部門)からはじまり、〈存在論〉(の部門)にまたがるは(〈実践論〉 は【情念論】や【道徳書簡】に基づくことにある)、哲学全体をそれとして体系づけることを意

図していたとみるに対し、サルトルが〈観念論的立場を完全に放棄する〉と断じては、〈認識〈観 念)論〉(の部門)をほったらかすことでしかなくなるのだから、彼自らの哲学は上記した「哲 学全体」(三部門) に目配りし構築された哲学ではなくなるということである。これは彼が当時 の哲学をしていまだに「哲学全体」(三部門)への論究を極めさせる伝統に反発した姿勢をみせ たことになるか知るよしもないが、されど彼にいわすは少なくも、〈対自と即自との関係を、根 本的な、存在論的関係として考察する〉〈存在論〉にあったのだ。しかし〈存在論〉が彼に質さ れると認めるにしても、筆者は〈存在論〉が〈認識(観念)論〉なしに成ることがないとここで も繰返し答えるだけである。上記引用語句中の〈対自と即自〉は何であったか。それぞれは〈意 識〉をあらわすに用いられた〈観念〉(用語) であった。かつこの〈意識〉さえ〈意識という観念〉 にほかならなかった。だから〈意識〉〈対自〉や〈即自〉のおのおのに〈存在〉と付記される場 合でも、各〈存在〉は〈観念〉で〈作られ〉ていなければならなくなる。しかも〈意識存在〈存 在意識)〉〈即自存在〉や〈対自存在〉は〈必然性の観念〉(または〈論の筋道〉)のもとに、〈意識〉 に順次従わされてもたらされた各〈観念〉にすぎなくなる。たとえば〈対自〉の〈存在〉をどう するかにおいて、(意識(即自))が〈対自〉を〈思惟(認識)(観念)する〉ことによる〈存在 する〉を、その〈思惟(認識)(観念)〉による〈存在〉を導出し得る(〈存在〉はそれ以外では ない)のであれば、〈存在(する)〉とはまずもってこの〈作る〉〈能動〉〈作られる〉〈受動〉に かかわらずにおれないからして、〈存在(する)〉と語ることができようだけになる。そのうえ〈存 在(する)〉は〈意識(即自)〉内に〈表象〉されるだけだから、この〈表象〉をもって〈存在(す る)〉とみてはならない(〈表象〉は〈存在(する)〉にならない)。

この〈観念 (表象)〉はまた「現実」の〈存在〉そのものにもならないばかりか、「現実」の〈存在〉を さすのでない〈存在論〉はそれでも「現実」の〈存在〉に触れたくば、〈認識(観念)論〉として、「現実」の〈存在〉がこうだと、こうあるべきだと語らせるほかなくなろう。さらにサルトルに いう〈存在論〉はなるほど〈意識〉にかかわる〈存在論〉であるとみたとて、すでに述べたよう に、もっぱら〈即自〉と〈対自〉の各〈存在〉が論じられたにすぎないだけで、〈わたし〉の〈存在〉はその〈即自〉や〈対自〉に各「付け足し」程度にしか問われなかったし、ましてや〈精神〉の〈存在〉についてはまったく言及されてはいなかったのである(外的〈世界〉の〈存在〉も〈わたし〉の〈存在〉に「付け足しにされた」ほどにしか触れられなかった)。要するに、〈観念〉は〈表象〉である、何らかの対象を、〈意識(即自)〉内にも〈存在〉させ得ないが、またまったき「現実」にも「現実」の〈存在〉として〈存在〉させることができないが、しかしその〈観念〉が哲学(観念)上の〈観念〉以外ではないのだから、〈存在(する)〉を〈観念〉しては、当然〈存在(する)〉といわせるだけは可能になる(〈意識(即自)〉はその〈観念〉で〈存在(する)〉と語

らせるに終始する一方、こうした哲学(観念)上の〈観念〉では、「現実」の〈存在〉が〈存在 する〉しないは、当の〈意識(即自)〉さえ知るべしもないとみる)。したがって筆者が「認識(観 念)論すなわち存在論」と表記したなかでの〈存在論〉は〈認識(観念)論〉として論じられな ければならなくなる。どうなると〈意識〉が、〈即自〉が、〈対自〉が各〈存在〉するかは、これ までに指摘してきた通り、かかる各〈存在〉を述べ語る論〈存在論〉がこれに先行し、彼に分析 された「知る作用(認識の起こり)」に組み入れられるところでの、筆者にいう、この「特殊な」 〈認識(観念)論〉によって問われる以外にないことに見出され得る。これこそサルトル哲学の 特徴の一になるとみえるし、「特殊な」〈認識(観念)論〉なしに、彼にいう〈存在論〉が成るこ とはない、要は彼自らの哲学が〈認識(観念)論〉に一切かかわらぬ〈存在論〉であるとみては ならない。筆者が彼の哲学を「特殊な」〈認識(観念)論〉と捉えたがゆえに、このことは〈意識〉 が〈わたし〉をあらわすのではなかった(これも伝統的哲学には窺え得ないことである)と同様 に、〈意識〉に代表されよう哲学が「哲学全体」(三部門) の各部門側から質されるのではなく、〈意 識〉自身に、その〈即自〉と〈対自〉やこの各〈存在〉という、それぞれの哲学(観念)上の〈観 念〉を織り込むことで、〈認識(観念)論〉や〈存在論〉を打ち立てたことを示唆させる(〈無〉 すなわち〈自由〉は〈実践論〉に与しよう)。つまり彼の哲学には〈存在(論)〉を〈思惟(認識) (観念)する〉〈観念〉がみられるだけとなる。そしてこれが筆者に「観念論哲学」と名付けさせ たゆえんである。

そしてまたその「観念論哲学」とはいかなる哲学であったのかである。この際、筆者が見続けてきた、〈観念論〉や〈実在論〉を有していう〈認識論〉を例にすると、かのヴェーユが指摘するに、マルクスの哲学(思想)は周知の〈唯物(実在)論〉だけではなく、〈観念(理想)論〉を持ち込んで組立てられていたと。しかしてマルクスはあくまで〈唯物(実在)論〉に立っていようとするならば、これと〈相反する思想〉たる〈観念(理想)論〉を取り除く努力が必要であろうが、そうはしなかったと。除去なくば、マルクス哲学(思想)をはじめとした、〈いかなる思想も矛盾を免れることができない〉と。ヴェーユがマルクス哲学(思想)をこのように断じたことに対し、これが今問うサルトル哲学にあってどういわせ得るかをみておかねばなるまい。むろんヴェーユの、かかる言を借りて、ここにサルトル哲学を持ち出すは筆者であり、ヴェーユではないと、またヴェーユはボーヴォワール女史と面識が有るが、サルトルとの出会いがあったか、あるいは筆者が唯一参照した作品「存在と無」を読んでいたかは定かでないと断りおく。とまれ筆者が推察するに、マルクス哲学(思想)とは反対に、サルトル哲学(認識論)の基盤は〈観念(理想)論〉にあるとみたからして、これと〈相反する思想〉はもとより〈実在論〉になると。サルトルにとって、あの外的〈世界〉(現実)が、さらに〈身体〉(しかも〈運動〉しない〈身体〉)が〈実在論〉に充当せし対象になるとみられる。しかし彼はこれらの思想を〈観念論〉と〈相反

する思想〉として自らの哲学に取り入れていたか。否であった。そこがマルクス哲学(思想)と 相違する点であった。すなわちサルトルはこれら〈実在論〉に与すべき各対象を自らの哲学〈観 念論)から排除したのだ。だからこの「観念論哲学」は筆者に、彼が思想的〈矛盾〉を回避させ よう「努力」を怠らなかったことを示唆させども、ときに筆者に「不思議なこと」と記させたこ ともまた確かなのである。ここでその――を繰返しはしないが、しかし当の「観念論哲学」自身 さえ〈矛盾を免れ〉得ないといえるわけである。それでも〈相反する思想〉の一例として、外的 〈世界〉(現実)を取り上げ、筆者は筆者にみる、彼の「観念論哲学」がこの外的〈世界〉(現実) (以下「現実」と記す)をいかに「排除」したかを証しおかねばなるまい。これはだから、〈観念 (理想)〉と「現実」にいい換えられるのを許されては、その関係がどうなのかをみることと同意 になる。およそ〈観念(理想)〉が導出される際(彼の場合、「現実」に起因し、〈精神〉にはむ ろんのこと、〈意識(即自)〉にもたらされて生じる〈観念(理想)〉はなかった)、それは疾うに 一見した通り、〈意識(即自)〉がそこでその〈理性(知性)〉をして「自らに目的に定めた」「現 実」という対象を〈観念〉せしめるほかなかった。だがこの「現実」の〈観念(理想)〉とまっ たき〈生の現実〉が等しいかは彼をはじめとした誰の〈意識(即自)〉(もしくは〈わたし〉)に さえ分からぬことであった。〈観念 (理想)〉と 〈生の現実〉 の関係はそうした関係以外ではなかっ た。だから彼にあっては〈意識(即自)〉に「現実」の理想的〈観念〉を見出すにとどまるかぎ りですら、この理想的〈観念〉をできるだけ〈生の現実〉に近づけさすようにするしかなかった のだ。したがって一に、「観念論哲学」は〈生の現実〉が〈観念(理想)〉通りになって〈存在す る〉ことを〈欲望(願望)〉するにほかならない哲学であるとみることができる。

「〈欲望(願望)〉する」哲学と記したことから、「観念論哲学」のさらなる特徴がみえてくる。 筆者はこれを上記した〈存在する〉や〈わたし〉を持ち出して取り上げる。サルトルが彼自身も 依って立たざる得ない〈意識(即自)〉のもとで、この〈即自〉を〈対自〉に〈変化(変身)〉せ しめることによって、〈対自〉が〈存在する〉ことを述べ語る、この〈存在論〉を主張したとて、 かかる〈存在論〉は彼自らの〈意識(即自)〉からする〈観念〉であって、〈対自〉が〈生の現実〉でその〈観念〉のままに〈存在する〉かは、後記する〈わたし(投企)〉なしに、当の〈対自存在〉にすら確かめられないのだから、要は〈意識(即自)〉は〈生の現実〉(外的〈世界〉)に関係し ないのだから、〈意識(即自)〉は〈生の現実〉にかかわることよりか、この〈即自存在〉に、あ るいは〈対自存在〉に各「こうだ」「こうあるべきだ」という指針を与え示すほかなくなるわけ である。これこそ、〈存在論〉さえ〈観念論〉としてしか導き出されない「観念論哲学」になる のだ。しかし再度いうが、彼の哲学にあって〈意識(即自)〉が〈対自(存在)〉を、さらにはそ の〈無〉をめざせと〈欲望(願望)〉し、これを「指針」にしたところで、〈生の現実〉はこの〈観 念(理想)〉に何も返答してくれないだけか、〈即自存在〉(現存在)や〈対自存在〉(本来的存在)

とに区別して認めるでもない(これは外的〈世界(自然)〉がヴェーユにいう〈必然性〉だから である)。この〈即自(存在)〉がまた〈対自(存在)〉にさせられるは〈意識(即自)〉が〈わた し〉の手助け(仲立ち)を得て可能になった。しかるにその〈わたし〉(の〈存在〉や〈無〉)は 彼にいう〈統合〉において取り上げられるだけであった。そこでは〈意識(対自)〉に「付け足 しにされた」〈わたし〉が、次いで〈わたし〉に「付け足しにされた」外的〈世界〉(〈生の現実〉) がこの順序にて各〈存在〉し、しかも各〈無〉にされることにあった。つまり〈わたし〉や外的 〈世界〉は〈身体〉と同様、主にではなく、従に扱われたことになる。これだからして、彼の哲 学は〈意識(即自と対自という各〈観念〉)〉を中心にしただけの、そうした「観念論哲学」以外 でもはやないといわざるを得ないわけである。この〈意識(即自と対自)〉はそのうえ〈わたし〉 ではなかったのだから、彼は〈わたし〉(の語)を〈即自〉の〈対自〉への〈変化(変身)〉のた めに、〈観念〉 用語の一として用いずにおれなかった。かつこの哲学(観念)上の〈わたし〉が〈意 識(即自)〉を〈意識(対自)〉にしよう〈観念〉を〈生の現実〉に向けて実現さすようにみせる には、〈身体〉の「動き」を伴なわせる〈わたし〉がではなく、〈わたし〉なる〈能動〉の〈わた し〉が必要であったのだ(繰返すが、〈生の現実〉に関与するのは〈意識(即自)〉ではなかった し、〈意識(即自)〉は〈即自〉の方から〈わたし〉にかかわるのでもなかった。〈わたし〉の方 が〈意識(即自)〉に関係することができた。それが〈わたし〉なる〈能動〉の意味するところ であった)。かつまた〈身体〉と同一の〈わたし〉がでなしに、〈身体〉と切り離された〈わたし〉 が、そして例の〈投企〉なる〈観念〉と〈同化〉したと捉えられる〈わたし〉が〈能動〉(〈わた し〉自身の〈能動〉という「動き」)を可能にした。だからこの〈わたし(投企)〉こそが〈生の 現実〉(外的〈世界〉)に「働きかける」ことができるのであり、「働きかける」という表現が許 されたのである。だが〈わたし〉はこのように、彼の哲学にとって、〈投企〉なる〈観念〉を伴 なわせたうえでの、実際に「動き」得る〈能動〉の役割しか受け持たされてはいないし、これが 〈意識(即自と対自)〉に役立つことであれば、およそ〈わたし(投企)〉として現に〈動〉いた 体験が彼の哲学の土台になっている、あるいは〈わたし〉が主である哲学になっているとはいえ なくなろう。「体験」といわせるならば、〈実在論〉にかかわり得ることも予想されようが、彼の 哲学が〈わたし〉の「体験」に基づかないとみる以上、〈実在論〉に与することさえなかろう。 さらに〈意識(即自)〉自身による「体験」もなくして、上記していた〈対自〉の〈無〉のみか、 〈即自〉の〈無化〉と彼の哲学に語られたは、〈即自〉や〈対自〉という各〈観念〉は当然のこと、 その〈無化〉や〈無〉は〈理性(知性)〉でもって〈産出〉される〈観念〉としての〈無化〉や〈無〉 でしかない。筆者が彼に〈無化〉すれば〈無〉になるといわせる、この〈無〉は何を連想させる か問うたとき、たとえば前記して、何らかの「仕事の完了」に当てはまるものとし、こうした例 から、〈対自(無)〉から〈即自〉へ、また今度は〈無化〉になる〈即自〉から〈対自(無)〉へ 死に至るまで繰返すのが、〈人間存在(意識とわたし)〉の生であると捉えさせた。だが〈意識(対自)〉や〈わたし〉が万が一でも各〈無〉になり得たにしろ、それでも〈生の現実〉(外的〈世界〉)が〈無〉であることがあろうか(〈無〉となった〈生の現実〉はたとえば木々の〈存在〉を語れない(つまり〈精神〉に木々が「受容され」ない)はずなのに、木々が〈存在〉しているではないか。しかしこの〈無〉は〈意識〉全体のうちの一〈場〉〈精神〉に関係なさそうである)。したがって〈生の現実〉(外的〈世界〉)が彼に〈無〉にさせられると語らせる分を〈観念〉で補わせるしかなくなるし、それこそ〈観念論〉であることの証しとなる(また彼が〈意識(即自)〉は外的〈世界〉(生の現実)に関係しないとした独自の見方を主張したいのであれば、この分のことも〈観念〉で証明さすほかなかろう)。筆者にこのように質された、サルトル哲学は、要はこの〈観念論〉がそれ自身に〈存在論〉を含み語る哲学は、それでもデカルト以来の、三部門をめがける伝統的哲学に与するのか、これに対し、ときに取り上げられた、ヴェーユ哲学に名付ける「身体論」や「運動論」は伝統的哲学になり得るのかどうか、いずれにせよ、哲学とは一体何か、伝統的哲学以外の哲学は哲学といわれるのかどうか、さすれば今一度、哲学を見直さねばならぬのが今日のことではなかろうか。

なお、筆者は上記した通り、サルトルを中心に、ときに同時代のヴェーユまでも論じてみたが、二人の生が同じ生きることに変わりなくば、筆者はヴェーユの生き方に脱帽せずにおれない。〈意識(対自)〉をこの〈意識〉や〈わたし〉でばかりか、〈生の現実〉(外的〈世界〉)で〈無〉(すなわち〈自由〉)にせよといわせるサルトルの現実的生き方よりもだ。〈無〉(すなわち〈自由〉)までを見据えて、彼はそこに到達させる〈観念〉(用語)を次から次へと作り出す、知的作業とその巧みな操作を試みていたであろうし、そこから意欲的な新しき〈観念〉を導き出したは、彼の反骨精神ゆえに、真摯に生きることに欠ける、または〈知的誠実さ〉に欠けるためかは知らぬが、かかる〈観念〉で「ものごと」すべてを強因に押し切ろうとする傲慢さを持ち合わせていたように察知される。ただかかる〈観念〉が集合し多くの思想に展開されていくにしても、たとえば〈生の現実〉からする〈諸感覚〉のかの〈精神〉への「受容」における〈精神〉の役割は果たしてそれだけなのか。これ以外があるかどうかさえ、彼は定かにしていない。まさか〈意識〉を明らかにさせるべく、この〈精神〉が、もしくは〈わたし〉が使用されたわけでもあるまいに。だから筆者としては、その一一を読む解くに、多くの〈観念〉(思想)がこの一一に語られる必要があると判断され、このような長い拙論になったことを断っておかねばならない。

註

- (1) これは前号「ヴェーユと実存主義者たち⑦」(「新潟大学言語文化研究」紀要、第16号、2011年6月) に続く拙論である。
- (2) Jean-Paul SARTRE (L'être et le néant) (Gallimard) P.318
- (3) Ibid., P.82
- (4) René DESCARTES (ŒUVRES ET LETTRES DE DESCARTES~TRAITÉ DE L'HOMME~)
 (Gallimard) P.P.851-852

《Or, entre ces figures, ce ne sont pas celles qui s'impriment dans les organes des sens extérieurs, ou dans la superficie intérieure du cerveau, mais seulement celles qui se tracent dans les esprits sur la superficie de la glande H. où est le siège de l'imagination, et du sens commun, qui doivent être prises pour les idées, c'est-à-dire pour les formes ou images que l'âme raisonnable considérera immédiatement, lorsqu' étant unie à cette machine elle imaginera ou sentira quelque objet. (ところで、これらの表象のうち、この機械 (身体) に結合された理性的魂が何らかの対象を想像したり感じたりするときに、その理性的魂が直接思惟 するかたちや像、すなわち観念とみなされなければならぬ表象は、外的感覚諸器官あるいは脳の内表面に 刻み込まれる表象ではなく、(動物) 精気によって、想像と共通感覚の座である腺Hの表面に描かれる表象 だけなのである。(括弧内は錐者))〉(デカルトにいう〈表象(figure)〉と〈観念(idée)〉に対し、サルトルは例の《L'être et le néant》のなかで、それぞれ〈表象(représentation)〉と〈観念(notion)〉(各P.318 など)(また〈表象的〉として〈représentatif〉(P.362など))を使用するからして、原語は相違するといえ ども(ただし〈idée〉の使用がサルトルに無いわけではない。たとえば〈Introduction(序論)〉Iの表題は〈L'IDÉE DE PHÉNOMÈNE(現象という観念)〉(P.11)になっている)、上記の同一訳語とし、ここは原語の 違いを問わないと断わりおく)。

- (5) Jean-Paul SARTRE (L'être et le néant) (Gallimard) P.498
- (6) Ibid., P.412
- (7) Ibid., P.523
- (8) Ibid., P.553
- (9) Ibid., P.290
- (10) Ibid., P.378 (Le corps ne saurait être pour moi transcendant et connu.)
- (11) Ibid., P.378
- (12) Ibid., P.377
- (13) Ibid., P.353
- (14) Ibid., P.388
- (15) Ibid., P.401
- (16) Ibid. P.388 (Autrui existe pour moi d'abord et je le saisis dans son corps ensuite; le corps d'autrui est pour moi une structure secondaire. (他者はまず、わたしにとって実存(存在)する。次いで、わたしは 他者を他者の身体において捕らえる。他者の身体はわたしにとってひとつの二次的構造である(括弧内は

筆者))〉。(彼にいう、この〈対他−身体〉にあって、「対象」としての〈身体〉や〈対自としての身体〉に 比較するに、〈他者の身体〉は実物たる〈他者の身体〉をさす。また〈他者の身体〉は〈意識(即自)〉に ではなく、〈わたし〉によって捕らえられる。このことは〈意識〉が外的〈世界〉に関係しないとみたこと の証左になる)。

(17) Ibid., P.553